

スベランスキイと話してゐると、自分の考へを言表はひすだけの事さへ困難に感じた。彼はこの有名な人の人格を観察するのに餘り身を入れ過ぎてゐたのであつた。

「恐らく個人の功名心のためには」と、スベランスキイは徐ろに言葉を差挿んだ。

「そして、或る程度までは國家の爲に」と、アンドレー公爵は言つた。

「それは何ういふ意味で？……」と、スベランスキイは眼を落としたが徐ろに言つた。

「私はモンテスキューの讚美者です」と、アンドレー公爵は言つた。「Le principe des monarchies est l'honneur」(君主政治の原則は名譽である、)といふ彼の論は、争ふ可らざるものに私には思はれるのです。貴族の或る權利や特權は、左様いふ情操を維持する爲めの手段のやうに私には思はれるのです。」

微笑みが、スベランスキイの白い顔から消えた、そして、それが無くなつたので、彼の容貌が非常に好くなつて來た。おそらく、アンドレー公爵の思想が、彼には興味あるものに思はれたのであらう。

「Si vous envisagez la question sous ce point de vue, (若し、あなたが、さういふ見地からこの問題を御覽になるなら、)と、彼は如何にも難かしさうにフランス語を發音し、ロシアを語を話す時よりも一層ゆつくりと、しかし飽くまでも落着き拂つて言ひ始めた。彼は名譽、即ち l'honneur は、政府の事務の運用に不爲めとなるやうな特權に依つては維持する事の出來ないものであること、名譽、即ち l'honneur は、非難のある行爲を避けやうとする消極的概念か、若しくは稱讚乃至稱讚の表現たる報酬を得やうとする競争心の根源か、その何れかであると言つた。

彼の議論は要點を掴むてゐて、簡潔で、明瞭であつた。競争心の根源たるその名譽を維持するのに最も好い制度は偉大なる皇帝ナポレオンの L'union d'Honneur と同種類な、政府の事務の運用を毀損することなく、反つて夫れ

を助ける制度であつて、階級とか宮中の特權とかではないのです。」

「私にはそれには反對はしません、しかし、宮中の特權が同一の目的を達する事は否定しやうはありません」と、アンドレー公爵は言つた。「あらゆる廷臣は自分の位地を辱かしてはならないといふ責任を感じるんです。」

「併し、あなたはその特權に依つて利益を得るのを好ましくお思ひにならなかつたのですね、公爵」と、スベランスキイは、相手にとつて迷惑な議論を證儀を守つて切り上げたいといふことを微笑みに見せながら言つた。「水曜日にお出で下さるなら、その時まではマグニツキイにも逢つて置きますし、あなたに興味のある事を何かお話しする事が出來ませうから、それに、もつと色々お話ししたく思ひますから。」

彼は眼を閉りながら、點頭をし、そして誰にも氣付かれずに逃げ出さうとして、フランス流に暇をひもせず客室から出て行つた。

六

ペテルブルグ滞在の最初のうちに、アンドレー公爵は、自分が孤獨の生活の間に拵へた、物を考へる習慣が、ペテルブルグに於て自分の心を占領したくだらない注意の爲めに全然弱められて仕舞つた事に氣がついた。

晩に、家へ歸ると、彼は備忘録に、四ツ五ツ避け難い訪問や、時間の定まつてゐる約束を書き留めた。生活の機械裝置、何處へも時間通りに行けるやうに一日を割り振ることが、彼の生活力の大部分を奪つた。彼は何にもしなかつ

た、何にも考へさへしなかつた、それに考へる時間もなかつた、たゞ談話をしただけであつた、そして、以前田舎では考へる時間のあつた事に就いて、巧みに話すだけであつた。

彼は時とすると、同じ日に同じ言葉を、異つた聴衆に繰り返してゐる自分に不圖氣が付いて厭な氣持がした。けれど彼は、自分が何にも考へてゐないといふ事を反省する暇もなかつた程毎日のやうに忙がしかつた。初めてコチュツペーの家で逢つた時と同じやうに、スベランスキイは水曜日水曜日に自分の家でアンドレー公爵と長い打解けた話をした、彼は家へたゞ一人バルコンスキイだけ迎へた、そして彼に大きな印象を與へた。

アンドレー公爵は、人間の大多数を卑しむべき價値のない動物だと考へてゐた、そして、誰か他の人の中に、それを慕つて自ら奮勵するやうな完全な生きた模範を見出したいと切に願つてゐたので、彼は、スベランスキイに於て、全く理性的な、有徳な人間の典型を見出したと直ぐに信じた。若しスベランスキイが、アンドレー公爵と同じ社會に屬してゐたら、若し彼が同じ生立ち、同じ道義的傳統を持つてゐたのであつたら、バルコンスキイは、スベランスキイの性格の弱い、人間的な、非英雄的な方面を直ぐ看破したに違ひないのだが、心のこの論理的傾向が彼には不思議に思はれ、そして夫れが充分に解し得られなかつたが爲めに、一層多くの尊敬を彼の心に起させたのであつた。その上、スベランスキイは、アンドレー公爵の才能を認めた爲めか、それともアンドレー公爵の歸依を得て置くのがいと思つた爲めか、彼はアンドレー公爵の前に自分の沈着な、偏執のない聰明を見せ、そして、自負の念と相提携する、そして、自分と相手とが、世間の他の者の愚かな事や、自分達自身の考への聰明と深遠とを理解することの出来る唯一の人間であるといふ、暗黙の間の假定から成り立つてゐる巧妙なお世辭で、アンドレー公爵を感しがらせた。

水曜日の晩の長い會話の中に、スベランスキイは一度ならず、「我々の間では、トラヂシヨ傳習の普通の軌道から離れた如

何なる物をも見のがさない。」……とか、或は微笑して、「併し我々は狼にもよく食はせ、そして、羊にも害のないやうにしたい。」……とか、「奴等にはそれが會得されないのだ。」……とか言つて……始終、「我々、即ちあなたと私とは、奴等が何であるか、我々が何んな人間であるかが解つてゐる。」と言ふやうな表情をするのであつた。

スベランスキイとのこの最初の長い會話は、アンドレー公爵が最初スベランスキイに逢つた感情を強めただけであつた。彼は、勝力と根氣とに依つて權力を得、そして、それをロシアの爲めばかりに用ゐてゐる、大きな知力のある沈着な正確な判斷力を持つてゐる人間をスベランスキイに見た。アンドレー公爵の眼には、スベランスキイは丁度、自分自身もさうありたいと思ふやうな——人生のあらゆる現象に對して合理的な説明を見出し、合理的な事柄のみを重要と認め、そして如何なる事柄にも道理の標準を當てはめる事の出来る——さういふ人間であつた。スベランスキイが説明すると、あらゆる物が如何にも明晰な形になり、如何にも明白になつて、アンドレー公爵が、どんな問題に於ても彼に同意しない譯には行かなかつた程であつた。よし、アンドレー公爵が議論したり、反對説を唱へたりしたころで、それは唯單にスベランスキイの思想から獨立して、スベランスキイの思想に全然支配されてゐたくないといふ殊更らな目的を持つてしたのに過ぎなかつた。何も彼も正しかつた、何も彼も當然さうあるべき通りであつた、が、其れでもたゞ一つ、アンドレー公爵を不安にさせた物があつた。それは、その心の中に立ち入る事を決して許さないやうに見える、冷たい、鏡のやうなスベランスキイの眼と、その軟かい白い手とであつた。人が、よく、權力のある人々の手を視るやうに、アンドレー公爵は本能的にその手を視た。その鏡のやうな眼と、その軟かさうな手が何と云ふこともなくアンドレー公爵を苛々させた。彼は又、自分がスベランスキイに認めた、他の人々に對する過度な侮蔑や、彼が自分の意見を支へる爲めに用ゐる論法の種々なものには不愉快な驚きを覺えた。スベランスキイは類推法を除いた以外

の有らゆる可能な思想上の武器を用ひた、そして、一つの防禦線から他の防禦線への移り變りが、アンドレー公爵にはあまりに亂暴なやうに思はれた。或る時は、彼は、實際家の立場に立つて理想家を非難するかと思ふと、次ぎには、諷刺的な方向を取つて、相手を皮肉に嘲弄し、やがてまた嚴密な論理的の位置を保持するとか、形而上學の領分へ飛び去るとか、するのであつた。(この最後の方法は、彼が議論をするに取り分け好んで用ゐる論法であつた。)彼は、問題を形而上學の最も高い領分にまで引き上げて、空間や、時間や、思想の定義に移り、そして、相手をやり込めるやうに議論を運んで置いて、再び元の議論の平面へ降りて来るのであつた。スベランスキイの心の主な特徴としてアンドレー公爵に印象を與へたものは、理性の力及びその權威に對する彼の躊躇しない、動かし難い信仰であつた。スベランスキイの頭腦あたなが人は要するに、自分の考へる事を、すつかり言ひ現すことは出来ないといふ——アンドレー公爵には至つて普通な——かしがへ 考想を受け容れることの出来なかつた事は明句であつた。自分の考へた事や、自分の信じた事が凡て、無意味な愚かしい事ではあるまいかと疑うやうなことは、彼には一度もなかつた。そして、スベラハスキイの心のさういふ特質が、最もアンドレー公爵を惹き付けたのであつた。

スベランスキイと知己ちかづきになつた初期の間、アンドレー公爵は、彼が嘗つて、ボナパルトに對して感じたのと同じやうな、熱烈な熱誠な讚美を彼に對して持つた。スベランスキイが僧侶の息子であるといふその事實——それは愚かな多くの人々をして、輕侮された階級の人として、野卑な侮蔑を以つて見るやうにさせた——が、アンドレー公爵をしてスベランスキイに對する感情の取扱ひ方を特にデリケート 微妙にさせ、そして、如らず識らずの間に、さうした感情を彼の心の中に強めた。

ペルコンスキイが彼と共に過した最初の晩に、二人は法典修正の委員會の事を話した。そして、スベランスキイは

「アンドレー公爵に、その委員會はもう百五十年も前から設置されてゐたものである事や、幾百萬の金を費やした事や、そして何にもしなかつたといふ事や、それからロウゼンカムフがあらゆる種々な法典に貼紙を貼りつけたといふ事やを皮肉に話した。

「で、國家が幾百萬の金を費して得たものといへばそれきりです！」と、彼は言つた。「我々は元老院に新しい司法權を與へたいと思ふんです、所が、法律が一つもないのです。あなたのやうな人が、公爵、政府へ這入らないのは罪惡だといふのは、さういふ理由からなんです。」

アンドレー公爵は、さうした事業には多少法律學の素養が必要である事、自分にはそれが皆無である事を述べた。「併し誰にだつて有りませんよ、そんなら、何うなさらうと有仰るのです？ それは *circulus vitiosus* (運命の圈) なのです、それは何うかして破り抜ければならないものです。」

一週間経たないうちに、アンドレー公爵は軍規改正委員會の一員となつてゐた、そして——全く思掛けなくも——又、法典修正委員會の一部の委員長であつた。スベランスキイの要求に依つて、彼は修正中の民法の一番初めの部分を受け持つた。そしてナポレオン法典と、ジャスチニア法典を参照して、人權の部の修正に従事した。

二年前、即ち一八〇八年の初めに、ビエールは自分の領地への旅からベテルブルグへ歸つて来た。そして自分の意志からではなしに、ベテルブルグに於ける共済組合員フライエスの間の主だった位置に就いた。彼は食事や葬禮の會所を組織し新會員を入れ、種々の會所を造ることや、眞實な記録書類を手に入れる事に盡力した。彼は、寺院を建築するのに自分の金を出したり、自分の力の及ぶ限り、大多數の組合員が吝で不規則であつた慈善金の、未納の分を埋め合せたりした。彼は自費で、始ど他人の助けを借らずに、ベテルブルグに組合で立てた貧民院を維持した。

その間も、彼の生活は、以前と同じ誘惑、同じ放縱に打負けて、昔と同じ風に續いて行つた。彼は立派な食事を好み強い飲料を好んだ。そして、さういふ事に負けるのは、不道德であつて、墮落であると考へながらも、自分がその中に動いてゐる獨身者の社會の誘惑に抵抗する事が出来なかつた。

而も、その活動や放蕩の渦中であつてさへ、ビエールは一年経つと、自分の立脚した共済組合と云ふ地面が、その上に確り踏み堪へやうとすればする程、だん／＼自分の足下から滑り去て行くやうに、次第に感じ始めた。それと同時に、彼は、地面が足下から遠く滑つて行けば行く程、組合に對する彼の羈絆キツネが益々密接になつて行くのを感じた。組合に這入つた時、彼は、滑かな泥沼の面に平氣で足を置いた人のやうに感じたのであつた。片足おろすと、彼は沈んだ、で、自分の立つてゐる地面の確かなものであるのを自分自身に信じさせるために、彼はもう片方の足をその上下した、すると、益々深く沈んで行つて、泥の中で動けなくなり、今では自分の意志に反して、泥沼の中に膝まで没して掻いてゐるのであつた。

オオシブ・アキセーキツチはベテルブルグに居なかつた。(彼はベテルブルグの會所の事務とは全然關係を斷つて、今では決してモスクワを出なかつた。)此處の會所の會員である同胞達は、皆ビエールが日常生活に於て知つてゐる人

々であつた、そして、彼等を、例へば私生活に於いては主に弱い、價値のない人格の人々として知つてゐる。B公爵とか、イワン・ワシリーキツチ・Dとか云ふ風には見ずに、唯單に共済組合の同胞としてのみ見る事は彼にとつては困難であつた。彼は組合の胸掛けや徽章の下に、彼等が浮世の生活に於て得やうと力めてゐる制服や勳章を見ない譯には行かなかつた。慈善金を集めたり、十人ばかりの組合員——その半分はビエール自身と同じやうに豊かな生活をしてゐる人々——から約束をされた——而も大抵はそのまゝお流れになつて仕舞ふ——二三十留レリブルの金の計算をしたりした後で、屢々、彼はあらゆる組合員が隣人の爲めには凡ての財産を抛たうと約束したその共済組合の誓約に就いて考へた、すると、疑惑が彼の心の中に起つたが、彼はそれから遁れやうと力めるのであつた。

彼は、自分の知つてゐる凡ての組合員を四つの階級に分類した。第一の階級には、會所の事務や、人類の爲めに盡さうといふやうな事には何等實際的興味を持たずに、たゞ組合の科學的秘密や、神の三重の重義や、物の最初の三元素——硫黃、水銀、鹽——とか、正方形乃至ソロモンの宮殿の總ての形象に就いての意義や、に關する問題にのみ力を入れてゐる組合員を數へた。ビエールは、古參の組合員は大抵これに屬してゐる——ビエールはオシブ・アレキセーキツチをその中に數へた——この階級の組合員を尊敬した、が、彼はさういふ人々と興味を同じくしなかつた。彼の心は共済組合の神秘的方面には向いてゐなかつた。

第二の階級には、ビエールは、共済組合の主義の中に自分達の進むべき眞直な、そして、はつきり解つた道を見出さうとして、迷つたり探し求めたり、そして未だそれは見出せないが、それでも尙ほ見出さうといふ望みを持つてゐる自分自身、及び自分自身と同じやうな組合員を包括した。

第三の階級には、彼は大多數の組合員——即ち共済組合の中に、外形上の形式や儀式の外には何も見ない、そして

その主旨や意義には一向關はずに、その外形上の形式を嚴重に守る事に重きを置いてゐる人々の數人を算へた。ウィ
ラールスキイ、それから、會所の總長さへさうであつた。

第四の階級も亦多數の組合員、特に近頃組合に這入つた人々の多數を含んでゐた。ビエールの觀察し得た所だけで
は、これ等の人々は何も信ぜず、何も望まなかつたが、たゞ奥會所に多く集まつてゐた、縁故とか地位とかの爲めに
勢力のある、金持ちの若者達と交際したい爲めばかりに組合に這入つた人達であつた。

ビエールは、自分の爲てゐた事に不満足を感じ始めた。共済組合は、少くとも、彼が此處で知つた限りでは、たゞ形
式的の儀式にのみ據つてゐるやうに、時々、彼には思はれた。彼は共済組合そのものを疑はうとは決して想ひもしな
かつたが、ロシアの共済組合は邪路に踏み込んで、その元もとの道から離れつゝあるのではないかと疑ひ始めたのであつ
た。で、その年の暮近くに、ビエールは組合の一層高い神秘に身を委ねる爲めに外國へ行つた。

ビエールがペテルブルグへ歸つて來たのは一八〇九年の夏であつた。ロシア及び國外にある共済組合員の間に取り
交はされた通信に依つて、ベズウホフが國外の高い位置にゐる多くの人々の信任を得るに至つたことや、多くの神秘
を教へられ、高い格式に擧げられたことや、ロシアの共済組合の進歩に貢献するに違ひない多くの物を持ち歸つとへりつ
ゝあるといふ事が知れた。ペテルブルグの共済組合員は誰れも彼れも彼に逢ひに来て、彼に取り入らうと力め、誰も
彼も、彼が自分等の爲めに用意しつゝあつた何物かを貯へてゐるだらうと思つた。

第二組合の會所の嚴肅な會合が催され、その會合で、ビエールは、國外にある共済組合の首領達から、ペテルブル
グの組合員達に向つてビエールに托して送つた通牒を傳へやうと約束した。會合は充分な出席であつた。常例の儀式

が済むと、ビエールは起ち上つて話し初めた。

「親愛なる同胞諸君、」と、彼は草稿を手を持つて、赤くなつて、躊躇ためらひながら始めた。「會所の隠れ家の中に、吾々の秘
密を守つてゐるだけでは十分ではない、——吾々の要求する所は活動すること……活動することである。……吾
々は當に眠らうとして居る、で、我々は活動しなければならぬ。」

ビエールは草稿を開いて讀み始めた。

「純正なる眞理を傳播し、徳に到達する爲めには、」と、彼は讀んだ、「吾々は人から偏見を除き、時代精神と調和した
主義を弘め、新時代の人々の教育を企て、最も聰明なる人々と何うしても解けないやうに堅く同盟し、大膽に、同時
に用心深く、迷信、不義、愚劣に打勝ち、共通の目的に於て相連結し、そして力と權威とを持つ人々を、吾々に信頼し
てゐる者達で作らなければならぬ。」

「この目的を達する爲めには、吾々は徳をして惡徳を壓倒せしむるやうにしなければならぬ。正直な人が、この世
に於いてさへ永遠の報酬を得られるやうに、盡力しなければならぬ。併しながら、是等の偉大なる企てに於ては、
我々は現在の政治上の制度に甚だしく妨げられてゐる。現在の狀態を我々は何うすべきであらうか？ 我々は革命を
歓迎し、あらゆる物を覆くつがし、暴力に依つて暴力を撃退すべきであらうか？……否、我々は到底さういふ事は出来
ない。暴力に依るあらゆる改革は排斥すべきである、何故なら、人間が現在のまゝである限り、暴力に依る改革は、
何等惡徳を矯正する所がないからである、而して智慧は少しも暴力を必要としないからである。」

「吾が組合の計畫全部は、確信と目的——惡徳と愚舉とを到る處に於いて有らゆる手段に依つて鎮壓し、價值のある
人々を塵埃の中より引上げて、我々の組合に加入せしめて、才能と徳とを保護する目的——の一致に依つて結合した

る、品位あり、徳ある人々を訓練するといふ事の上にその基礎を置かなければならない。それでこそ始めて我が組合は、秩序紊亂の主動者の双手を縛し、彼等にそれと覺らせることなしに、彼等を制禦するの力を知らず識らずの中に得るのである。要するに、我々は社會上の義務を侵害することなくして、全世界に及ぼす可き世界的の權威を有する一種の政府を建設したのである。その政府の下にあつては、他の凡ての政府は各々その普通の道を續ける事が出来る。吾が組合の大目的、即ち惡徳に對する徳の勝利を妨げる物を除いた以外の他の凡ての事を爲す事が出来るのである。この目的はキリスト教そのもの、目的である。それは人々に神聖で且つ善良であれと教へ、又、彼等自身の利益の爲めに、より善良な、より賢明な人々の教訓及びその模範に従ふやうにと教へて來た所のものである。

「凡ての人々が闇黒の中に沈んでゐた時代には、勿論訓誨だけで十分であつた、眞理の物珍らしさが、それに特別の力を與へたのだ、が、今日ではそれ以上の強い手段が我々に必要である。今や自己の感覺に依つて導かるゝ人は、感覺に觸れ得べき魅力を徳の中に見出さなければならぬ。欲情は根絶させることは出来ない、我々は只管、それを高尚な目的に向けるやうに努めなければならぬ、それ故に、何人も、徳の範圍内に於いて自分の欲情に對する満足を見出す事が出来るやうでなければならぬ。そして、吾が組合はその目的に對する手段を供給しなければならぬのである。我々が有らゆる國に有爲の組合員を可なり多數に持ち、その各々がまた他の二人を訓練し、そして、凡ての者が密接に一致協力するやうになるや否や、その時こそ、これまで既に人類の爲めに秘かに多くの事を爲し來たつ吾が組合にとつては、如何なる事をも爲し得られるやうになるであらう。」

この演説は單に異常な印象を與へたばかりでなく、會所の中に興奮の戰慄を起させた。組合員の過半数は、この演説の中に、「啓蒙派」の危險なる計畫を見たので、ビエールが驚いた程、この演説を冷淡に受け取つた。總長はこ

の演説に對して反對を唱へ出した、ビエールは益々熱心になつて自分の意見を説明し出した。こんなに激しい會合は久しくなかつたことである。會所は二派に分れた、一つの派はビエールを「啓蒙派」と非難して、彼に反對した、他の派は彼に賛成した。ビエールはこの會合に於いて、初めて人の心の限りなく多種多様である事に驚かされた、それは如何なる眞理も二人の人に同一に見られるやうなことは決して無いといふ事になるのであつた。

組合員のうち、ビエールの味方であると思はれたやうな人々でさへ、ビエールが賛成出来ないやうな制限や差違て各自それ／＼にビエールを遮つた。ビエールが主として希つたのは、何時も、自分の思想を、自分が考へた通りその儘、他人に傳へるといふ事であつた。

會議の終りに、總長は惡意と皮肉とをもつて、ベズウカフに向つて、彼の性急に就いて喋つた、そして、彼にこの議論をさせたのは、徳に對する愛の心からばかりではなくて、喧嘩好きな熱情からだと言つた。

ビエールは何とも答へなかつた、が、簡單に自分の提議が容れられるか何うかを尋ねた。彼は、それは、さうはなるまい言はれた。で、彼は定例の儀式を待たずに會所を出て家へ行つた。

八

再び、ビエールは、彼が非常に恐れてゐた愛辭に襲はれた。會所で演説をした後三日間、彼は、誰にも逢はず、何處へも出來ずに、家で長椅子の上に横たはつてゐた。

その時、彼は妻からの手紙を受け取つた、妻は何うか自分に逢ひに来て呉れるやうにと頼み、彼故自分の不幸の事や、自分の全生涯を彼に献じて仕舞ひたいといふ事やを書いてよこした。

手紙の終りに、彼女は一兩日のうちに外國からホテルブルグへ着く筈だと知らせてあつた。

手紙の後直ぐ、ビエールが少しも尊敬してゐない共済組合員の一人が、彼の獨居を破つて這入つて來た。その男は、ビエールの夫婦間の問題に話を轉じて、兄弟らしい忠告の仕方^{したか}で、ビエールの妻に對して嚴酷なのは間違つてゐるといふ、そして、後悔した者を宥さな^いのは共済組合の第一の主義に悖つてゐるといふ自分の意見を彼に與へた。それと同時に、ビエールの姑ワシリーイ公爵夫人から、非常に重大な件に就いて相談したい事があるから、たとひ五六分間でもいゝ、自分の所へ來て呉れと云ふ使ひが來た。ビエールは公爵夫人達の間に、自分を妻と仲直りさせやうとする企^{たくら}みがあるのを知つた、が、彼は、今の氣分ではそれを厭だとも思はなかつた。彼には、凡てが何うでもよかつた。ビエールは、人生の何んな事柄をも決して重大な事とは考へなかつた、そして彼を苦しめてゐた愛憐の影響のために、彼は自分の自由にも、妻を罰して自分の意の儘の事をする事にも、何等の意味を附けなかつた。

「誰も正しくはない。誰も咎むべきでない。だから彼女だつて咎むべきではない。」と、彼は思つた。ビエールが妻と再び一緒にゐる事を直ぐ承諾しなかつたとすれば、それは唯彼が愛憐な心の有様に陥つてゐて、如何なる行動も執ることが出来なかつたからであつた。妻が彼の所へ來たのであつたら、彼は今、妻を追ひ出す事は出来なかつたに違ひない。ビエールが今、心を奪はれてゐる問題に比べては、彼が妻と一緒に暮らすとか暮らさないとはいふ事が、何であつたらう？

妻にも姑にも返事をせずに、ビエールは直ぐ、その晩遅く出發して、オシツプ・アレキセーキツチに逢ふ爲めにモ

スクワへ馬車を驅つた。

ビエールは自分の日記から書いた。

モスクワ、十一月十七日。私は、恩人に逢つて今歸つて來たばかりのところだ、で、私は急いで自分の感じてゐる事を皆書き留める。オシツプ・アレキセーキツチは貧乏に暮らしてゐる、そして、この三年このかた膀胱の痛む病氣に苦しんでゐる。誰も、彼から呻き聲とか、不平の言葉とかを聞いたことはなかつた。朝から夜遅くまで極く簡素な食事を取る時の外、彼は始終科學の研究をやつてゐる。

彼は私を親切に迎へて、自分の臥てゐる寢臺^{ベット}の上に私を座らせた。私は彼に、東洋やエルサレムの騎士達のやゝやうな合圖をした、彼も同じことをして應じた、そして、物知らずな微笑を浮べて、私がブルシヤや、スコットランドの會所で學んだり得たりした事を訊いた。私は出來るだけよく何も彼も彼に話した、吾がホテルブルグの會所で私が提議した活動の主義を彼に繰返へし、私に與へられた面白くない待遇や、私と組合員達の不和の事を彼に話した。オシツプ・アレキセーキツチは、何か默想した後、私の前に、この問題に對する自分の意見を悉く披露した、それは、直ぐ私の凡ての過去及び私の前に横たはつてゐる凡ての進路を照らしてくれた。彼は私に組合の三重の目的、即ち――

- (一) 神聖なる神秘の保存及びその研究。
 - (二) それを受け入れる爲めに自己を純化し、改造すること。
 - (三) かゝる純化に對する努力を通して人類の向上をはかること。
- を覺えてゐるか何かうと聞いて私を驚かした。

是等の三つの目的のうちで、何れが一番最初であり、一番大事であつたのかと彼は訊いた。疑ひもなく夫れは自己改造と自己純化である。我々が有らゆる境遇から超越して常に努力する事の出来るのは、この目的に對してだけである。併し、それと同時に、我々が最も大きな努力を要するものも矢張りこの目的である、そして、それが爲めに、我々は高慢に迷はされ、その目的を見失つて、不純の心では受け入れる資格のない神秘に徹底しやうと努めたり、或は自分自身から悪徳や醜態の例を出して置きながら、人類の改造を求めたりするやうになるのである。「啓蒙派」は、世間的の活動に誑かされ、高慢で得意になつてゐるから、明かに純粹な教義ではない。この論據から、オシツプ・アレキセーキツチは、私の演説と私のしてゐる一切の事を非難した。私は心の底で彼に同意した。

私の家庭の事件を話すと、彼は、「組合員の第一の義務は、前にもお話しした事がある通り、自分自身を完全にすることです。併し、我々は屢々、自分の生活のあらゆる難件を除いて了へば、一層好くこの目的を達する事が出来るかも知れないと想像するものです。それは全く反對ですよ、あなた」と、私に言つた。「我々はこの世の煩ひの真中にゐてこそ、三ツの大きな目的、即ち――

- (一) 自己を知る事、人は比較に依つてのみ自己を知る事が出来るからである。
- (二) 一層完全になる事、これはたゞ奮闘に依つてのみ得られるものである。
- (三) 主要なる徳即ち死の愛に到達する事。

に達することが出来るのです。人生の腐敗だけが、我々に有らゆる虚榮を見せてくれ、死に對する我々の本然の愛を強め、寧ろ新しい生に再生させて呉れる事が出来るのです。」と、彼は私に言つた。オシツプ・アレキセーキ

ツチは、肉體上の苦痛が激しかつたに拘はらず、決して生に倦怠してはゐないので、此等の言葉は一層印象が強かつた、彼は死を愛してゐたとは言へ、彼の人格が悉く純潔で高邁であるにも拘はらず、自分では未だ死に對する用意が出来てゐないと感じてゐた。

それから、私の恩人は、創造の大正方形の意義を充分私に説明し、第三及び第七が、あらゆる物の基礎である事を指摘してくれた。彼は、私がペテルブルグの組合員達から身を引かずに矢張り一致協力して行くやうに、そして會所に於ける第二組合の義務だけを行つてゆき、その間に、組合員を慢心の誘惑から救つて、自覺と自己完成の眞の路へ彼等に向けるやうに努力せよと私を訓誡した。尙ほその上、私一人の事に就いては、何よりも第一に私自身の上に絶えず注意しろと忠告して、その目的の爲めに私に一冊の手帳を呉れた、私は今それに之れを書いてゐるのである、そして將來の私のあらゆる行爲を之れに書きつけるべきである。

ペテルブルグ、十一月二十三日。――私は妻と仲直りをした。姑は涙を流しながら私の所へ来て、エレンが此地にゐることや、自分の言ふ事を聞いて貰ひたいと願つてゐることや、彼女が無事であることや、私に棄てられて可哀相であることや、その他いろ／＼な事を言つた。私は一度でも彼女に逢つたら、彼女の願ひを聞きとゞけてやらない譯には行かなくなるに違ひないといふ事を知つてゐた。そんな不確かな状態の中にあつて、私は誰の助けと誰の忠告とを頼りにしてゐるか分らなかつた。若し、私の恩人が此處にゐたら、何うすればいいのか私に教へて呉れたに違ひない。私は自分の部屋へ引籠つて、オシツプ・アレキセーキツチの手紙を読み返へし、彼の會話を思ひ出し、そして、そんな事から私は、懇願者を拒んではならないこと、何人に對しても、殊に私と之れほど密接な關係のある人に對しては救ひの手を差出さなければならぬといふ事、そして私は私の十字架を

負はなければならぬといふ結論に達したのであつた。併し、若し私が正義を行ふが爲めに彼女を宥すとすれば、これからの契ちぎりには切めて、唯精神的の目的だけを持たせることにしやう。私は、さう決めた、で、私は、オシツプ・アレキセーキツチへ左様書いてやつた。私は妻に向つて、過去の事はすっかり忘れて呉れるやうにといふ事や、私が何んな間違つた事を彼女にしたかも知れないが、それはみんな忘れて呉れるやうにといふ事や、それから私には彼女を宥すやうな事は何にも無いといふ事を言つた。彼女にそれを話すのが私にとつては喜ばしいことであつた。再び彼女を見るといふ事が、私にとつては何んなに若しかつたかを、どうか、彼女が知るやうなこのとないやうに！ 私はこの大きな家の上の部屋に住む事にした、そして、私は今新しく初めると云ふことの幸福な氣持を感じてゐる。

九

その時分、いつもよくそんな事があるやうに、宮中や大きな舞踏會などで出會ふ上流社會は、幾つもの團體に分裂して了つた、そして、その各おのが、それ／＼特有の調子を持つた。その中で一番大きいのが、フランス國——ナポレオン同盟を贊助してゐる——ルミヤンツエフ伯爵及びコランクウルの團體であつた。エレンはベテルブルグの良人の家をに落着くや否や、直ぐこの團體に這入つて主要な位置を占めた。彼女は、フランス大使館の館員や、その政治系統に屬してゐる機智と禮儀正しいのとて名高い多くの人々を迎へた。

エレンは、兩皇帝の名高い會見の時に、エルフルトにゐた、そして、其處で、ナポレオン黨に屬してゐるヨウロツパの凡ての有名な人々と密接な交際を結んだのであつた。エルフルトでは、エレンは華々しい成功を博したのであつた。ナポレオンその人でさへ、劇場で姿を見て、あれは誰であるかと訊ね、そして、彼女の事を「*C'est un superbe animal.* (素晴らしいものだ。)」と、言つた程であつた。美しい立派な女としての彼女の勝利は、決してビエールを驚かさなかつた、それは、彼女は年と共に以前より一層美しくさへなつてゐたからであつた。が、彼を驚かしたのは、この二年間に、彼の妻が「*une femme charmante, aussi spirituelle que belle.*」(美しいと共に、才機に富んだ可愛らしい女だ。)」といふ評判を得るやうになつた事であつた。有名なリイニエ公が八頁の手紙を彼女に書いた。ピリピンは、このベズウホフ伯爵夫人の前で第一番に使ふ爲めに自分の警句を大切に藏しまつて置いた。ベズウホフ伯爵夫人の客間へ迎へられる事は、才智のある人であるといふ證明書だといふやうに考へられてゐた。若い人達はエレンの夜會がある前には、その客間で何か話が出来るやうにと、いろ／＼の問題を研究するのであつた、それから大使館の書記官達は勿論、大使達でさへ、彼女に外交上の秘密を打明けた、で、エレンは、或る意味で、一つの權力であつた。彼女の非常に魯鈍なことを知つてゐたビエールは、彼女の宴會や夜會で、政治や、詩や、哲學の談話はなしを聞く度に、當惑と恐慌の一私秒な感じを抱くのであつた。さういふ夜會では、彼は、手品の種が見顯はされはしまいかと始終ハラ／＼してゐる手品師が、感ずるに違ひないと思はれるやうな感覺を経験するのであつた。併し、魯鈍な事が、かういふ客間をうまく取持つには丁度無くてはならなかつた爲めか、それとも騙だまされた人達が、その騙だまされたことを喜んだ爲めか、騙着は見顯はされなかつた。そして *une femme charmante et spirituelle.* (才色共に優れた女)といふ評判は、エレーナ・ワシリーイェウナ・ベズウホフの身に堅く纏まとひついて了つて、彼女はどんな野郎な、どんな馬鹿らしい事も

喋る事が出来、その一言一句に誰も彼もがまながら狂熱したやうになり、そして、その中から彼女自身は夢想もしたかつかつた深い意味を、熱心に見出した位であつた。

ビエールは、この華々しい社交好きな婦人には、全く無くてならない良人であつた。彼は誰の邪魔もせず、また妻の客間に於ける最高調な全般的印象を破るところではなく、その上にも妻の優雅と人を反らさぬ技倆との對照になつて、彼女にとつて都合のいゝ引き立て役になるやうな、茫然した、偏人の、貴人の良人であつた。この二年間、ビエールが絶えず非物質的な興味に精神を集中してゐた事や、その他の何もかにもを心から侮蔑してゐた事が、彼には少しも興味のない妻の團體の中で、故意では得られないやうな、従つて人をして知らず敬せしめるやうな、誰れに對しても同じな、無頓着な、無關心な、慈しみのある調子を彼に與へた。彼は、さながら劇物でもあるかのやうに妻の客室へ這入つて行つたが、誰とも知己であり、誰に對しても同じやうに愛想が好く、誰に對しても同じやうに無關心であつた。彼は、時として、自分の興味のある問題には、その談話の仲間入りをした、で、そんな時には「大使館の紳士達」が居やうと居まいと、一向お構ひなしに、當時の流行語とは常に何うしても調和のとれない彼の意見を、もぐ／＼言ひ出すのであつた。併し、*de la femme la plus distinguée de Pétersbourg* (ステルブルグ中の最も有名な婦人)の偏人の良人に對する一般の評価は今や、誰一人彼の洒落を眞面目に取る者がなかつた程、よく確定してゐた。エレン家で毎日見られた多數の若者の中で、今では官途で素晴らしく成功してゐるパリス・ドルベツコイが、エレンがエルフルトから歸つた後は、ベズウホフ家の一番親しい友人であつた。エレンは何時も彼を「*Hon. Tage* (私の小姓)」と呼んで、まるで子供のやうに彼をあしらつてゐた。彼に對する彼女の微笑は、凡ての者に見せると同じ微笑であつたが、時とするとビエールには、その微笑を見るのが忌はしかつた。パリスは、著るしい、威嚴のある、悲しさう

な恭々しさを以つてビエールに振舞つた。この恭々しい様子がまた、ビエールを攪亂した。彼は三年前妻のために惹き起させられた懊惱の爲めに非常な苦しみをしたので、今では、自分が、第一には名ばかりの良人であるといふ事に依つて、第二には何事も疑ふ事を自分に許さないといふ事に依つて、以前と同様な懊惱がよもや起りはしまいと安心してゐたのであつた。「いや、今では彼女も女學者になつてゐる、以前のやうな過失は承認しなくなつてゐる。」と、彼は考へた。「女學者が優しい情慾に負けたといふ例は嘗てなかつた。」と、彼は自分自身に繰り返へした、この格言は彼が何處かで見付けて、暗にそれを信じてゐたのであつた。が、不思議なことには、妻の客間にパリスの來てゐることが(彼は殆ど何時も其處にゐた)ビエールに肉體的に影響した、それが彼の手足を収縮させるやうに思はれた、そして彼の動作の無頓着と自由とを破壊した。

「何といふ不思議な嫌ひ方だ」と、ビエールは思つた。「一時は、實際あの男が非常に好きだのたのに。」

世間の眼には、ビエールは大貴族で、優れた妻の少し盲目な、間の抜けた良人であると同時に、何にも爲ないが誰の邪魔にもならない、氣の利いた偏人、好人物、立派な男であつた。ビエールの心の中には、その開始終、内面的發達の複雑な骨の折れる進行が続いてゐて、それが彼に多くの啓示を與へ、多くの精神的疑惑や喜悅に彼を導いたのであつた。

彼は日記を續けた、そして、これが、その頃彼がその中に書いてゐたものであつた。

十一月二十四日。——八時起床。聖書を読み、それから勤めに行つた。(ビエールはオシツプ・アレキセイキツチの忠告に従つて、政府の委員會の一ツに勸めてゐた)晝餐に歸つて来て、獨りて食事をした。(伯爵夫人の所には逢ひたくない客が大勢来てゐた)、適度に食つたり飲んだりして、食後、組合達の爲めに書類を寫した。晩、伯爵夫人の所へ下りて行つて、Bの事に就いて可笑しい物語をした、そして、誰も彼もがそれを聲高に笑つてゐた時になつて初めて、自分はさうしてはならなかつたのだと氣が付いた。

静かな、幸福な心持で寢床へ這入つた。偉いなる主よ、おん身の路に於て歩むやうに私を助け給へ——

(一) 溫和と熟慮とに依つて怒りを避け得るやうに。

(二) 自己抑制と嫌惡することに依つて淫慾を避け得るやうに。

(三) (a) 吾が政治上の義務、(b) 吾が家族の世話、(c) 吾が友との關係、(d) 吾が財政の管理から私自身を切り放さず世間の混雜から避け得るやうに。

十一月二十七日。——遅く起きた、怠け癖に負けて、眼覺めてからも長いこと床の中に横たはつてゐた。神よおん身の路に於て歩み得るやうに我を助け、我を強め給へ。聖書を読んだが、それに適ふやうな感情も浮ばなかつた。兄弟のウルソフが来て、この世の勞苦に就いて話した。彼は、皇帝の新計畫の事を私に話した。私は、その計畫の批評を始めてゐた、が、私の主義と、それから、眞の組合員は、その助力を求められた時には、國家の爲めに熱心に働かなければならないが、助力を求められない時には靜かに傍觀すべきものであると言つた私の恩人の言葉とを憶ひ出した。自分の舌は自分の敵である。兄弟のG・VとOとが訪ねて來た。新しい兄弟を迎へる準

備の談話があつた、二人は私に教辭者の役目を負はせた。私は、弱さと資格のない事とを感じた。

それから又、寺院の七つの柱、七つの階段、七つの學問、七つの徳、七つの惡徳、聖靈の七つの賜物の解釋に就いての話があつた。兄弟のOは非常に雄辯であつた。

晩に入會式が舉行された。建物の新しい裝飾が、その光景に非常な莊嚴を加へた。パリース・ドルベツコイが加入を許された。私が彼を推薦したのであつた、そして私レエタアがその教辭者であつた。暗い禮拜堂の中に彼と一緒にゐる間始終不思議な感情が私を苦しめた。私は自分の心中に憎惡の感情を見出したので、一心にそれに打勝たうと努力した。私は、彼を惡徳から救ひ、眞理の路へ導き入れるやうに心から願はなければならぬのであつたのに、彼に對する悪い考が何うしても自分から離れなかつた。組合に這入る彼の目的は、たゞ單にこの會所の人々の交誼と愛顧とを得る爲めなのだといふ考へが、ふと私に起つて來た。彼が度々、NやSが組合員であるか何うかを(私には答へることの出来なかつた質問、私に訊いたといふ事實は別としても、私の觀察の及ぶ限りでは、彼は決して我々の神聖な宗派に對して尊崇の念を持つ事の出来ない人間であり、且つ、精神的人格の進歩を望むにしては、余りに多く外面的人格に心を奪はれ、あまりに多くそれに満足し過ぎてゐる。私は彼を疑ふ理由を少しも持つてはゐなかつたが、私には彼が不眞面目のやうに思はれた、で、暗い禮拜堂の中で彼と向き合つて立つてゐる、間、私は始終、彼が私の言葉を冷笑してゐるやうに想像してゐた、そして彼の裸の胸に突き付けてゐた劍で、實際に彼れを刺し貫きたいと思つた。私は雄辯になる事が出来なかつた、で、兄弟達や總長に、私の疑ひを誠實に傳へることが出来なかつた。お、自然の偉大なる建設者よ、虚偽の道路を逃れ出づる眞の路を見出すべく我を助け給へ!

この後の日記は三頁空白のまま見なつてゐて、それから、かう書いてあつた。

私は、兄弟のAを見棄るなど忠告して呉れた兄弟のVと長い有益な談話をした。私はその資格のない人間ではあるが多くの啓示を得た。アドオネエと云ふのが世界創造者の名前である。エロオヒムと云ふのは萬物の支配者の名前である。第三の名前、口に出しては言へない名前が、「萬有」といふ意義を持つてゐるのである。兄弟Vとの話は私を強め、私の心を爽かにし、徳の路に於て私を確かなものにした。彼の前では、疑惑を容れる餘地は少しもない。私は世上の科學の貧弱な教義と、我々の神聖な、何物をも包含してゐる教への間の差別を明かに見た。人間の科學は、理解せんが爲めに有らゆる物を解剖し、分析せんが爲めに有らゆる物を破壊するのである。我々の宗派の神聖な科學に於いては、總てが一である、總てがその結合と生命とによつて知られるのである。三位一體——物の三要素——は硫黄と、水銀と、鹽である。硫黄は油のやうな火のやうな性質のものである、その火のやうな性質がある爲めに、鹽と結合すると、その中に欲求を起し、その欲求に依つて水銀を惹き寄せ、それに結び付き、それを支へ、而してそれと結合して我等の物質^{チフスタンス}を形造るのである。水銀は非物質的な、浮び漂つてゐる、精神的の要素——基督、聖靈、神である。

十二月三日——遅く起きた聖書を読んだが、それに感動させられなかつた。それから下へ降りて行つて大廣間の中を彼方へ行つたり此方へ行つたりした。私は瞑想しやうとしたが、その代りに、私の想像は、四年前に起つた一事件を私に思ひ起させた。ガラホフは、モスクワで決闘した後、私に逢ふと、妻が居ないにも拘らず今、私が完全な精神上の平和を享樂してゐることを望むと、彼は言つた。その時、私は彼に何も返事をしなかつた。

今、私は、その會見の模様を殘らず憶ひ出した。そして、心の中で、最も復讐的な辛辣な返答を彼にした。私は怒りの情に囚はれた時始めて我にかへつて、その考へを追ひやつた、併し、未だ十分にそれに就いて後悔しなかつた。その後で、バリース・ドルベツコイが来て、いろ／＼の出來事を話し出した。彼が這入つて來た時、私はその訪問に驚ろかされた。そして彼に向つて何か怖ろしい事を言つた。彼は口答へをした。私は、かつとなつて、不愉快な、そして無作法な事さへ澤山彼に言つた。彼は何とも答へなかつた、そして、もう間に合はない時分になつて、やつと私は自分を抑へた。あゝ、私はどうしても彼と一緒に親しくしては行けないのだ。その罪は私自身にもある。私は自分を彼よりも上に置いてゐた、その爲めに私は彼よりは遙かに劣つたものとなつて了つた、それは、私が彼に對して侮蔑の心を生長させてゐるのに、彼は私の無禮に對して寛大だからである。わが神よ、彼の前に於て、私が自分自身の惡徳を一層明かに見る事が出來、そして又彼のためにも有益であるやうに働くことの出來るやうに爲さしめ給へ。食事後、私は眠つた、そして丁度就眠^{ねんか}うとしてゐた時、私は、左の耳に「爾の日」と言ふ事をはつきりと聞いた。

私は夢を見た、私が暗闇の中を歩いてゐると、不意に幾匹かの犬に取り圍まれた、併し、私は平然として歩いて行つた、急ち一疋の小犬が、私の股に噛み付いて私を行かせまいとした。私は兩手でそれを縊り殺さうとした。そして夫れを振り放すや否や、他の大きい奴が私を噛み始めた。私はそれを持ち上げた、そして、私がそれを持ち上げれば持ち上げる程、それは益々大きく、益々重くなるのであつた。すると突然、兄弟のAが遣つて來た、そして、私の腕を取りながら一緒に私を引張つて、或る建物の中へ私を連れ込んだ、その中へ這入るには、狭い板の上を通らなければならなかつた。私はその上を歩いた、すると板がしなつて折れて仕舞つた、で、私は丁度

捉まる事の出来た舞へ登り始めた。非常な骨折をした後、私は、脚は一方の側にぶら下がり、身体は他の側にあると言ふ工合に自分の身体を引き上げた。私は見廻はした、そして、兄弟のAが舞の上に立つて、大きな並樹路と庭園とを私に指し示してゐるのを見た、その庭園の中には大きな美しい建物があつた。

目が覺めた。主よ、自然の偉大なる建設者よ。是等の犬——私の悪念、——殊に、前者の暴虐を悉くそれ自らの中に合せ持つてゐる最後の犬を振り離す事が出来るやうに、我を助け給へ、眠りの中に幻影に見る事の出来た彼の徳の殿堂に入る事の出来るやうに我を助け給へ。

十二月七日——私は、オシツプ・アレキセーキツチが私の家に坐つてゐる夢を見た、私は彼に會つたのを非常に喜んだ、そして熱心に彼を歎待さうとした。併し夢の中では私は絶えず他の人々と饒舌りつゞけてゐた、すると不意に、かうしてゐるのは彼の好まない事に違ひないと気が付いたので、私は彼に近寄つて行つて、彼を抱擁したいと思つた。併し、彼に近づくや否や、私は彼の顔が變つてゐて、若くなつてゐるのを見た、そして、彼は私に向つて組合の教義らしいことを何か低い聲で言つたが、あまり幽かだつたので、私には聞き取れなかつた。やがて私達はみんな部屋を出たらしかつた、すると、或る不思議な事が起つた。私達は坐つてゐるか、床の上に横になつてゐるかしてゐた。彼は、私に何か話してゐた。併し、夢の中で、私は自分の敬虔な氣持を彼に知らせたくて堪らなかつた、で、私は彼の言葉は聞かずに、私自身の内面的人格の狀態と、私を神聖にして呉れる神の恵みとを、心に描き始めた。すると、眼に涙が浮んで來た、そして、彼がそれに氣付いたのが嬉しかつた。が、彼は腹立たしげにチラと私を見、そして、跳び立つて私との話をやめてしまつた。私は恥ぢ入つて、彼が話して

ゐた事は、私に關した事ではなかつたか何うかと訊いた。併し、彼は何も返事をしなかつたが、親しげに私を眺めた、やがて、何時の間にか私達は私の寢臺に來てゐた、其處には大きな夫婦寢床が立つてゐた。彼はその端に横になつた、そして、私は彼を抱擁したい、そして私も横になりたいといふ欲望で一ぱいになつたやうな氣がした。と、夢の中で、彼は私に訊いた。眞實のことを仰有い、あなたが一番の誘惑は何ですか？ あなたは夫れを知つてゐますか？ あなたは確かにそれを知つてゐます。」この質問に恥ぢ入つて、私は、怠惰が、私の惱まされてゐる誘惑だと答へた。彼は信じられないといつた風に頭を振つた。で、一層恥ぢ入つて、私は、此處で妻と一緒に暮らしてはゐるが、良人として彼女と一緒に暮らしてゐるのではないと言ふ事を彼に話した。彼はそれに對して妻から私の抱擁を奪ふ權利は私にはないと答へた、そして、抱擁は私の義務だといふ事を理解させて呉れた。が、私はそれを耻ぢると答へた。と、不意に何も彼も彼も消え去つてしまつた。そして私の眼が覺めた、すると私の心に聖書の言葉が浮かんで來た。「此生は人の光なり、光は暗に照り、暗は之を曉らざりき。」

オシツプ・アレキセーキツチの顔は、若々しく、そして晴れやかであつた。その日、私は、私の恩人から手紙を受取つた。その中に、良人としての私の義務に就いて書いてあつた。

十二月九日——私は夢を見て、胸をどき／＼させながら眼を覺ました。私が、モスクウの私の家の大きな喫煙室にゐると、オシツプ・アレキセーキツチが客室からやつて來たやうであつた。私は、彼の心の中に再生の過程が始まつてゐるのを直ぐと知つたので、彼を迎へる爲めに駆け出たやうであつた。私は彼の顔と手とに接吻した、その間に彼は、「私の顔の異つてゐるのがおわかりですか？」と、言つた。私は、彼を抱いたまゝ、彼を見た、と、

彼の顔は若かつたが、頭には一本の毛もなく、顔容がすっかり變つてゐるのを見たやうであつた。「偶然あなたにお目にかゝたとしても、私はあなたを見違へはしません」と、言ひながら、私は思つた。「俺は眞實の事を言つてゐるのか？」と、不意に、彼が死人のやうに横になつてゐるのを見た、やがて彼はだん／＼元の彼に歸つて行つて、大きな二ツ折りの寫本を抱へながら、私と一緒に大きな書齋へ這入つて行つた。そして、私は「私がそれを書いたのです。」と、言つたやうであつた。すると、彼は首を傾て私に答へた。私は本を開けた、と、何の頁にも綺麗な繪があつた。私は、是等の繪は凡て愛人との靈魂の戀の冒險を描いたものであることを知つたやうであつた。そして、私は透明な着物をた、透明な體の處女が、雲へ飛び上つて行く綺麗な繪姿を見たやうであつた。私は此の處女こそ「雅歌」の姿に外ならないといふ事を知つたやうであつた。そして是等の繪を見たがら、私は何か悪い事をしてゐるやうに感じたが、何うしてもその繪から自分を引き離す事が出来なかつたやうであつた。主よ、私を助け給へ！ わが神よ、若し私を見棄て給ふことが御身の仕業であるならば、それなら御身の御意のままであれ、併し若し私自身がその原因であるのなら、私の爲すべきことを、私に教へ給へ。御身が全く私を見棄て給ふならば、私は私の惡業の爲めに滅びる。

十一

ラストフ家の經財状態は、彼等が田舎で暮らした二年間に、少しも改善されなかつた。

ニコライ・ラストフは固く自分の決心を守つて、やはり名の知れてゐない聯隊で、割合ひに金を使はずに質素に暮らしてゐたのだが、オトラドノエでの暮らし方も、更らにミチエンカの整理のし方も、負債がどん／＼と殖えてゆき、年毎に重くなつてゆくやうなものであつた。何うしても爲なければならぬ明白な事柄として、老伯爵の前に置かれた唯一の方法は官途に着くといふ事であつた。で、彼は或る地位を捜す爲めにベテルブルグへ來たのであつた。が、位置を捜すと同時に、彼の所謂最後に阿魔つ子達を喜ばせる爲でもあつた。

ラストフ家の人々がベテルブルグへ着いてから間もなく、ベルグはヴェーラに結婚を申込んだ。彼の申込みは承諾された。

モスクワにゐる時、ラストフ家の人達は自分達が何んな社會に屬してゐるかと言ふことを知りもしなければ、又そんな事を考へもしなかつたが、兎に角彼等は上流會社に屬してゐた、併し、ベテルブルグに來ると、彼等の社會は亂雑な漠然とした社會であつた。ベテルブルグにゐると彼等は田舎者であつた、モスクワにゐる時、何んな社會に屬してゐるかと思つたゞしもせずに御馳走してやつたやうな人々さへ、その家には出入しなかつた。

ラストフ家の人達は、モスクワにゐた時のやうに、ベテルブルグでも矢張りお客をして暮した。彼等の晚餐には様々な種類の人達が集まつた。オトラドノエ村にゐた時の隣村の人達や、あまり暮らし向きの好くない老地主達や、その娘達や、ベロンスカヤや、ビエール・ベズウホフや、それからベテルブルグで勤めてゐる田舎の郵便局長の息子などが集まつた。男の中でベテルブルグのラストフ家に家族同様に出入りしてゐた人達は、パリースと、老伯爵が往來で出會して、自分の家へ曳ずり込んだビエールと、毎日毎日ラストフ家に入りびたつてゐて、年増な伯爵令嬢達のヴェーラに結婚を申込まうと思つてゐる青年がする通りの注意を拂つてゐたベルグとであつた。

ベルグは、アウステルリッツの戦で負傷した右の手を皆なに自慢さうに見せたり、必要が少しもないのに左手に劍を持つたりしてゐた。彼は誰に向つても、非常に熱心に、いかにも勿體ぶつてこの事件を物語つたので、皆な彼の働き

の價値と利益とを信じて仕舞つた。ベルグはアウステルリッツの戦で勳章を一つ貰つたのであつた。フィンランドの戦争でも、彼はやはり勳功を顯はした。彼は總司令官の直ぐ傍にゐた一人の副官を殺した榴弾の破片を拾ひ上げ、その破片を司令官の所へ持つて持つて行つた。で、再び彼はアウステルリッツの戦争後のやうに、皆な

にこの事件に就いて、如何にも長々と熱心に物語つたので、人々はやはり此の事件も事實で、ベルグはフィンランドの戦でもまた勳章を二つ貰つたのだと云ふことを信じた。で、一八〇九年には、彼は勳章を持つた近衛の大尉であつた。そしてベテルブルグで、非常に都台の好い或る特別の位置を占めてゐた。

ベルグの手柄話が出ると、或る自由思想家達はニヤ／＼と笑つたが、併し、ベルグが、几帳面で、上官には非常に評判のいゝ勇敢な將校であり、前途には花々しい経歴を作り、社會に於いて確かな位置を持つことの出来る、しつかりした若者であるといふ事に一致しない譯にゆかなかつた。

四年前、モスクワ劇場の平土間で獨逸人の友達に逢つた時、ベルグはその友達にヴェーラ・ラストフを指さし、ドイツ語で「あの娘は俺の女房になるのだ。」と云つた。その時から、彼はヴェーラと結婚しやと決心した。ベテルブルグで暮すやうになつた今、ラストフ家の位置と自分の位置とを考へた上で、ベルグは時節が來たものと決めて、結婚の申込みをしたのであつた。

ベルグの申込みは、最初、彼にとつて嬉しくない不審の色をもつて受取られた。最初のうちはリウオニアの貧乏貴族の息子が、ラストフ伯爵の令嬢に結婚の申込みをするなど、いふ事は、如何にも變なことのやうに思はれた。ベルグの性格の特長は、天真爛漫な悪氣のない自我主義であつたので、ラストフ家の人達は、若しベルグ自身がこの結婚を好い事だと信じ、而かも非常に好い事だと固く信じてゐるならば、この結婚は好い事に違ひないと、知らず／＼の間に考へるやうになつた。それにラストフ家の財政はひどく減茶々々になつてゐて、夫れを結婚申込者も知らずに居る筈はなかつた。殊にヴェーラは廿四歳で、到る處に引出きされた。そして彼女は、確かに縹緞もよければ利巧であるにも拘らず、これまで誰れ一人彼女に結婚の申込みをした者はなかつた。で、その結婚の申込みは同意を以て納められた。

「何うだ、見給へ。」と、ベルグは、人はみんな友達を持つてゐるといふ事を知つてゐるだけで自分の友達と呼んでゐた一人の友人に言つた。「何うだ見給へ、何も彼も僕の考へ通りになつたよ。若し僕がよく考へもせず、又、何かの考へて此の結婚を面白くないと思つて見給へ、僕は結婚なんか斷じてしないが、今では全然反對になつた。今では僕の親爺もお袋も心配がなくなつた。僕は二人にオストゼー地方に借地權を作つてやつたのだ。だから僕は自分の月給と、女房の財産と、僕の几帳面とて、ベテルブルグで暮らして行く事が出来る。立派に暮らして行ける。僕は金の爲めに結婚はしやしない。僕はさう云ふことを紳士らしくないことだと思つてゐる。だが、妻は自分のものを持つて來なければならぬし、夫も自分のものを持つて來なければならぬ。僕は官職を有つてゐるし、妻は系累と、僅かばかりの財産とを持つてゐる。今日では之が當然な事だ、さうぢやないか？ が、要するに、彼女は美しい氣高い娘だよ。そして僕を愛してゐる……」

ベルグは顔をあかくして、莞爾した。

「所で、僕は彼女を愛してゐる、何故つて彼女の性格はしつかりしてゐて——非常に美しくいからさ。所が彼女の妹

と来ると——同じ家族のものでありながら——まるつきり違ふね。不快な性格だ。彼女のやうな智慧はなし、何んとも云ふ女だらう……不快だ……けれども僕の婚約者は……君、是非来て呉れ給へ……」と、ベルグは續けて食事には言はうとしたが、考へ直して「お茶に」と言つた。そして彼の幸福の空想を、其のままに具體化した煙草の圓い小さな輪を舌で急いで弾くやうに吹き出した。

ベルグの申込は、最初、両親の心に不審の感じを呼び起し、次に、家族の中に、斯う云ふ場合に何時もある饗宴や喜びを作つた。が、その喜びは心からの喜びではなくして、表面の喜びであつた。親戚の者達は、この結婚に就いて明らかに當惑と羞恥とを感じてゐた。彼等はあまりヴェーラを可愛がらなかつたと云ふことと、今おいそれとヴェーラを手放してやらなければならぬこととの爲めに、情ないやうな感じを抱いてゐた。殊に、老伯爵が一番心配してゐた。彼は何が自分の心配の原因であるかと云ふ事を知り得なかつたらしい。が、その原因は彼の金銭問題であつた。彼は自分の資産がどの位あるか、借金がどの位あるか、ヴェーラに持参金として何の位持たしてやる事が出来るかと云ふことを少しも知らなかつた。何の娘も生れた時には、農奴三百人づゝを持参財産として充てがはれてゐたのであつた。が、その領地の一つは既に賣られてゐた。も一つの領地は抵當に這入つてゐて、期限が過ぎた爲めに、それも賣らなければならなかつた。従つてこの領地を持たせて遣ふことも出来なかつた。と云つて、金も矢張りなかつた。

ベルグは、もう一月以上も許婚者でゐた。そして、結婚式の日まで僅か一週間しか残つてゐなかつた。が、伯爵はまだ自分でも持参金の問題を解決してゐなかつた。この事を夫人とも相談しなかつた。伯爵は、リヤザンの領地をヴェーラに遣らうと思つたり、林を賣らうと思つたり、約束手形で金を借りやうと思つたりした。

結婚式の幾日前に、ベルグは朝早く伯爵の書齋へ這入つて行つて、楽しさうな微笑を浮かべながら、伯爵令嬢ヴェーラに何を附けて下さるか、夫れを知らせて頂きたいと、叮嚀に將來の身に頼んだ。伯爵は、前から豫知してゐたこの質問に少からず狼狽して、別に考へもせず、一番最初に頭に浮かんで來た事を口に出した。

「私は君のよく氣が附くところが好きだ。そこが好きだ。満足させて上げるよ……」

そこで彼はベルグの肩を叩き、その談話を止めやうとして立ち上つた。併しベルグは楽しさうに微笑みながら、若しヴェーラの持参金の事がはつきり分らず、彼女に與へられたものの一部分なりとも前に受取る事が出来なければ、己むを得ず此の結婚は破談にしなければならぬと言つた。

「と申しますのは、伯爵、考へて下さらなければ不可せん、若し私が妻の衣食に對する確實な保證なしに今結婚するとすれば、私は悪漢のやうな所業をする譯ですからねえ……」

話は、伯爵が寛大に見せたいといふ切望と、それ以上の要求を避けたいといふ切望とから、八萬ルーブルの約束手形を遣らうと云ふことで終りを告げた。ベルグはやさしく微笑して伯爵の肩に接吻した。そして非常に有難いが、現金で三萬ルーブル戴かなくつては、今新生活の準備をする事が出来ないと言つた。「何うでせう、伯爵。せめて二萬ルーブルだけでも」と、彼は附け加へた。「さうすれば手形の方は、たゞ六萬で好ら御座います。」

「よし、大丈夫だ。」と伯爵は速口に言つた。「二萬ルーブルと、それから手形で八萬ルーブルやるから、それでどうぞ許して呉れ給へ。では、私に接吻をしてくれ。」

十二

ナターシャは十六歳であつた。それは一八〇九年で、四年前ナターシャがパリースに接吻した後で、パリースと二人で指折り數へた丁度その年であつた。その時から此方へ、彼女は一度もパリースに逢はなかつた。パリースの話が出ると、彼女はソーニャの前でも、母親と一緒にゐる時でも、以前あつた事は、凡て話す價值もなく、疾つゝの昔忘れて仕舞つた子供じみた戯談で決まつたことだ、と云ふやうに極めて自由に話すのであつた。が、彼女の秘密な心の底ではパリースに對する誓言は戯談であつたらうか、それとも重大な、切つても切れない約束であつたらうかといふ疑問が彼女を苦しめてゐた。

軍隊に遣入る爲めにパリースは一八〇五年にモスクワから軍隊に行つて、此方一度もラストフ家の人達に逢はなかつた。度々モスクワへ来たこともあれば、オトラドノエ村の近くを旅行したこともあつたが、彼は一度もラストフ家人へは立ち寄りなかつた。

ナターシャは何うかすると、パリースが自分に逢ひたがらないのだと考へたこともあつた。そして、その推量^{まやうどい}は、兄姉達がパリースの話をする時のその悲しさうな調子に依つて確かめられた。

「今の世の中の人達は、昔の友達のことを直ぐに忘れられて仕舞ふ。」と、伯爵夫人は、パリースの話が出るとさう言つた。

アンナ・ミハイロウナも、この頃では、あまりラストフ家へ訪ねて来ないやうになつて、矢張り妙に自分の品位を落すまいとしてゐた。そして何時も感激し、感謝してゐるやうに自分の息子の價値と、息子が通つて来た花々しい經歷とを話した。ラストフ家の人達がベテルブルグに着いた時、彼等のところにパリースが訪ねて来た。

彼は、胸を波打たせながらラストフ家に來た。ナターシャのこの思ひ出は、パリースの最も詩的な憶ひ出であつたが、それと同時に、彼は自分とナターシャとの子供らしい關係は、彼女にとつても、自分にとつても、責任のあるものとなることは出来ないといふ事を、彼女と、彼女の親族とに判然り^{はつきり}知らせ、感じさせやうと固く決心して訪ねて來たのであつた。彼は、ベズウホフ伯爵夫人と別懇^{べつけん}であつたお蔭で、社會には花々しい地位を持ち、或る名士の保護のお蔭で、官途でも花々しい地位を持つてゐた。彼は此の名士の信用を得てベテルブルグでも一番金持ちの花嫁と結婚しやうと云ふ計畫を立てゝゐた。この計畫は非常に容易く實現することが出来るのであつた。パリースがラストフ家の客間へ這入つた時には、ナターシャは自分の部屋にゐた。パリースが來たことを知ると、彼女は顔を蔽^{おほ}めながら、殆ど駈けるやうにして客間へ這入つて來た。以前よりもつと愛嬌のある微笑に彼女の顔は輝いてゐた。

パリースはナターシャが、四年前に知つてゐた通り、短かい衣裳を着てゐて捲毛の下に黒い眼を光らせ無邪氣な子供らしい微笑をするだらうと思つてゐたのに、まるつきり違つたナターシャが這入つて來たので、彼は不審な感に打れた、その顔には驚異を表はした。彼の顔のこの表情はオターシャを喜ばせた。

「何うです、悪戯な小さいおあなたの遊び友達を御存じてすか？」と、伯爵夫人が言つた。

パリースはナターシャの手に接吻して、彼女の變り方に驚いたと言つた。

「あなたは、ほんとに美しくなりましたね！」

「もつと美しくなりますわ！」と、ナターシャの笑つてゐる眼が答へた。
 「ちや、お父様は年を取つたやうに見えて？」と、彼女が訊ねた。ナターシャは坐つた。そしてパリースと母との話
 親には加はらずに、黙つたまゝ自分の子供時代の求婚者を細かい點まで眺めてゐた。パリースはこのしつこい愛嬌の
 ある眼付の壓迫を感じながら、時々チラリと彼女を見た。

パリースの制服や、拍車や、ネクタイや、髪梳き方など——みんな當世流で、きちんとしてゐた。ナターシャは直
 ぐそれに氣が付いた。彼は伯爵夫人の傍にある安樂椅子に少し横向きに腰掛けて、左の手に飲めてゐる清潔に洗濯した
 手袋を右の手で直してゐた。彼は殊更に唇を薄つ片に引きしめながら、ベテルブルグの上流社會の楽しみを話し
 優しく皮肉な笑を浮べながら、昔のモスクワ時代の事や、モスクワの知人達の事などを話した。ナターシャは彼が故
 意最と高の貴族の名を擧げて、自分が出席した大使の舞踏會や、N・NやS・Sからの招待の事などを言つてゐるの
 だと云ふことを感じた。

ナターシャはその間黙つたまゝ、眉の下から彼を見上げながら座つてゐた。その眼は益々パリースを不安にし當惑
 させた。彼は愈々繁くナターシャの方を振り返つて、その言葉が杜絶した。彼は十分間足らず腰掛けてゐたが、と
 う／＼立ち上つて暇を告げた。やはり例の物珍らしさうな、挑むやうな幾分皮肉な眼が彼を凝視してゐた。パリース
 は初めて訪問した後で、自分自身に向つて、ナターシャは矢張り昔と同じやうに確かに自分を引きつける力をもつて
 るが、この感情に負けてはならない、何故といふに、彼女と——殆ど無財産の娘と——結婚するといふ事は、自分の
 前途の破滅であり、結婚する目的がないのに昔の關係を復活させるといふ事は、卑劣な事であらうからと獨語つた。
 で、パリースはなるべくナターシャに逢ふ事をさげやうと決心した。が、さう決心したに拘らず、彼は二三日経つた

ストフ家に行つた。それから頻繁に行くやうになり、終ひには毎日毎日ラストフ家で暮らすやうになつた。彼はナタ
 ーシャに自分の心を打ち明け、古い事はすっかり忘れて仕舞はなければならぬ事や、過去の種々なことがあるにも
 拘はらず……ナターシャは自分の妻になれない事や、自分には少しも資産のない事や、ラストフ家の人達は彼女を
 自分に呉れやしないといふ事などをナターシャに話さなければならぬと想つた。所が、彼は何時も之を話し損なつ
 たし、又之を打ち開ける適當な機會を得なかつた。彼の心の亂は日増しに大きくなつて行つた。母親やソニーヤなど
 に氣が付いたところによると、ナターシャは昔のやうにパリースを愛してゐるやうに見えた。彼女はパリースに自分
 の好きな歌を唄つて聞かせたり、アルバムを見せてその中へ書かせたり、昔の事に話を持つて行かせないやうにした
 り、新しいことが何んなに美しくいかと云ふことを彼に説き聞かせたりした。で、彼は毎日のやうに、言はうと思
 つた事も言はず、何をしてゐるのか、何故来たのか、何ういふ結末になるのかと云ふことも分らずに、霧中で家へ歸
 つて行つた。パリースはエレンのそこに行くことを止めたので、エレンからは毎日のやうに恨みがましい手紙を受け
 取つたが、やはり毎日ラストフ家で暮らしてゐた。

十三

或る晩、老伯爵夫人が、寢間朝を被り、寢間のジャケットを着、假髪もつけず、たゞ見窄らしい一束の頭髪を白木
 綿の寢間朝から喚み出させたまま、溜息を吐いたり、呻いたりしながら、絨氈の上に叩頭ぬかぶいて晩の祈禱を捧げてゐる

時、部屋の扉が軌つて、やはり寢巻のジャケットを着たナターシャが、素足で、上靴スリッパを穿き、髪を捲カールペーパー紙で包んだまゝ、駆け込んで来た。伯爵夫人は振り返つて顔を擧めた。「彼女はこの寢臺が屍架となるやうなことが御座いませうか？」と云ふ最後の祈禱文を読み終らうとするところであつた。ところが、彼女の敬虔な気分は散らされた。赤い顔をして興奮してゐたナターシャは、祈禱を捧げてゐる母親を見ると、急に走るのを止め、膝まづいて、思はず舌を吐き出した。そして自分ながら吃驚した。母親が未だ祈禱してゐるのを見ると、彼女は爪立て、寢床の方へ駈けて行き、素早く小さい片方の足をもう片方の足へ擦り附けながら両方の上靴スリッパを脱ぎ、伯爵夫人が自分の屍架になりはしまいかと恐れてゐたその寢臺の上に飛び上つた。その寢臺は高い羽毛床で、その上には一つ／＼と小さくなつて行く五つの枕が載つてゐた。ナターシャは跳び込んで羽毛床の中に身體を沈め、壁の方へ寄つて、蒲團の下に潜り始めた。そして、すっかり身體を隠したり、顎のところで膝を折り曲げたり、脚を蹴出したり、頭からすぼり蒲團を被つたり、母親を覗いたりしながら、微かな忍び笑ひを漏らした。伯爵夫人は祈禱を終つて、六ヶ敷しい顔をしながら、寢床の方へ近付いて来たが、ナターシャが頭から蒲團を被つてゐるのを見ると、伯爵夫人は人の好い、弱々しい微笑を洩らした。

「これ、これ、これ！」と、母親は言つた。

「お母様、私お話ししたいことがあつてよ、よくつて？」と、ナターシャは言つた。「さあ、では願の下に、一度、さ、も一度、これでいゝわ。」と、彼女は母親の首をつかまいて、その頤に接吻した。母親に對するナターシャの舉動には、表面上如何にも亂暴な様子があつたけれど、感じ速く、素敏つこかつたので、何んなに兩手で母親を抱き締めても彼女は何時も、母親が痛がるとか、不愉快を感ずるとか、厭な感じを懐くとか、さういふ事がないやうに巧くやつての

けた。」

「さあ、今夜は、何を言ふの？」と母親は、枕に體を落ち着けて、もう二度ばかり體を轉がしたナターシャが、腕を出し眞面目な顔付になつて、同じ蒲團の中に自分と並んで寝るまで待つてから言つた。

伯爵が倶楽部から歸つて来るまでに行はれるナターシャの夜の訪問は、母親にとつても娘にとつても、一番好きな楽しみの一つであつた。

「今夜は何んな事ですつて？——でも、私ね、お母様にお話ししたい事があるの……」

ナターシャは母親の口を片手で塞いだ。

「バリスさんのこと……私、知つてますわ。」と、彼女は眞面目に言つた。「それで私来たのよ。言はないで頂戴、私知つてますから。いゝえ、言つて頂戴！」と、彼女は手を離した。「言つて頂戴、お母様。あの人は好い方でせう！」

「ナターシャ、お前は十六にもなるし、お前の年齢にはお母様はもうお嫁に来てゐたんだもの。お前はバリスさんを好い方だとお言ひだが、ほんとにあの方は好い方です。で、私もあの方を息子のやうに可愛いがつてゐるのですよ。だがお前は一體どうしやうといふの？……何う考へてお居るなの？ お前があの方にすっかり有頂天にしてゐるとは私にも分つてゐます……」

斯う言ひながら、伯爵夫人は娘を見返つた。ナターシャは横になつて、寢臺の隅に彫つてある桃花心木のスフィンクスマホガニーの一つを、眞面目にちつと見てゐたので、伯爵夫人には、たゞ娘の横顔が見えたゞけてあつた。伯爵夫人は娘の顔の非常に眞面目な、思ひ詰めた表情に吃驚した。

ナターシャは聞きながら考へてゐた。

「それで何うしたと云ふの？」と、彼女は言った。

「お前はすっかりあの方に有頂天にしてお仕舞ひだが、何うしてなの？ あの人から、何うして貰ひたいと云ふのだけ？ あの人と結婚出来ないといふ事はお前にも分つてゐるのに。」

「何出来ないの？」と、ナターシャは少しも態度を變へずに言った。

「何故つて、あの方は若いし、貧乏だし、親類だしするからね……それに、お前自身もあの方の事を思つてはゐないから。」

「何うしてお母様にはそれが分つて？」

「分りますとも。それはお前、決して好い事ではありませんよ。」

「でも、私がさうしたいのなら……。」と、ナターシャは言った。

「馬鹿な事を言ふものぢやありません。」と、伯爵夫人は言った。

「でも、私がさうしたいのなら……。」

「ナターシャ、私は眞面目ですよ……。」

ナターシャは、母親に最後まで喋らせなかつた。彼女は伯爵夫人の大きな手を引き寄せて、その甲に接吻し、それから掌てのひらに接吻し、やがてまた夫れを引くり返して、指の上關節に接吻し、關節と關節との間に接吻し、更らにまた關節に接吻して、「一月、二月、三月、四月、五月。」と、囁いた。

「さ、言つて下さい、お母様、何故黙つて被居るの？ 言つて下さい。」とナターシャは母親を見ながら言った。母親は娘を優しい眼付で凝視みつめてゐたが、斯うして見詰めてゐるうちに、何うやら言はうと思つてゐた事もすっかり忘れて仕舞つたらしかつた。

「これは不可いけないよ。お前達の子供らしい仲が、誰にも分るといふものではないからね、それにあの方がお前とあんなに親しくしてゐる處を見たら、家へ訪ねて来る他の若い人達の眼には、お前が變に映るかも知れないからね。それにもつと大變な事は、あの方が無駄な苦しみをすることです。あの方は多分もう自分に丁度いゝ金持ちかの配偶を見付けたのに違ひない。ありません。それなのに今は半狂亂になつてますよ。」

「半狂亂に？」と、ナターシャが繰り返した。

「では、私の身の上話をしませう。私には一人の従兄がりました——」

「知つてます——キリイラ・マトウエーキツチだわ。けどあの方は年寄ぢやなくつて？」

「あの人だつて元からの年寄ぢやありません。けれど、ナターシャ、かうしやう、私からパリスに話すことにね。あまり度々來ては不可いけないつて……。」

「でも來たかつたら、來てもいぢやありませんか？」

「來たつて何にもならない事は分つてゐます。」

「何うしてお母様にはそれが分るの？ 厭いやですわ、お母様、あの方に話しちや厭。あんまり馬鹿々々しいわ！」と、ナターシャは、自分の所有物を奪さらわれやうとする人の語調で言つた。「ぢや、私結婚はしないから、若しあの方も喜び私も喜ぶんだつたら、あの人を來させて頂戴。」ナターシャは微笑みながら母親を見た。

「結婚はしないけど、たゞちよいと……。」と、彼女は繰り返した。

「ちよいとゝは？」

「たゞちよいとなの。そりやあ、私、どうしても結婚しないで居なきやならないわ、けれど……たゞちよいと。」
 「唯ちよいと、唯ちよいと。」と、伯爵夫人は繰り返して、體中を震はせながら、突然人の好き、うらな、年寄りらしい笑方をした。

「笑つちや厭、やめて頂戴。」と、ナターシャは叫んだ。「寢床ちうが揺れるわ。お母様はほんとに私と同じで、笑ひ上戸だわ……止めて頂戴……。」彼女は伯爵夫人の両手を握み、「六月」と言つて、片方の小指の節に接吻し、「七月」「八月」と言つて、もう片方の方に接吻を續けた。「お母様、でも、あの人はそんなに戀したんでせうか？ お母様の眼には何う見えて？ 皆なお母様にもそんなに戀をしましたの？ けど、あの人はほんとに好きな人、ほんとに、ほんとに好きな人だわ！ たゞ少し好きでない所があるけれど——あの人は置時計のやうに狭いのね……お母様には解らないの？……狭くて、灰色で、てか／＼してゐて……。」

「まあ、お前は嘘ばかり言つてゐる！」と、伯爵夫人が言つた。

ナターシャは續けた。

「お母様にはほんとに解らないの？ ニコレンカなら解るんだけど……ベズウホフねえ——あの人は青い、赤味がよつた青黒い人だわ、あの人は四角だわ。」

「お前はあの人をも弄つてゐるのね。」と伯爵夫人は笑ひながら言つた。

「いゝえ、あの人は共済組合員よ。私聞いたわ。あの人は偉い方で、赤味がかつた青黒い人よ……お母様に何う説明して上げたらいいでせう……。」

「おい、二人は戸越しに伯爵の聲を聞いた。未だ眠ないのかい？」ナターシャは跳び起きて、上靴を握み、跣足で

自分の部屋へ駈けて行つた。

彼女は長いこと眠れなかつた。そして、自分に解つてゐる事や、自分の心に有る事が、總て他人には解らないと云ふやうな事を考へ續けてゐた。

「ソーニヤは、」と、彼女は圓くなつて眠つてゐる小猫と、その房々してゐる毛とを見るがら考へた。「いゝえ、あの女にだつて解るものか！ あの女は身持のいゝ人だもの。ニコレンカを戀して、それ以上何にも知りたがらない人なんだもの。」お母様、お母様だつて解らないわ。まあ私は何て利巧なんだらう……彼女は何て可愛いんだらう。」とナターシャは自分の事を言ふのに三人稱を使い、誰かしら非常に利巧な、一番利巧な、一番美しい男が自分のことを斯う言つてゐるのだと想像しながら言ひ續けた……「彼女には、何も彼も、備はつてゐる。」とその男は續けた。利巧で、非常に可愛らしくつて、それから綺麗で、馬鹿に綺麗で、氣持のいゝ女だ——泳ぎも出来れば、馬も上手、それに聲だ！——素的な聲、と言つてもいゝ！」

彼女は、チエルビニの歌劇の中の、自分の好きな音楽的な一節を口吟みながら寢床の中に飛び込み、自分は直ぐ眠るのだらうといふ嬉しい考へに莞爾として、蠟燭を消させる爲めにツニヤーシャを呼んだ。そしてツニヤーシャが部屋から出ないうちに、彼女はもう他の、もつと幸福な夢の世界へ這入つてゐた。その世界では、あらゆる物が現實と同じく穩やかで且つ美しかつたが、たゞ凡てが全く異つてゐるので、現實の世界よりは一層好かつた。

その翌日、伯爵夫人はバリースを呼んで彼と相談をした。その日からバリースはラストフ家を訪ねることを止めて仕舞つた。

十四

十二月の三十一日、即ち新しい一八一〇年の前夜、カザリン朝の或る大官の家で舞踏會が催された。この舞踏會には、皇帝や外交團の人々も臨席する筈であつた。

イギリス堤にある此の大官の有名な邸宅は、イルミネーションの數限りない燈火に照らされてゐた。緋の粗羅紗を敷き詰めた明るい車寄には、警官が立つてゐた。車寄の上には、憲兵ばかりでなく、憲兵隊長もゐた、十人あまりの憲兵將校もゐた。馬車が車寄を離れると直ぐに赤、赤い服を着た馭者や、羽飾りの着いた帽子を冠つた馭者が馭して来る新しい馬車が幾臺となく乗り着けた。馬車から制服や、勳章や、綬を着けた人々が現はれると、縹子や、アルミンの毛皮を纏つた貴婦人達は、バタリと置かれた踏臺へそろ／＼と下り立つて、それから急ぎ足に、音もなく、車寄の粗羅紗の上を歩いて行つた。

新しい馬車が着くと、殆どその度毎に、騒ぎが群集の中を走つて、幾つもの帽子が脱られた。

「皇帝かしら？……いや、大臣だ……殿下だ……大使だ……君にはあの羽飾が見えないのか？……」といふやうな騒ぎが群集の中から聞えた。

群衆の中で他の者よりも宜い服装をした一人の男は、あらゆる人を知つてゐるらしく、その頃の最も名高い大官を呼び拾ひしてゐた。

客の三分の一は、もうこの舞踏會に到着してゐた。が、この舞踏會に出席す可き筈のラストフ家の人達は、まだ大急ぎで身仕度をしてゐた。

ラストフ家の人達は、この舞踏會の爲めに、様々な判議をしたり、種々の支度をしたリした。招待狀が来ないんぢやないだらうかと、衣服が間に合はないんぢやないだらうかと、萬事が差支へないやうに整はないやうなことはなからうか、とかいふやうなことを種々と心配した。

ラストフ家の人々は、伯爵夫人の友達であり親戚である、瘠せて黄色い顔をした、昔女官を勤めてゐたマリヤ・イグナチエウナ・ペランスカヤに舞踏會に案内して貰ふ筈であつた。この女は田舎者のラストフ家の人達を、ベテルブルグの上流社會に案内する役を勤めてゐた。

ラストフ家の人達は、十時に、タウリチエスキ公園へ馬車を驅つて、その女官を誘ふ筈になつてゐた。が、もう十時五分前と言ふのに令嬢達は未だ着物も着てゐなかつた。

ナターシャは、生れてから初めての大舞踏會に行くのであつた。彼女は朝八時に起きてから一日中、熱に浮きれてもしたやうに悸々しながら働いてゐた。彼女の全精力は、朝から彼女達皆なが——自分や、母親や、ソーニヤが出来るだけの服装をすることに向けられてゐた。ソーニヤと伯爵夫人とは、自分の服装のことを全然ナターシャに委せてゐた。伯爵夫人は濃い赤の天鵝絨の着物を着る筈であり、二人の令嬢は淡紅色の絹の下袴の上に、白の絹布の着物を着、胸に薔薇の花を挿し、髪をギリシヤ風に結ぶ筈であつた。

肝要なく事は悉く用意された。足や、腕や、首や、耳などは、舞踏會流に、特別念入りに洗はれ、香料を塗られ、粉白を付けられた。皆な圓編みの絹の靴下と、リボンの附いた白縹子の靴とを穿いた。髪も殆ど出来あがつた。ソーニ

ヤはもう服装をしてしまった。伯爵夫人もさうであつた。が、みんなの世話ばかり焼いてゐたナターシャは後になつた。彼女は瘠せた肩に化粧着を引つ掛けたまゝ、未だ鏡の前に座つてゐた。ソーニヤはもう服装を終つて部屋眞中に突立ち、最後のリボンの上に小さい指が痛い程ピンを刺しながらシユツ／＼とリボンの音をさせてゐた。

「さうぢやなくつてよ、ソーニヤ、さうぢやなくつてよ！」と、髪を結つてゐたナターシャは頭を振り向け、女中が直ぐに放し得ないでゐる頭髪を自分の両手に攫みながら言つた。「リボンはさうするんぢやないのよ。此處へ被來い。」

ソーニヤは躊躇んだ。ナターシャはリボンを刺しかへた。

「ほんとに、お嬢様、さうなすつては駄目ですわ。」と女中は、ナターシャの頭髪を持つたまゝ言つた。

「あゝ、さうね！ ぢや後で！ ほうら、それで宜いわ、ソーニヤ。」

「お前達はまだなの？」と、言ふ伯爵夫人の聲が聞えた。「もうすぐ十時ですよ。」

「直ぐですわ、直ぐですわ……お母様はもうお仕度が出来たの？」

「帽子を冠りさへすれば。」

「私が居ない所で冠つちや駄目よ。」と、ナターシャは叫んだ。「お母様は冠り方を御存知ないんですもの！」

「でも最早十時だよ。」

舞踏會には十時半までに行くことになつてゐた。が、ナターシャは未だ着物を着なければならぬし、タウリチエスキイ公園にも寄りなければならなかつた。

髪が出来上ると、ナターシャは、下から舞踏靴の見える短かい下袴の上に母親の化粧服を羽織り、ソーニヤの所へ駆け寄つて逐一ソーニヤを調べ、それから母親の所へ駆け寄つた。彼女は母親の頭を廻しながら帽子をピンで留め

それから急がしくその白髪に接吻して、自分の袴スカートを短かく縫ひ詰めてゐた女中達の所へ馳せて行つた。

今や、あらゆる注意が、ナターシャの袴スカートに集まつた。その袴は少し長過ぎたのであつた。二人の女中は忙しきうに糸を噛み切りながら、その裾を縫ひ上げてゐた。三番目の女中は、齒と唇でピンを啣へながら、伯爵夫人からソーニヤの所へと走つてゐた。四番目の女中は、片手で絹布の衣服を捧げてゐた。

「マウルーシカ、早く！」

「お嬢様、その指貫を下さいますし。」

「もう出来るかの？」と、伯爵は扉の外から入つて來ながら言つた。「おゝ、お前達の香水でぶん／＼匂ふ。ペロンスカヤ夫人がもう待ち疲れてゐるだらう。」

「出來ました、お嬢様。」と、女中は言つて、二本の指で縫ひ詰めた絹布の袴スカートを摘まみ上げ、何か吹き拂つたり、打ち振つたりした。彼女は斯うした身振りで、自分の持つてゐる物の尊とさと清らかさとの意識を見せやうとしたのであつた。

ナターシャは着物を着始めた。

「直ぐです、直ぐです、這入つて被來つては不可ませんよ、お父様。」と、彼女は自分の顔をすつかり隠してゐる絹布の下袴の下から、扉口を開けた父親に向つて叫んだ。

ソーニヤは扉をバツタリと閉めた。一分間経つと伯爵を中へ入れた。伯爵は青いフロツクコートを着、靴下や舞踏會靴を穿いて、香水を振りかけ、香油を塗つてゐた。

「まア、お父様、ほんとに好く見えてよ、立派だわ！」と、ナターシャは部屋眞中に立つて、絹布のひだを直しな

がら言った。

「何うぞ、お嬢様、何うぞ……」と膝を衝いた女中は、袴を引つ張り、舌の先で口の片方の隅から他方の隅へピンを押し遣りながら言った。

「何うしても！」と、ソーニヤはナターシャの袴を眺めやりながら、絶望したやうに言った。「何うしても！——やつぱり長すぎるわ！」

ナターシャは照身鏡に映して見やうとして、少し遠くへ離れた。袴は長すぎた。

「まア、お嬢様、ちつとも長すぎる事は御座いせんわ。」と、令嬢の後から、床の上を這つて行つたマウルシカは言った。

「でも、お長いやうなら、詰めませう、直ぐですわ、詰めせう。」と、決断の速いゾニヤシヤは言つて、懐の手帛から針を取り出し、再び床の上で縫ひ始めた。

その途端に、帽子を冠り、天鵝絨の長上衣を着た伯爵夫人が、静かな歩調で差かしさうに這入つて来た。

「よう！私の別嬪さん！」と、伯爵は叫んだ。「お前達よりずつと綺麗だぞ……！」

伯爵は夫人を抱かうとしたが、夫人は着物を皺にされるのが厭なので、顔を赤らめながら身を引いた。

「お母様、帽子はもつと横に冠らなくつちや不可いわ。」とナターシャが言つた。「私が留め直して上げませう」彼女は前に駆け出した。袴を縫ひ詰めてゐた女中達は、ナターシャと一緒に駆け出すことが出来なかつたので、網布の片を引き千切つて仕舞つた。

「あらまア！何うしたんでせう？ほんとに私が悪いのぢや御座いせんよ……！」

「大丈夫、私が縫ひます。分りやしませんわ。」と、ゾニヤシヤが言つた。

「美しいお嬢様、私の女王様！」と、扉の陰から入つて来た乳母が言つた。「それからソニユシカ様も、まア美人揃ひなこと……！」

十時十五分過ぎに、彼等は到々馬車に乗つて、出掛けた。併し彼等は未だタウリチエスキイ公園へ行かなければならなかつた。

ペロンスカヤ夫人は、最う支度をしてゐた。彼女は年齢もとつてゐるし、顔付も醜いのに矢張り、ラストフ家の人達がしたと同じことをした。尤もそんなに慌てはしなかつた（彼女にとつて、之は慣れ切つた事であつた。）が、年取つて、美しさを失なつた身体は、やはり洗はれたり、香料を塗られたり、白粉を附けられたりした。彼女は、耳の後を殊更念入りに洗つてゐた。かうしてラストフ家の乳母のやうに、此處の老女中も、自分の女主人が女官の徽章の附いた黄色の長上衣を着て客間へ這入つて来た時、その服装に熱心に見惚れてゐた。ペロンスカヤ夫人は、ラストフ家の人達の服装を賞めた。

ラストフ家の人達は、ペロンスカヤ夫人の趣味と服装とを賞め讃えた。そして髪や衣服に氣を付けながら、十一時に馬車に乗り込んで出掛けて行つた。

ナターシャは、その日は朝から、一分間も自由になれず、又、一度も自分の前に横たはつてゐる事を考へて見るやうな時間を持たなかつた。

ガタ／＼と揺れる馬車の温々した冷たい空気の中で、喪苦しい薄暗闇の中で、初めて彼女は、彼處で、舞踏會で、花やかに燈火の輝いてゐる大廣間で、自分を待つてゐる物——即ち、音楽や、花や、舞踏や、皇帝や、ベテルブルグのあらゆる華々しい若者などを心の中に描いて見た。彼女を待つてゐる者は、非常に美しかった。彼女にはそんな者があらうとは信じられなかつた。夫れは、馬車の中の寒さや、狭苦しさや、薄暗さなどの印象と全然適はなかつたからであつた。けれども、彼女は車寄の赤い絨氈の上を歩み、玄關に這入り、外套を脱ぎ、母親の前をソニーヤと並んで、明るい階段の花の間を登つて行つた時、初めて自分を待つてゐたあらゆる物を見る事が出来た。その時初めて彼女は舞踏會では何う振舞はなければならぬかと云ふ事を思ひ出し、舞踏會に臨む娘にとつて缺く可からざる事と、考へてゐた尊大な身振を伴らうと試みた。併し幸にも、彼女は自分の眼がきよ／＼と動き廻るのを感じた。彼女は自何にもはつきりと見る事が出来なかつた。脈は一分間に百も打つた。そして血は心臓の中で波打つてゐた。彼女は自分を滑稽にするかも知れないやうな身振をする事は出来なかつた。そして昏迷させるやうな震動のうちに、懸命にその震動を隠さうとしながら、歩いて行つた。而かも之が彼女に一番よく似つく身振であつた。彼等の前にも後にも、やはり同じやうな舞踏服を着て、同じやうに低い聲で話してゐる客人達が歩いてゐた。階段の兩傍にある鏡は白や、空色や、薔薇色の衣装を着て、素肌の腕や首に、金剛石や、眞珠を飾つてゐる貴婦人達を映してゐた。

ナターシャは鏡を見たが、その映つてゐる姿で自分と他人とを見分ける事が出来なかつた。皆なはたゞ一つの花やかな列の中に混り合つてゐた。最初の客間の入口の所まで行くと、人の聲や、足音や、挨拶などの單調な響がナターシャを舞にした。明るさと、花やかさとが更らにナターシャを眩惑した。もう半時間も扉口の所に突立つて、来る客、来る客に、*Charmé de vous voir*, (有難う、ようこそ)といふ同じ言葉を繰り返してゐた主人夫婦は、やはり同じ挨拶でラストフ家の人達とペロンスカヤ夫人とを迎へた。

白の服装をし、黒い髪に描ひの薔薇の花を挿してゐた二人の娘は、同じやうに會釋をした。が、女主人は、すらりとしたナターシャの方に我知らず、自分の眼をより長く止めた。女主人はナターシャを見ると、主人としての微笑以外に、特別の微笑をナターシャ一人に見せた。ナターシャを見ながら、女主人は多分自分の黄金時代——再たと返つて来ない處女時代と、自分の最初の舞踏會とを憶ひ出したのであらう。主人もやはりナターシャを見送りながら、伯爵に、何方があなたの息女であるかと訊いた。

「實に可愛い！」と、彼は自分の指の先に接吻しながら言つた。

舞踏室には大勢の客が、皇帝のお着きを待ち受けて、入口の所に群がり立つてゐた。伯爵夫人はこの群の一番前の列に自分の位置を占めた。ナターシャは澤山な聲が、自分のことを訊ねてゐるのを聞いたり、澤山な眼が自分を見てゐるのを感じたりした。彼女は、自分が自分を注目してゐる人々に好印象を與へてゐる事を知つた。そしてこの觀察が幾らか彼女を落着かせた。

「私達のやうな人もゐるし、私達より醜くい人もゐる。」と、彼女は思つた。

ペロンスカヤ夫人は、伯爵夫人に、この舞踏會に来てゐる最も名高い人々を指し示してゐた。

「あれがオランダの大使ですよ、そら、あの白髪の人が。」と、ペロンスカヤ夫人は、房々した銀のやうに白い縮髪の老人を指さしながら言つてゐた。その老人は大勢の貴婦人達に取巻かれたながら、何事かてその貴婦人達を笑はしてゐる

「それから、あの女がベテルブルグの女王と云はれてゐるベズウホフ伯爵夫人です。」と、彼女は道入つて来たエレンを指さしながら言つた。

「まあ、何て綺麗なんぞせう！ マリヤ・アントノウナさんに譲りませんねえ。御覧なさい、青年もお爺さんも、皆なあの女の機嫌を取つてゐるぢやありませんか。あの女は綺麗でもあるし、お利巧でもあるし……何でも殿下が……あの女に夢中におなりになつたと言ふぢやありませんか。でも、あれ、あの二人の女は善い縁縁でもないのに、もつと大勢に取りかこまれてゐますわ。」

彼女は、極めて醜い娘を連れて、客間を横切つて行く一人の貴婦人を指さした。

「あれは大金持の跡取り娘なんです。」とベロンスカヤ夫人が言つた。「あれ、あれが求婚者なんですよ。」

「あれがベズウホフさんの令弟で、アナトール・クラアギンです。」と、彼女は綺麗な近衛の騎兵士官を指さしながら言つた。その士官は頭をグツと反らし、婦人達の頭越しに何處かを見ながら二人の傍を通り過ぎた。「ほんとに綺麗な方ですわね。さうぢやありませんか？ 何でもあの方が、あの跡取りの娘さんと結婚するんださうですよ。それからあなたの従弟さんのドルベエツコイさんも、あの娘には大層御丁寧のやうです。あの娘は何百萬と云ふ資産家ださうですよ。どれ、あれはフランス大使です。」と、彼女は、之は誰れだと云ふ伯爵夫人の間に對して、コオレンクルのことを答へた。「御覧なさい。何處かの王様のやうでせう。でも、矢張り綺麗ですわね、フランス人はほんとに綺麗ですよ。社交界でフランス人ほど美しい人はありません。あゝ、あの女が被來つた！ さう、私達のマリヤ、アントノウナさんは矢張り他のお方よりは美しく被居る、それに、何といふさつぱりした服装でさう！ 素的ですね！」

「それから、あの眼鏡を掛けた、てつぷりした人、あれは世界共済組合員です。」とベロンスカヤ夫人は、ベズウホフを指し示しながら言つた。「ですが、奥さんの傍へ置いて御覧なさい、あの人はまるで雑色の着物を着た道化役者ですよ！」
ビエールはてつぷりした體驅を泳がせたり、群衆を押し分けたり、市場の雑沓の中を歩いててもゐるかのやうに、無様に、人が好きに、右左に首肯いたりしながら歩いてゐた。彼は確かに誰かを捜しながら群衆の中を分け歩いてゐるのらしかつた。

ナターシヤは、ベロンスカヤ夫人の、所謂雑色の着物を着た道化役者ビエールの見知つた顔を嬉しさうに見た。そして群衆の中にビエールが捜してゐるのは、自分達、わけても自分であるといふ事を知つた。ビエールはナターシヤに舞踏會で遇つて、ナターシヤの爲めに舞踏の相手を紹介することを約束して置いたのであつた。

併し、ラストフ家の人達の處まで來ないうちに、ビエールは、白い制服を着た中背の、非常に立派な、稍々色の黒い男の傍に立ち止まつた。その男は窓の所に立つて、星章と綬を帯びてゐる丈の高い人と話してゐた。ナターシヤは白い制服を着た中背の若者を直ぐ見分けた。それはバルコンスキイであつた。ナターシヤにはバルコンスキイが前よりも若くなり、快活になり、立派になつたやうに見えた。

「私達の知つてゐる人がまだゐてよ、バルコンスキイ、見えて、お母様？」と、ナターシヤは、アンドレー公爵を指さしながら言つた。「オトラドノエの家に一晩泊まつた事があつたでせう？」

「まあ、あなたはその方を御存知ですか？」と、ベロンスカヤ夫人が言つた。「私はあの方には俄慢がなりません。Il faut à present la pluie et le beau temps. あの方は丁度今が大持の絶頂ですよ！ それにあの高慢なことは！ ほんゝに限りがないですよ！ お父様の血筋を受け継いだのですね！ それにスベランスキイと結たくして何かの計畫を

立ててゐるのですよ。御覽なさい、あのまア貴婦人達に對する作法を！あの婦人が話しかけてゐるのに、背中を向けて仕舞ひました。」と、ペロンスカヤ夫人は、彼を指指さしながら言つた。「若しあの貴婦人達にしたやうなことを私にしたら、私は散々懲らしてやります。」

十六

俄かに皆なざわつき出した。群集は喋りながら前の方へ進んだが、やがて兩方に分れた、二列に分れた群衆の間を、音樂の響のうちに、皇帝が歩いて來た。皇帝の後には主人夫婦がついて來た。皇帝は、最初の挨拶の瞬間を速に通れやうともするかのやうに、急いで左右に會釋しながら這入つて來た。樂隊は皇帝のことを謳つた、その頃流行のポランドの歌曲を奏した。その文句は次のやうな言葉で始まつてゐた。アレキサンドルよ、エリサベタよ、御身等は我等が心を歡喜せしむ。皇帝は客間へ這入つた。群集は扉口の方へどやどやと進んだ。幾人もが顔色を變へて急がしく彼方へ行つたり、此方へ來たりした。皇帝が女主人と言葉を交はしながら客間の扉口に現はれると、其處にゐた群集は再びどやどやと後へ退いた。取り上せたやうな顔容をした或る一人の若者は、貴婦人達の所へ飛び込んで來て、どうぞ臨へ退いて呉れと頼んだ。交際社會の禮儀作法などは悉く忘れて仕舞つたといふやうな顔容をした幾人かの貴婦人達は、服裝が崩れるまで前の方へ押した。男達は婦人達に近付き、ポランド舞の組を造り始めた。皆なが路を開けると、皇帝は微笑みながら、この家の主婦の手を取つて、樂の音に歩調を合せず客間の扉口から出

た。皇帝の後には、マリヤ・アントノウナ・ナリイシキナと伴れ立つて主人が續き、それから大使たち、大臣たち、いろ／＼な將軍たちが續いた。ペロンスカヤ夫人は間斷なくその人達の名を言つてゐた。貴婦人達の半數以上は舞踏の相手を持つてゐた。そしてポランド舞に加はつてゐるものもあり、加はらうと用意してゐるものもあつた。

ナターシャは、自分が母親や、ソーニヤと一緒に、ポランド舞にも誘はれずに壁にくつ付いてゐる少數の貴婦人達の中に、取り残されてゐるのに氣が附いた。彼女は、自分の細そりした腕を垂れて立つてゐた。辛つと輪廓の出來た彼女の胸は、規則正しく波打つてゐた。彼女は呼吸を止めながら、輝かしい怖々とした眼で自分の前を眺めてゐた。その顔は、大きな喜びにも、大きな悲みにも傾かうとするやうな表情をしてゐた。彼女は皇帝にも、ペロンスカヤ夫人が指差す偉い人達にも興味を感じなかつた——彼女はたゞ一つの考へを持つてゐたのであつた。

「私の所へ誰も來ない筈はない。最初の組に混ぢつて、私に踊れない筈はない。この大勢の男達が私に氣が附かない筈はないのだが。今での模様では私を見附けないらしい。よし見附ける者があつても、皆な、(あゝ！彼女ぢやない、だから見たつてつまらない。いや、彼女ぢやないにきまつてる！)とても云つてるやうな顔容をして見る。」と彼女は思つた。「何んなに私が踊りたがつてゐるか、何んなに私が上手に踊るか、私と踊つたら何んなに面白いか、何うしてもあの人達に知らてやらなければならぬ。」

先刻から續いてゐるポランド舞の樂の音は、ナターシャの耳には、さながら悲しい思ひ出のやうに響き始めた。彼女は泣きたかつた。ペロンスカヤ夫人は彼等の傍を離れて仕舞つた。伯爵は舞踏室の彼方の端にゐた。伯爵夫人と、ソーニヤと、彼女とは、誰の興味も惹かず、誰の役にも立たずに、知らない人々の群に混ぢつて、さながら森の中にもゐるやうに寂しく立つてゐた。アンドレー公爵は一人の婦人と一緒に彼等の傍を通つたが、彼等には氣が附かな

かつたやうであつた。美男子のアナトールは、自分の腕に縋つてゐる婦人には、微笑しながら何か言つてゐた。が、ナターシャの顔には、壁でも見るやうな眼付を向けた。パリースは二度も彼等の傍を通つたが、その度毎に顔をそむけた。踊つてゐなかつたベルグは妻と一緒に彼等の方へやつて来た。

此處で、この舞踏室で、家族の者が落合ふといふ事は、さながら舞踏會以外には、家族の者の話をする場所が何處にもないやうで、ナターシャには耻かしく思はれた。彼女は、ヴェーラが自分の緑色の着物の事に就いて何事やら言つたのを聞きもしなければ、ヴェーラを見もしなかつた。

到頭、皇帝は自分の踊相手の最後の婦人の傍に立ち留つた。(彼は三人の婦人と踊つてゐたのであつた。)音楽も止んだ。心配さうな顔容をした副官が、ラストフ家の人達の所へ走つて来て、彼等が壁際に立つてゐるのに、もつと後へさがつて呉れと頼んだ。オーケストラの席からは、鮮やかな、よく整つた、誘惑的な、調子のいい、ワルツの音が聞えて来た。皇帝は微笑しながら舞踏室を眺めてゐた。一瞬間が過ぎたが、未だ誰も始めなかつた。世話役の一副官がベズウホフ伯爵夫人の所へ行つて、一緒に踊つて呉れと頼んだ。微笑みながら彼女は片手を挙げ、彼を見ずに、その手を副官の肩に載せた。踊の名人なるその世話役の副官は、相手の婦人をぎゅつと抱き締め、彼女と一緒に、自信と、落着きを見せながら舞踏室に沿つて先づ調子のいい、滑歩を始めた、それから舞踏室の隅の所で、相手の左手を取つて、彼女をぐるりと廻らせた。そして、段々速くなつて来る樂の音を通して聞えるものは、只副官の素早い軽やかな兩の拍車が單調に鳴ると、三ツ目の足踏毎に、くるりと廻る時、さつと纏へる相手の天鵝絨の袴スカートの鳴る音だけであつた。ナターシャは二人を見てゐた。そしてワルツの最初の一回めりを踊るのが自分でなかつたことを泣きたく思つた。

元氣附いた快活な顔付をしてゐるアンドレー公爵は、騎兵佐官の白い軍服を着け、靴下と舞踏靴を穿いて、ラストフ家の人達からあまり遠くなく、舞踏室の前列に立つてゐた。フィルゴフ男爵は、昨日開かれる筈の、國會の第一回開會の事に就いて彼と話をしてゐた。スベランスキイと懇意なものと、立法委員會の事業に携はつてゐたのとで、アンドレー公爵は、種々な風説が流布されてゐた昨日の開會に就いて權威ある意見を與へることが出来た。併し彼はフィルゴフが自分に云つてゐる事を聞かずに、皇帝を見たり、踊らうとしてゐるが、舞踏室へ入り得ないでゐる紳士達を見たりしてゐた。

アンドレー公爵は、皇帝の前で悴々してゐる是等の紳士達と、踊つて呉れと頼まれたいので、どき／＼してゐる貴婦人達とを見守つてゐた。

ビエールはアンドレー公爵の所へ行つて、彼の腕を捉へた。

「君は何時も踊るぢやありませんか。其處に僕の被保護者プロテジエで、若いラストオワさんが居ります。彼女に頼んだら何うです。」と、彼は言つた。

「何處に？」とバルコンスキイは訊ねた。「失禮しました」と、彼は男爵の方に向いて言つた。「その話の後は、何れ別な處でいたしませう。舞踏會では踊らなければなりませんから。」彼は、ビエールが指示した方向へ進んで行つた。すると、ナターシャの絶望したやうな茫然とした顔がアンドレー公爵の眼に入った。彼はナターシャを知り、ナターシャの感情を察し、これがナターシャが初舞臺である事に氣が付き、窓の所でナターシャが言つた言葉を憶ひ出した。そして顔に楽しさうな表情を浮かべながら、ラストオフ伯爵夫人に近寄つた。

「私の娘ひなにお紹介おまじすることをお許し下さいまし。」と、伯爵夫人は赤くなつて言つた。

「もうお知己ちかひにはなつて居ります、伯爵夫人は私を御記憶だらうと存じますが。」とアンドレー公爵は、叮嚀に低く點頭をしながら言つた。それはペエロンスカヤ夫人が、彼の無作法に就いて言つた言葉とは、全く正反對であつた。彼はナターシャの所へ行き、踊に誘ふ口上を言ひ切らないうちに、彼女の腰を抱かうとして片手を差出してナターシャにワルツを踊らうと申し込んだ。絶望にも大喜エウスタシイ悦にも、直ぐ傾かうとしてみたナターシャの顔の衷心したやうな表情は、忽ち、幸福な、感謝に満ちた、子供らしい微笑に輝いた。

「私、長いことあなたを待つて居りましたの。」喫驚しながらも、幸福になつた娘は、アンドレー公爵の肩に自分の片手を載せながら、あふれ出やうとしてゐる涙を通して現はれた微笑で、斯う言つてゐるやうに思はれた。二人は舞踏園に二番に入つた一組であつた。

アンドレー公爵は、その時分の上手な踊り手の一人であつた。ナターシャも非常に巧く踊つた。縞子の舞踏靴を穿いた彼女の小さな足は、その持主とは關係なく、敏捷に軽々とその勤めを果たした。そして彼女の顔は幸福の歡喜で輝いた。彼女の露出な首と腕とは瘡せてゐて、エレンの肩に比べると美しくなかつた。彼女の肩は瘡せてゐるし、胸の形もまだ定まらず、兩腕も細かつた。けれどエレンは、さながら、その身體の上を這つて行つた幾千とない眼の假漆ニスで蓋はれてゐるやうであつた。これに反して、ナターシャの方は、さうしななければならぬものだ、有らゆる人から確かめられなかつたら、非常に耻かしかる、初めて肌を露はした若い娘のやうに思はれた。

アンドレー公爵は舞踏が好きであつた。彼は、皆なが自分に話しかける政治上や學術上の話から、なるだけ速く遁れたかつたし、又、皇帝の臨席から生じた壓迫の辱を少しも速く破りたいと思つたので、舞踏をすることにし、ピエールがナターシャを指したのと、ナターシャが彼の眼に止まつた最初の綺麗な娘であつたのとで、ナターシャを選ん

だのであつた。併し彼はナターシャの細つそりした、しなやかな腰を抱かんばかりにしてゐた。ナターシャは彼の近くで動き、彼の近くで微笑んでゐた。で、彼女の美しさは酒のやうにカツと彼の頭を衝いた。彼は深く息を吸ひ込みながらナターシャを立ち止まらせ、自分も立ち止つて他の舞踏者達を眺めた時、自分の生命いのちと若々しきを感じた。

十七

アンドレー公爵の後で、バリスがナターシャに踊つて呉れと頼みに來た。舞踏を始めた舞踏好きの副官も來た。それからまだ大勢の若い男たちも來た。幸福に上氣したナターシャは、有り餘る自分の相手をソーニヤに譲つて、一晩中、斷えず踏つてゐた。彼女はその舞踏會で、他の人達が心を惹きつけられてゐたものには、少しも氣が附かなかつたし、また夫れを見もしなかつた。彼女は、皇帝が長いことフランス大使と話してゐたことにも、皇帝が或る貴婦人と殊更ら叮嚀に話してゐたことにも、某殿下や某氏などが斯々のことを言ひ、斯々のことをしたといふことにも、エレンが大成功をして、誰某の特別の注意を受けてゐたことにも少しも氣が附かなかつたばかりか、皇帝をさへ見なかつた、そして皇帝の還御の後、一層舞踏會が盛になつたので、初めて皇帝の還御を知つた位であつた。アンドレー公爵は晩餐前の最も面白い四班舞踏コナリアンの一ツを、またナターシャと一緒に踊つた。彼はナターシャに、二人が初めてオトラドノエの並樹路で會つたことや、月夜に彼女が眠れなかつたことや、自分が我知らず彼女の言葉に聞き入つたことなどの想ひ出を話した。ナターシャはこの想ひ出を聞くと顔を赤くした。そしてアンドレー公爵が我知らず自分の

歌を立ち聴きした時の自分の感情の中に、何か知ら耻づべき物があつたかのやうに、頻りに自分を辯解した。

交際場裡で生ひ育つた人達のやうに、アンドレー公爵は、習俗的な性質を持つてゐない者に交際場裡で出會ふ事が好きであつたが、ナターシヤは、その驚きや、喜悅や、内氣や、フランス語の間違などから見て、確かに夫れであつた。アンドレー公爵は、殊に優しく、用心深くナターシヤに應待し、話しをした。アンドレー公爵は彼女の傍に座り、極く單純な詰らない問題に就いて彼女と話しながら、彼女の眼と微笑との嬉しさうな輝きに見惚れてゐた。その微笑は、アンドレー公爵の話から作られたものではなくして、彼女の内部的幸福から作られたものであつた。皆ながらナターシヤを選び、ナターシヤが微笑を浮かべながら立ち上がつて、舞踏場を踊り廻つてゐる時、アンドレー公爵は取り別けその内氣な愛らしさに見惚れてゐた。四班舞踏の最中に、その一節を終ると、ナターシヤは重苦しく息を吐きながら自分の席へ歸つて來た。別の相手が再び彼女を選んだ。彼女は疲れて喘いでゐた、そして一時は明かに斷はらうと思つたらしかつたが、直ぐさま愉快さうに相手の肩に手を置き、アンドレー公爵に莞爾として見せた。

「私はあなたのお傍に座つて、憩んでゐたら御座いますわ。私疲れたんですもの。けど、皆さんがこの通り間斷なしにお遊びなさるんでせう、私嬉しう御座いますわ、幸福ですわ、何誰も愛しますわ。私達には夫れがすつかり解つてゐますわねえ。」そして夫れよりも、もつと多くの事を、その微笑は語つてゐた。相手が彼女の傍を離れると、ナターシヤは、次の一節を踊る爲めに、二人の婦人を選ぼうとして、舞踏室を横切つて走つて行つた。

「若し最初に俺の従姉の所へ行つて、次にも一人の婦人の所へ行つたら、あの娘は屹度俺の妻になる。」と、アンドレー公爵は、彼女を見守りながら、突然、獨語つた。彼女は最初に従姉の所へ近づいた。「時々、何といふ馬鹿らしいことを考へるものだらう！」と、アンドレー公爵は考へた。「だがあの娘は非常に美しく、

非常に素直だから、此處で一月と踊らないうちに、結婚すると云ふことだけは確だ……。そんなことは此處では珍らしい。」と彼は、ナターシヤが、その胸衣から落ちかゝつてゐた薔薇の花を挿し込みながら、自分の傍に座を占めた時に思つた。

四班舞踏の終りに、青いフロツクコートを着た老伯爵は、踊つてゐる人達の所へやつて來た。彼はアンドレー公爵に是非訪ねて來て呉れと言ひ、娘に面白かつたかと訊ねた。ナターシヤは答へずに、たゞ莞爾とした。その微笑は、「何うしてそんな事が訊けるんでせう？」と、たしなめてゐるやうであつた。

「面白かつたわ、生れてから斯んなことは初めてよ！」と、彼女は言つた。アンドレー公爵は、ナターシヤの瘠せた兩手が父親を抱かうとして素速やく持ち上げられて、直ぐまた下へ下ろされたのを見た。ナターシヤは生れてから、未だ一度も経験したことがなかつた程幸福であつた。彼女は、人が全く善良になり、親切になつて、惡徳や、不幸や悲しみなどの可能を信じなくなつた時のやうな、幸福の最高點に達してゐた。

ピエールはこの舞踏會で、自分の妻が上流社會で占めてゐる位置の爲めに自分が侮辱されてゐることを初めて感じた彼は沈んでぼんやりしてゐた。彼の廣い額には大きな皺が刻まれてゐた。彼は窓の傍に佇立つて、眼鏡越しに見てゐたが誰も眼には入らなかつた。

ナターシヤは晚餐の席へ行く途すがら、彼の傍を通りかゝつた。

彼女はピエールの陰鬱な、不幸さうな顔を見て吃驚した。彼女はピエールを力づけて、自分の有り餘つてゐる幸福

を分けてやりたいと思つた。

「ほんとに愉快ですのねえ、伯爵。」と、彼女は言つた。「さうぢやなくつて？」

ビニールは、茫然したまゝ莞爾としたが、ナターシャが自分に何を言つたか分らなかつた。

「さうです、私は非常に嬉しいです。」と、彼は言つた。

「何うして人様は、何かに不満を有つてゐるのだらう！」と、ナターシャは考へた。「取り別け、ペズウホフのやうなこんな方がいい方が。」ナターシャが見たところでは、舞踏場にゐる人達は、皆な同じやうに親切で、優しく、美しい人達で、互に愛し合つてゐる人達ばかりで、誰もお互に侮辱し合つたりしないから、皆な幸福でなければならなかつた。

十八

翌日アンドレー公爵は昨日の舞踏會の事を想ひ出したが、それを長くは考へてゐなかつた。「さうだ、非常に華やかな舞踏會だつた。そればかりぢやない……さう、あのラストワはなか、美しい。あの娘には、あの娘獨特の爽やかな、ベテルブルグらしくない何ものかがある。是れが前の日の舞踏會に就いて、彼の考へた凡てであつた。彼は茶を飲んで了ふと仕事に取りかゝつた。

併し、疲勞の爲めか若くは不眠症の爲めか、その日は仕事に氣の進まない日であつたので、アンドレー公爵は何にも仕送ける事が出来なかつた。彼は一日中自分の仕事を批評してゐた。之れは彼によくあることであつた。が、誰か來

たと聞いた時には喜んだ。

來た人といふのは、いろ／＼な委員會の議員で、ベテルブルグのあらゆる社交團の會員であるピツキイであつた。彼は新思想及びスベランスキイの熱心な崇拜家であり、ベテルブルグで起る噂の世話好きな取次手であり、思潮を衣服のやうに、流行に随つて選擇し、而かもそれが爲めに、最も熱心な黨員と見られるやうな人間の一人であつた。彼は帽子を脱る間も待ち遠しく忙しさにアンドレー公爵の所へ駆け寄つて早速話し出した。彼は皇帝が開いたその朝の國會開會の詳報を得て來たばかりなので、そのことに就いて熱心に話し出したのである。皇帝の演説は素晴らしいものであつた。それはたゞ立憲國の君主だけが言ふやうな演説であつた。「陛下は國會及び元老院は國家の代表者であると斷言なさいました。陛下は政治の基礎は、横暴ではなく、確固たる原理でなければならぬと仰せられました。陛下は財政を改革して、計算は公表しなければならぬと仰せられたのです。」と、ピツキイは、或る言葉に力を入れて意味ありげに眼を見開きながら物語つた。

「さうです、今日の會議は、時代を劃するものです。我が國の歴史に、最も大なる時代を劃するものです。」と彼は結論した。

アンドレー公爵は、國會開會を熱心に待つてゐた、之れを非常に重大視してゐた。彼はその國會開會の話聞いたが、それがいよ／＼實現された今になつてみると、その事件が、彼を感動させないばかりか、案外無意義なものに思はれたので喫驚した。彼は靜かに皮肉な微笑を洩しながら、ピツキイの熱心な話を聞いてゐた。彼の頭には極めて單純な考が浮んだ。「俺やピツキイにとつて夫れが何であらう？國會で陛下が何んな事を仰せられやうと、それが我々に何の關係があらう？そんな事が俺を一層幸福にし、一層好くすることが出来るであらうか？」

そして、この單純な反省が、今現に行はれつゝある改革に對して、これまでアンドレー公爵が持つてゐた有らゆる興味を破壊して仕舞つた。その日、アンドレー公爵はスベランスキイのところへ、亭主役たるスベランスキイが彼を招く時に言つた「ほんの二三の友達」と食事をする筈になつてゐた。自分をか程までに引きつけた親しい内輪同志で食事をすると云ふ事は、アンドレー公爵にとつて何より興味ある事のやうに思はれたのであつた。殊に家庭に於けるスベランスキイをこれまで一度も見たことがなかつたので、取り別けさうであつた。が、今はもう彼のところへ行きたいとは思はなかつた。

併し、約束の會食時間に、アンドレー公爵は最うタウリチエスキイ公園の傍にあるスベランスキイの小さい家に這入りつゝあつた。少し遅れたアンドレー公爵は、(修道院の清淨を思はせるやうな)非常に綺麗な寄木細工の食堂に行つて見ると、五時からもう集まつてゐたスベランスキイの親しい友達の一團を見出した。そこには(父親に似て面長な)スベランスキイの小さい娘と、その家庭教師とはゐるが、他の婦人は一人もゐなかつた。客はゼルヴェーと、マグニツキイと、ストレイピンとであつた。アンドレー公爵は、玄關に這入ると直ぐに、大きな聲と、甲高い、はき／＼した笑聲——よく舞臺で聞くやうな笑聲とを聞いた。誰か、スベランスキイの聲によく似た聲で、はつきり斷々に、ハツ……ハツ……ハツ……と笑つてゐた。アンドレー公爵は、これまで一度もスベランスキイの笑聲を聞いた事はなかつた。で、この國家的人物の甲高い徹りのいゝ、笑聲を聞くと、異様に感動させられた。

アンドレー公爵は食堂へ這入つて行つた。一座の連中は皆な二ツの窓の間の、食物の載せてある小さい食卓の傍に立つてゐた。スベランスキイは勳章の附いた灰色のフロックコートと、評判の國會開會式に臨んだ時に着てゐた例の白い胸衣と、白の高い袴飾りとを着け、愉快さうな顔付をして、卓テーブルの所に立つてゐた。客は彼を取り巻いてゐた。

マグニツキイは、彼に向ひ合つて、珍談を語つてゐた。スベランスキイは、マグニツキイが言はうとすることを前以て笑ひながら聞いてゐた。丁度アンドレー公爵が部屋に這入つた時、マグニツキイの言葉は、再び笑ひ聲で鳴り消された。ストレイピンは乾酪のついてゐる麵麩の一片を噛みながら、洞羅聲で笑つてゐた。ゼルヴェーは靜かにフ、と笑つてゐた。スベランスキイは細い、はき／＼した笑ひ方をしてゐた。

スベランスキイは、やはり笑ひながら、アンドレー公爵にその白い優しい手を差し出した。

「よくお出で下さいました、公爵。」と彼は言つた。「一寸……」と、彼はマグニツキイの方へ振り向いて、その話を遮ぎつた。「我々は今日約束したのです。これは祝ひの食事ですから、公務の事に就いては一言も言はないことに。」それから彼は再び話手の方へ振り向いて、また笑ひ出した。

驚愕と愛メランコリー 鬱メランコリーな幻滅を感じながら、アンドレー公爵はその笑ひ聲を聞き、笑つてゐるスベランスキイを見た。それはスベランスキイではなく、誰か他の人であるやうにアンドレー公爵には思はれた。スベランスキイのことで、是迄神秘に、且つ偉く見えてゐた所のものが、アンドレー公爵には、急に明らかに、平凡に見えて來た。

食事の時にも、談話は一瞬間も途絶えなかつた。そしてその談話は滑稽逸話集とでも言つたやうなものから抜いて來たものゝやうであつた。マグニツキイが珍談を終るか終らないうちに、も一人の紳士が何かそれよりも一層可笑しいことを話さうと言ひ出した。その珍談は大抵官界のこととなければ、官吏に關するものであつた。この連中の間には是等の役人達の無能な事が十分認められてゐて、それ等の役人達に對して取り得らるゝ唯一の態度は、たゞ善良な嘲笑的態度であると決められてゐるかのやうに思はれた。スベランスキイは、その朝の議場で、一人の耳の速い大官が、あなたの意見はと訊かれて、やはり同意見ですと答へたといふ話をした。ゼルヴェーは、顯要な位置にゐる人達

が皆な無能である事をよく現はしてゐる法典改修のことをすっかり話した。ストルイピンは吃りながら談話に加はつて、その談話を眞面目な談話にしようかと思ふ程、熱心に舊制度の弊害に就いて喋り出した。マグニツキイは、ストルイピンの熱心を冷やかかし始めた。セルヴェーもちや／＼を入れたて、談話はまた以前の陽氣な調子に戻つた。

スベランスキイが、勞苦した後で、かうした友達エドムの團樂の中に憩ひ、且つ面白い話をする事を好んでゐるといふ事は明かであつた。彼のお客は皆な彼のこの希望を解してゐるので、彼を浮き立たせ、また自分達も浮き立たうとしてゐた。が、かうした悦樂は、アンドレー公爵には重苦しい不快な事のやうに思はれた。スベランスキイの細い聲は、アンドレー公爵を不快にした。そして間斷なしに續く、故意わざとらしい笑聲は、何うした譯か、アンドレー公爵の感情を傷つけた。アンドレー公爵は笑はなかつた。そしてこの連中から畑はたけつたく思はれはしないかと恐れた。併し誰一人、彼がこの全體の氣分に一致してゐないと云ふことを氣付いた者はなかつた。皆なは、非常に愉快さうであつた。

アンドレー公爵は、幾度となく談話はなしに加はらうとしたが、その度毎に彼の言葉は、水の中から浮き上るコルクのやうに、何處かに攫さらはれて仕舞つて、何うしても皆なと一緒に戯談を言ふことが出来なかつた。

彼等の言ふ事には、間違つた事とか、不適當な事とかは少しもなかつた。みんな適切で氣が利いてゐて、面白かるべき筈であつた。けれど何物か——悦樂の旨味うまみを成してゐるその物が——缺けてゐた。それに、彼等は、さういふ物の存在をすら知らなかつた。

食事が終ると、スベランスキイの娘とその家庭教師とは立ち上がった、スベランスキイは、例の白い手で娘を撫でて接吻した。ところが、その身振も、アンドレー公爵には不自然に見えた。

男達は、イギリス流に、ポルト葡萄酒ポルトワインを汲みながら食卓に坐つてゐた。談話はイスパニヤに於けるナポレオンナポレオンの行動にとんだ、みんなは一致してその行動を是認したが、その話の最中、アンドレー公爵は皆なに反對した。スベランスキイは微笑した。そして話題を變へやうとするらしく、その話とは關係のない或る珍談を話し出した。暫らくの間誰も彼も黙つてゐた。

暫く卓テーブルに就いてゐたスベランスキイは葡萄酒の壺せんをして、「近頃では良い酒があまり無い！」と言ひながらその壺を從僕に渡して立ち上がった。みんなも立ち上がつて、やはりガヤ／＼と話しながら客室へ這入つて行つた。スベランスキイは、特使が持つて來た二ツの封書を受け取つた。彼はそれを手にして、自分の書齋へ這入つて行つた。彼が行つて仕舞ふと直ぐに、みんなのはしやぎ方が少し鎖くさりまつた。そして客達は互に考へ深く靜かに話し出した。「さア、では朗讀だ！」とスベランスキイは書齋から出て來ながら言つた。「驚くべき天才です！」と彼はアンドレー公爵に向つて言つた。マグニツキイは早速身構へして、ペテルブルグのいろ／＼な知名の士を諷刺した自作のラング語の詩を朗讀し出した。幾度とはなく、彼は喝采の爲めに妨げられた。朗讀が終はると、アンドレー公爵は、暇乞ひをする爲めにスベランスキイの傍へ近寄つた。

「何故さうお急ぎなさるのです？」と、スベランスキイは言つた。

「或る晩餐會に行く約束をして置きましたので……」
二人はそれ限り何にも言はなかつた。アンドレー公爵は、自分の直ぐ近くにある、例の見透し難い、鏡のやうな眼を見ると、スベランスキイや、スベランスキイに關係のある自分の一切の仕事などから、何物かを期待し、スベランスキイのしてゐる事に、價値を認めることが出來たのを不思議に思つた。例の几帳面な、楽しさうでもない笑ひは、

スベランスキイの家を出てからも、長いことアンドレー公爵の耳の中に響いてゐた。

家へ歸ると、アンドレー公爵は、過去四ヶ月間のペテルブルグに於ける自分の生活を、何か新しいものでもあるかのやうに想ひ出し始めた。彼は自分の努力や、研究や、研究をするといふので受け入れられたが、他に貧弱な計畫が、既に出来上がつて皇帝の所へ差出されたといふ、たつた夫れだけの理由で、到頭棄却された自分の軍規改良の計畫の事などを考へた。彼はベルグがその委員になつてゐる委員会の會議の事を考へた。彼は夫れ等の會議に於いて、會議その物の形式や議事の進行などに關する種々なことが綿密に長たらく審議されたことや、問題の本質に關する事と云へば何事でも、出来るだけ簡短に片附けられて仕舞つた事などを考へた。彼は自分の法典改修の事業や、ローマ法典とフランス法典とを念入りにロシア語に譯した事などを考へると、自分ながら耻かしくなつた。それから彼は、まざく／＼とボクチャロウオ村や、田舎での事業や、リヤザンへの旅行の事などを想像し、猶ほ自分の百姓達の事や、村長ドロン^のの事をも考へた。そして、幾つかの頂に分けた人権を彼等に適てはめて、見てかうした暢氣な仕事に、これ程長い間没頭して居られたのが不思議でならなかつた。

十九

翌日、アンドレー公爵は、以前には訪ねたことのない様々な人を訪問した。そして、その中には、彼が此間の舞踏會で、再び懇意になつたラストフ家^{まち}も混つてゐた。禮儀上から言つても、ラストフ家へは是非訪ねて行かなければならなかつたが、さうした考へは別として、アンドレー公爵は、自分に楽しい思ひ出を残した例の特色のある元氣のい

らなかつたが、さうした考へは別として、アンドレー公爵は、自分に楽しい思ひ出を残した例の特色のある元氣のいゝ娘をその家庭に見たかつたのであつた。

ナターシャは、眞先に彼を出迎へた一人であつた。彼女は青い色の平常服^{ふだんぎ}を着てゐたが、アンドレー公爵には舞踏服を着てゐた時よりも一層美しく見えた。彼女も家族の人達も皆な昔からの友達として、淡白^{あつさり}と懇ろに歡迎した。會ではアンドレー公爵が、手酷く批評したことのある家族も、今では非常に優れた、淡白^{あつさり}とした、親切な人々から成り立つてゐるやうに思はれた。老伯爵の款待と親切とは、ペテルブルグでは取り別け眼立つて心を惹かれたので、アンドレー公爵は何うしても食事に留まらざるを得なかつた。「さうだ、この人達は實に善良な、この上なく好い人達だ。」とバルコンスキイは思つた。「勿論この人達は、ナターシャに何んな寶があるか少しも知つてゐない、が、あれ程生命に満ちてゐるこの美しい娘の、たまらない程詩的な姿に對して、最も好い背景を爲してゐる善良な人達だ。」

アンドレー公爵は、ナターシャには、自分とは全くかけ離れた、自分には知られない悦びに満ち溢れた特別な世界があることを感じた。そして、その世界はオトラレドノエの並樹路や、あの月夜の窓の上で語り合つた時には、まだ彼を苦しめたのであつた。が、その世界も今日ではもう彼を苦しめはしなかつた。もう彼に無關係な世界ではなく、反つて彼自身の中へ踏み込んで、その中に新しい快樂を見出しつゝあつた。

食事が済むと、ナターシャは、アンドレー公爵の請ひに應じて、翼琴の所へ行つて歌ひ出した。アンドレー公爵は婦人達と話しながら窓の所に立つて、ナターシャの歌を聞いてゐた。歌の最中に、アンドレー公爵は黙つて了つた。そして自分ではそんな事があらうとは思つてゐなかつたのに、突然涙で咽喉が詰まるやうに感じた。彼は唄つてゐるナターシャを見た。彼の心の中には、何かしら新しい幸福な物が湧き出た。彼は幸福であつた。同時に悲しかつ

た。彼には泣くやうな事は何にもなかつたが、たゞ何となく泣きたくなつて来た。何が悲しいのだらう？ 過ぎ去つた戀だらうか？ 小さい公爵夫人だらうか？ 失はれた幻影だらうか？……將來に對する自分の希望だらうか？……さうでもあり、又、さうでもなかつた。彼の涙をそゝつた主な物は、彼の中にある無限に大きい際限なき或る物と、彼ばかりか、ナターシャさへも支配してゐる限られた物質的な或る物との恐る可き對照を突然に生々と意識したことであつた。この對照が彼女の唄つてゐる間、彼を悲しませたり喜ばしたりしたのであつた。

ナターシャは唄ひ終るや否や、彼の所へ行つて、自分の聲が好きか何うかと訊いた。彼女はそれを訊いた。が、それを訊くと直ぐ、そんな質問をする必要はなかつたと氣付いたので、恥かしく思つた。彼は、ナターシャを見て莞爾した。そして、あなたにする事は何でも好きであるやうに、あなたの歌も好きであると言つた。

アンドレー公爵は夜更けてからラストフ家を辭し去つた。彼は何時もの通り床に就いたが、直ぐに眠れなさと云ふ事を知つた。で、彼は蠟燭を點けて、寢臺の上で起き直り、それから立ち上つたり、また横になつたりした。が眠れないのが苦痛でも何でもなかつた。彼は息の詰まるやうな部屋から、神の自由な世界にでも入つたやうに、心の新しい悦びを感じた。自分はラストフ家の娘を戀してゐるのだといふやうな考へは、彼に起らなかつた。彼はてんで娘のことを考へてゐなかつた。たゞ娘の姿を心に描いてみたゞけてあつた。すると彼の全生活は新しい光に包まれてその前に現はれた。「生活が、あらゆる喜びに満ちた全生活が俺の前に展げてゐるのに、何故俺はびく／＼してゐるのだらう何故この狭い、窮屈な常規わづかの中にく／＼してゐるのだらう？」と彼は獨語つた。そして彼は生れて初めて、將來に對する幸福なる計畫を立て始めた。彼は自分で息子を教育し、附添教師を見付けたら、それに子供を托しそれから自分は軍隊を退いて、外國へ行き、イギリス、スキツツル、イタリイを見なければならぬと決心した。「俺は自

は自分の中にこれ程多くの若さと力とを感じてゐるうちに、自分の自由を利用しなければならぬ。」と彼は獨語つた。「ビエールが、幸福にならうとするには、幸福の可能を信じなければならぬと言つたのはほんとうだ。俺は今それを信ずる。死人には死人を葬らせるがよい。生きてゐるうちは、生きて幸福でなければならぬ。」と、彼は思つた。

二十

或る朝聯隊長のアドルフ・ベルグがビエールを訪ねて来た。ビエールはモスクワやベテルブルグの總ての知人と同じ程度にベルグを知つてゐた。彼は仕立たばかりの新しい制服を着け、皇帝アレキサンドル・パウロキツチのやうに、髭を油で捲き上げてゐた。

「私は今あなたの奥様の伯爵夫人をお訪ねしたのでしたが、不幸にも私の願ひは聞かれませんでした。伯爵、どうぞあなたは、私を仕合せにして下さいませんか。」と彼は微笑しながら言つた。

「何うするのです、聯隊長？ 私は出来るだけのことはします。」

「私は、伯爵、今ではもうすつかり新宅に落着きましたので、」と、ベルグは、この事を聞くのは、何うしても心持の好い事であればならぬと云ふことを確信しながら言つた。「で、私は私の友人や家内の友人の爲めに小晩餐會を催したいと思つたのです。(彼は愉快さうに微笑した。)私は、伯爵夫人と、あなたに、是非お茶を召し上がり……晩餐にお出で下さるやうお願いしたいのですが。」

伯爵夫人エレノア・ワシーリイウナだけは、ベルグのやうな人々と交際するのは、自分を卑しくする事だと考へ無情にもその招待を断ることが出来た。が、ベルグは、何故自分が少數の選り抜いた客ばかりを集めたいのか、何故さうすることが自分にとつて楽しいのか、何故自分が骨牌とか、その他の悪い事に金を惜しんで、而かも善い人々と交際する爲めには十分費用をかけやうとしてゐるのか、と云ふ譯を瞭然りと説明したので、ビエールは到頭断はり得ずに、行くと約束して仕舞つた。

「伯爵、甚だ勝手なお願いですが、あまり遅くなりませんやうに。勝手なお願いですが、何うぞ八時十分前に。私共は仲間を拵らへませう。吾々の將軍もお見えになります。將軍は私に非常に親切にして呉れます。一緒に晚餐をしませう。何うか御賛成を願ひます。」

ビエールは何時も遅れる癖があるのに、その日は、八時十分前でなく、八時十五分前にベルグ家へ到着した。

ベルグ家の者は、晚餐會に必要な準備を萬端整へて、もう客を迎へるばかりになつてゐた。

ベルグとその細君とは、小さい半身像や、繪畫や、新しい家具などで飾つた、新しい、さつぱりした、明るい書齋に座つてゐた。ベルグは新しい制服を着、キチンと扣鈕をかけて、細君の傍に座つてゐた。そして、細君に向つて、人は何時でも自分より上の人々と交際することが出来、また交際しなければならぬ、何故といふに、上の人々と交際して、初めて交際には面白味があるのだからと説明してゐた。「お前は何物かを經驗してゐる。何物かについてお前は不審を抱かなければならない。先づつと低い位置にゐた時分からの私の遣り方を見るがよい。(ベルグは自分の生涯を年數で算へずに、昇級の數に依つて數へてゐた。)同僚は今、まだあの有様だ。が、私は聯隊長と云ふ得易からぬ位置に居る。私はお前の夫たる幸福を持つてゐる。(彼は起ち上がつてヴェーラの手に接吻したが、その序に、裏返つてゐる。

た數物の隅を直した。)而かも、私は何うして是等を得たのかと言へば、主として知己の撰らび方がよかつたからだ。勿論、正直で、几帳面でなければならぬといふ事は云ふまでもない。」

ベルグは、弱々しい女に對する自分自身の優越を意識して微笑した。が、この自分の愛らしい妻が、結局、男の價値——*ein Mann zu sein*——を構成してゐる總てもの知る事の出来ない弱々しい女であると思ふと黙つて了つた。ヴェーラも同時に、正直な人のいゝ夫より、自分の方が優れてゐるのだと思つて微笑した。彼女は、自分の夫も矢張り、あらゆる男子のやうに、誤つた人生觀を持つてゐるのだと思つてゐた。ベルグは、自分の細君から判断して、女といふものは凡て弱くて愚かなものであると考へてゐた。ヴェーラも、自分の夫のみから判断し、夫に對する自分の觀察から概括して、男といふものは凡て自分ばかりに理性があると思つてゐるが、その癖、何にも分らない、高慢で利己的なものであると推測してゐた。

ベルグは起ち上がつて、大金を拂つて買ったレースの肩掛を皺にしないやうに、用心深く妻を抱きながら、妻の唇の眞中に接吻した。

「たゞ此處に一ツ肝要な事がある、私達にあまり早く子供を持つては不可ない。」と、彼は自分でも氣付かなかつた考へを追ひながら言つた。

「さうですわ。」と、ヴェーラは答へた、「私もそれはちつとも望んでみせませんの。私たちは社交界に生きなければなりませんもの。」

「ユスボーワヤ公爵夫人も、恰度さういふのを掛けて被居つたつけ。」とベルグは、幸福さうな、人の好きさな微笑を浮かべて、例の肩掛を指さしながら言つた。

その途端に彼等は、ベズウホフ伯爵が着いたといふ報知を聞いた。二人の夫婦は、めい／＼この來訪の名譽を自分の所爲にし、満足の微笑を浮かべながら見交はした。

「知己の拵らへ方を知つてゐると此通りだ。」と、ベルグは思つた。「身持を慎んでゐると此通りだ！」

「けど、後生ですから、私が客を款待してゐる時には、」とヴェーラが言つた。「私の邪魔をしないで下さいまし。私はお客を何う款待していいかとか、何んなお客には何ういふ話をしていいかとか、よく存じて居りますから。」

ベルグは矢張り微笑んでゐた。

「だがね、何うかすると、男は男の談話をしなければならぬことがあるからね。」と、彼は言つた。

ヴェールは新しい客室へ案内された。その客室では、均齊や、整齊や、秩序を破らずには何うしても座れなかつた。従つて、ベルグが、上客の爲めに、大膽にも、安樂椅子なり長椅子なりの均齊を破るやうにと言ひ出すのは當然なことだ、何の不思議もないことである。が、彼は之を言ひ出すのに妙に躊躇するらしく、そして遂々、この問題の解決を客の選擇に任せて了つた。で、ヴェールは、自分の方に椅子を引き寄せてその均齊を破つた。ベルグとヴェーラとは、お互ひに争つて款待しながら、早速晚餐を始めた。

ヴェーラは、ヴェールを款待するには、フランス大使館の談話をするが、いゝと心に思ひ定めたので、直ぐその話題に取りかゝつた。ベルグは男らしい談話をしなければならぬと定めて、アウストリアとの戦争問題に論及して妻の言葉を遮ぎり、一般的な話題から、何時とはなしに、彼をアウストリアの戦役に参加させやうとした提案や、彼が何故その提案を容れなかつたかと言ふ理由などに對する個人的な意見に反れて了つた。談話は如何にも聯絡のないものであり、ヴェーラは、男性的の要素が妨害することを腹立たしく思つたにも拘らず、又、客がたつた一人しか来てゐない

にも拘らず、二人の夫婦は、晚餐會が非常に都合好く始められたことゝ、晚餐會が丁度水の二滴のやうに他のあらゆる晚餐會と同じで、やはり同じ談話と茶と、點されたる數々の蠟燭とがあることを満足に思つた。

程なくパリスが來た。彼はベルグの昔からの友人であつたが、ベルグやヴェーラに對する時には、何となく二人を見下して、自分が保護者の位置にでもゐるやうな素振をしてゐた。パリスに續いて、聯隊長夫婦が來、それから將軍、それからラストフ家の人々が來た。そして晚餐會は、今や、正しく、總ての他の晚餐會のやうになつて來た。ベルグとヴェーラとは、客間の中のこの有様を見たり、聯絡のない話聲や衣擦れの音や、挨拶などを聞いたりと喜びの微笑を抑へることが出来なかつた。あらゆる事が、他の晚餐會の通りであつた。殊に將軍がさうであつた。將軍は彼等の部屋を褒め、ベルグの肩を叩き、親のやうな指揮權をもつて、ポストンをやる爲めの卓を整へた。將軍は客の中で自分に次ぐ知名の士として、イリヤ・アンドレーキツチ伯爵の傍に座つた。年寄り同士の、若い者は、若い者同志で一緒になつた、女主人は茶卓に就いてゐた。その卓の上には、銀の菓子入れの中に、パニン家の晚餐會に出た菓子と全く同じ菓子が入つてゐた。あらゆる物が、他の晚餐會で見るとすつかり同じであつた。

二十一

ヴェールは、最も大切な客の一人として、ポストンをやる爲めに、イリヤ・アンドレーキツチや、將軍や、聯隊長と一緒に座らなければならなかつた。ポストンの卓に座つた時、彼は偶然ナターシヤの眞向ふに座ることになつた。

そして彼は例の舞踏會の日以來、彼女の上に起つた不思議な變化に驚かされた。ナターシャは黙つてゐた。そして舞踏會の時ほど美しくなかつたのみならず、若し彼女に、何事に對しても優しい無頓着の様子がなかつたら、彼女は、醜くかつたかも知れなかつた。

「ナターシャは何うしたんだらう？」と、ビエールは彼女を見ながら考へた。彼女は茶卓チャイテーブルに向ひ、姉妹の傍に座つてゐた。彼女は自分の傍にゐたパリスを見もせず、彼に何やら返答してゐた。ビエールは一勝負済まし、五ツの勝牌勝ちふだを取つて、自分の組を満足させたが、自分が勝牌を集めてゐる時、振擲の聲と、誰かゞ室に這入つて来る足音とを聞きつけると、再びチラリと彼女を見た。

「ナターシャは、何うしたんだらう？」と、彼は一層訝かしさうに獨語つた。

アンドレー公爵は彼女の前に立ち、用心深い優しい表情を見せながら、彼女に何か言つてゐた。彼女は頭を掻げ、眞赤になつて、弾ヒツんで来る息を抑へやうと力めながら彼を見た。すると、前には消えてゐた或る内心の火の生々とした白熱が、再び彼女の中に燃えた。彼女は全く變つて仕舞つた。醜みにくい娘から、も一度舞踏會の時のやうな美しい娘にかへつた。

アンドレー公爵はビエールの所へ行つた。ビエールは、この友達の顔に、新しい若々しい表情を認めた。勝負中、ビエールは幾度となく席を變へて、或る時はナターシャに背中を向けて座り、或る時はナターシャに顔に向けて座つた。そして三番勝負を六回やる間始終彼女と友達とを觀察してゐた。

「何か極く重大な事が二人の間には起つてゐる。」と、ビエールは思つた。すると、喜びと悲しみと一緒になつた感情が彼を波立たせたり、悲しみのことを忘れさせたりした。

三番勝負を六回済ますと、將軍が之れでは勝負が出来ないと云ひながら、起ち上つたので、ビエールは自由になつた。ナターシャは部屋むらの一方の側で、ソニーヤやパリスと話してゐた。ヴェーラは軽く微笑を含みながら、アンドレー公爵に何か云つてゐた。ビエールは友達ともの所へ行つて、何か秘密な事を話してゐるのではないかと訊ねながら二人の傍に腰を下した。ヴェーラは、アンドレー公爵がナターシャに注意してゐることに気が付いたので、晩餐會では眞實の晩餐會に於ては、感情に對する微妙な暗示デリケートが是非必要だと感じた。彼女は、アンドレー公爵が一人である機會に乗じて、一般の感情に就いて、殊に妹のことに就いて彼と談話はなしを始めた。彼女は非常に智力の高い客きやくへ彼女はアンドレー公爵をさう思つてゐたに對しては自分の外交的手腕を悉く傾倒しなければならぬと感じたのであつた。

ビエールが二人の所へ行つた時、彼は、ヴェーラの方は満足さうに、そして面白さうに話してゐたが、アンドレー公爵の方は（彼には減多にない事であるが）何うやら怪々おぞましてゐるらしいのに気が付いた。

「あなたは何うお考へですか？」と、ヴェーラは軽く微笑しながら言つた。「公爵、あなたはお察みらしもよく被居おらるし、直ぐ人の性格も見抜いてお仕舞ひなさいますが、あのナターシャを何うお考へですか？あの娘は、自分の戀着を變へないやうな娘でせうか？他の女おんなたちのやうに、（ヴェーラは自分を指したのであつた。）一度男を愛したら、その男に何時までも信實を盡して行くことが出来る娘でせうか？私はさういふのを眞の戀愛だと考へてゐるのです！公爵、あなたは何うお考へですか？」

「私は、あなたのお妹さんをよく知つては居りませんから、」と、アンドレー公爵は皮肉な微笑を浮かべながら答へた。彼はその微笑に依つて、自分の心の亂を隠さうとしたのであつた。「さうしたデリケートな問題は何うも決める事が出来ません。それに私は、女はアットラクタイプで無ければ無いほど、益々道心堅固になる傾きがあると認めてゐるの

ですから。」と彼は附け加へて、その時丁度彼等の傍に近づいたビエールを見た。

「え、それはその通りで御座いますわ、公爵。此頃では、」とヴェーラは續けた。「彼女は、その時代の特徴を發見し評價したと想像したり、人間の特質はその時代と共に變はるものだと思像したりする、偏狭な人間が大抵思ひたがるやうに、此頃の事を想ひ出しながら、」此頃では、娘も非常な自由を持つてゐて、やい／＼云はれる嬉しさに、よく眞實の感情を心の中に押し隠して仕舞ひます。で、ナターリイも、さう云ふ事では随分動き易いのです。」話がまたナターリヤに歸つたので、アンドレー公爵は、また不愉快さうに眉を擡めた。彼は立ち上がらうとしたが、ヴェーラは尙一層輕やかな微笑を浮かべながら話し續けた。

「凡そあの娘位、人様に後を追はれる娘は御座いますまい。」と、ヴェーラは言つた。「けれども、つひ近頃まで、一人としてあの娘に大した印象を與へた者は御座いません。あなたは無論御存知ですが、」と彼女はビエールの方へ振り向く。「Entre nous、内々ですがね、やさしい感情の國へ、極く極く深入してゐたあの可愛い從兄のバリスでさへ……」彼女はその當時流行つてゐた戀の地圖に響へを引かうとしたのであつた。

アンドレー公爵は顔を擡めて黙つてゐた。

「ですけれど、無論あなたはバリスのお友達でいらつしやるのでせう？」ヴェーラはアンドレー公爵に言つた。

「え、あの人は知つて居ります……」

「多分、ナターリヤに對する自分の子供らしい戀の事を、あなたにお話したてせう？」

「は、あ、二人の間には子供らしい戀なんか有つたのですか？」と、アンドレー公爵は、思はず不意に顔を赤くして訊ねた。

「さうなんです。從兄妹同志の間では、よく親しい交際が戀になるものですからねえ。從兄妹同志は油斷のならぬ隣同士ですわ。ね、」

「成程、それはさうに違ひありません。」とアンドレー公爵は言つた、そして急に、故意とらしい快活さで、モスクワにゐる從姉たち——五十女に、用心する必要があるとビエールを戲弄ひ始めた、そしてさう戲弄ひながら、彼は立ち上がつてビエールの腕を取り、彼を側の方へ連れて行つた。

「ところで、何です？」とビエールは言つた、彼は今迄この友達の興奮を不思議さうに見守つてゐて、彼が立ち上がる時に、ナターリヤの方へ投げた一瞥を注意してゐた。

「僕は是非、僕は是非君に話さなければならん、」とアンドレー公爵は言つた。「君は女のあの手袋を知つてゐるだらう。」（彼は、愛する女に托せよと云つて、新しく遣入つた組合員に與へる共済組合の手袋のことを云つたのであつた。）「僕は……いや、何れまた後で話さう……」かう言つて、眼に怪しい光を見せ、そわ／＼しながら、アンドレー公爵はナターリヤに近寄つてその傍に座つた。ビエールは、アンドレー公爵が彼女に何か訊ねると、彼女が眞赤になつて彼に答へたのを見た。

併し、その途端に、ベルグがビエールに近寄つて、スペインの事態に關して將軍と大佐との間に起つた議論の仲間入りをするやうにと頼んだ。

ベルグは満足で、幸福であつた。嬉しさうな微笑は決してその顔を去らなかつた。夜會は大成功であつた。そして彼がこれまでに見た他の夜會と全く同じであつた。あらゆる物が全く同じであつた、貴婦人たちの上品な會話も、骨牌も、骨牌の後で聲をあげた將軍も、沸茶器も、茶菓子も、併し未だ一ツ足りない物があつた。それは彼が諸所の夜會

で、何時も見て、而も模倣したいと思つた所の物であつた、紳士達の間の何時もの聲高な談話と、何かしら眞面目な智識上の問題に關する議論が未だ缺けてゐた。その談話を將軍が始めたので、そこでベルグがビエールをその中に引張り込んだのであつた。

二十二

翌日、アンドレー公爵は、イリヤ・アンドレーキツチに招かれてたので、ラストフ家へ食事に行つた、そしてラストフ家の人々と終日を過した。

家中の人は誰でも、アンドレー公爵が誰の爲めに來たかといふ事を覺つてゐた、そして彼は大びらに、ナターシヤと終日一緒にゐやうとした。

怖けた、然しながら幸福な、熱心なナターシヤの心にはばかりでなく、家内ぢうにも、やはり恐怖の感情が、何かしら非常に重大な事が起るに違ひないと云ふ感情があつた。悲しさうな、そして嚴く眞面目な眼付で、伯爵夫人は、ナターシヤに話しかけてゐるアンドレー公爵を見てゐた、そしてアンドレー公爵が自分の方を振り向くや否や、おづ／＼と、強いて、何かしら埒もない話を始めやうとした。ソニーヤはナターシヤを置いて行くのが心配になつたり、自分が一緒にゐたら二人の邪魔になりはしないかと恐れたりした。ナターシヤは片時でも彼と一緒に獨り取り残された時には、何時も期待してゐた通り狼狽して蒼くなつた。アンドレー公爵のおづ／＼した様子がナターシヤに印象を與へ

た。彼女は公爵が自分に何か云ひたいのであるが、いよ／＼の所まで自分自身を持つて來る事が出來ないでゐるのを感じた。

晩にアンドレー公爵が歸つて仕舞つた時、伯爵夫人はナターシヤの所へ行つてから囁いた。

「何う？」

「お母様、後生ですから、今は何にも訊かないで頂戴。何うと云つて話しやうがない事ですもの、」と、ナターシヤが云つた。

併し、かう答へたに拘らず、ナターシヤはちつと前の方を見詰めたまゝ、交る／＼興奮したり、怖けたりして、その晩は長いこと母親の床の中に横たはつてゐた。彼女は母親に、彼が自分を褒めたこと、外國へ行くつもりだと云つたこと、ラストフ家の人々は何處で此の夏を送るつもりかと訊ねたこと、それからバリーヌの事を自分に訊ねたと云ふやうな事を話した。

「けど、こんな、こんな事は……私、前には一度も感じたことがないわ！」と、彼女は言つた。「私、あの人とゐると只恐いの、あの人とゐると始終恐いわ。一體どうしたといふんでせう？ほんとの事だからと云ふんでせうか？お母様眠つたの？」

「いゝえ、お前、私もあの方は恐いよ。」と、母親は答へた。「さ、お寝み。」

「私どうしても眠つちや不可いわ。眠るなんてほんとに馬鹿らしい事ですもの！お母様、お母様、私ね、今まで一度もこんな心持がしたことは無いわ、」と、彼女は自分の中に認めた感情を驚き恐れて言つた。「夢にだつて見やあしなかつたわ！……」

ナターシャには、自分がアンドレー公爵と戀に陥つたのは、オットラドノエで始めて彼を見た時のやうに思はれた。彼女は、その時にすら選んでゐた人、(彼女は固く自分はさうしたと信じてゐた。)——その同じ人が、今また自分達にめぐり合つて、明かに自分に對しては無關心でないと云ふ、この不思議な、意外な幸福に恐れてゐるものゝやうであつた。

「それに、いろ／＼の事がまるで捲え事のやうですわ——私達が此處にある間に丁度あの人^{あの人}がベテルブルグへやつて来るなんて。それから、あの舞踏會で一緒になるなんて。みんな運命だわ。確かに運命だわ、運命が何も彼も此處まで導いて來たのだわ。あの時でさへ、私はあの方を見ると、直ぐ何だかまるで異つた氣持がしたんですもの。」

「あの方はお前に何を言つたの？あ^あの詩は何んな詩だつたの？讀んで御覽……」と、かう母親は考へ込みながら、アンドレー公爵がナターシャのアルバムに書いた詩の事を指して言つた。

「お母様、あの人の^{お母様}夫といふことが、何か都合の悪いことでもあるんですか？」

「これ、ナターシャ。神様にお祈禱をなさよ。Les mariages se font dans les cieux ! (結婚は天國で極められるものです。)」と、母親は、フランスの俚諺を引いて言つた。

「お母様、ねえ、私あなたが大好きよ！私は何んて幸福なんでせう！」と、ナターシャは興奮と幸福の涙を流しながら母親に抱き付いて叫んだ。

その時丁度アンドレー公爵は、ナターシャに對する自分の愛と、ナターシャと結婚しやうといふ自分の決心を、ビエールに話してゐる所であつた。

* * * * *

その晩、伯爵夫人エレーナ・ワシリーエウナは夜會を催した、その夜會には、フランスの大使もゐた、近頃伯爵夫人の所へ度々訪ねて來るやうになつた或る皇族もゐた、多くの紳士淑女が集まつてゐた。ビエールも其處へ下りて來て幾つもの部屋をさまよひながら、思ひ詰めた偏執と陰鬱な^{かたつき}顔容をあらゆる客に印象させた。

ビエールは、例の舞踏會の日から此方へ、引續いて神經的な憂鬱症に襲はれてゐることを感じてゐたので、それと關ふ爲めに激しい努力をしてゐるのであつた。自分の妻と皇族とが密事をするやうになつてから、ビエールは意外にも侍從に任命されたので、それからといふもの宮中に出ては斷へず退屈と耻辱の感覺とを味はつて來たのであつた、そして人生の凡ゆる事が空虚であるといふ昔の考へが、ますます繁く返つて來始めたのである。彼が近頃、自分の被保護者のナターシャとアンドレー公爵との間に認めた感情が、自分自身の位置とこの友達^{友達}の位置との間の對照に依つて、益彼の憂鬱を増したのであつた。彼は妻のことも、またナターシャとアンドレー公爵とのことも、同様に考へる事を避けやうとした。再びあらゆる物が、永遠といふ物に比べると彼には無意義に見えて來た、再び「何の爲めに？」といふ問題が彼の前に浮び上がつて來た。そして晝となく夜となく幾日も引續いて、彼はその惡靈を追ひ拂はうと思つて、共済組合の事業に強いて身を委ねた。ビエールは眞夜中に伯爵夫人の部屋から出て來て、みすばらしい寢巻を着たまゝで、天井の低い、煙で煤けた二階の部屋の卓子に向つて、スコットランドの共済組合員の長い通信を寫してゐた、その時この部屋へ這入つて來た者があつた。それはアンドレー公爵であつた。

「やア、あなた？」と、ビエールは、考へに氣を取られた、不満らしい様子で言つた。「今仕事最中です」と、彼は不幸な人達が自分の仕事を見る時にする、人生の不幸から遁れたいやうな顔容をして、その寫しの本を指さし乍ら言ひ添へた。アンドレー公爵は、新しい生命に満ちた、晴々しい、歡喜に充ちた顔容をしてビエールの前に立つた、そして幸福

で、他を顧みないといふ風で、ビエールの陰鬱な顔には氣も付かずにビエールに向つて微笑んだ。

「ねえ、君」と、彼は言った。「僕は昨日話さうと思つたんだ。で、今日はその爲めにやつて来たんです。僕はこれまで這麼氣持になつた事は一度もないよ。僕は戀をしてゐるんだ。」

ビエールは突然深い嘆息を吐いた、そしてアンドレー公爵の傍の、長椅子の上にどつかりと重い體軀を下ろした。

「ナターシャ・ラストフに、ねえ？」と彼は言った。

「さうだ、さうだ、他の者となんか出来つこないぢやないか。僕は決して信じないのだが、僕にとつてはあまりに強過ぎる感情だものだからね。昨日僕は随分苦しんだ、苦痛だつた、だが、この世の何物とも、僕はこの苦痛と換へやうとは思はないね。僕はこれまでほんとに生きたことはなかつたのだ、併しあの女としては僕は生きて行かれない。

だがあの女は僕を愛してゐるだらうか？……何故君は黙つてゐるんだ？……」

「僕？僕は何を云ひましたつけね？」と、言て、ビエールは急に起ち上がつて部屋を歩き出した。「僕は何時もさう思つてゐたのだが……あの女は實だ……あの女は實際珍らしい娘だ……ねえ、君、頼むが、拙巧過ぎてはいませんよ、疑つては不可ません、結婚なさい、結婚なさい、結婚なさい……さうすれば確かにあなたより幸福な人は誰もいないことになりませぬ。」

「だがあの女は？」

「彼女があなたを愛してゐます。」

「馬鹿なことを……」と、アンドレー公爵は微笑みながらビエールの顔を見て言つた。

「あなたを愛してゐます、僕は知つてゐる、」と、ビエールは腹立たしげに叫んだ。

「いや、聽いてくれ給へ。」と、アンドレー公爵はビエールの腕を捉へて、彼を引き止めながら言つた。「君は僕がどんな状態にゐるかを知つてゐるかね？僕はどうしても誰かにそれを話さなければ居られないんだ。」

「え、え、では、どん／＼お話しなさい、僕は大いに喜んで伺ひますよ、」と、ビエールは言つた、と、その顔は實際變つて、顔に寄せた心配さうな皺も消え、喜んでアンドレー公爵の言ふ事に耳を傾けた。彼の友達は全く別な新しい人のやうに見えた、また實際さうであつた。彼の倦怠、人生に對する彼の蔑視、彼の幻滅は何うなつたのであらう？彼が遠慮なく打明け話をする氣になれるのは、ビエールがたゞ一人だけであつた。で、彼はビエールに對しては、心にある事をみんな打明けた。彼は速かに大膽に、遠く將來に涉る様々の計畫を立てた、自分の幸福を父親の氣紛れの爲めに犠牲にする事は出来ないと言つた、無理にも父親を結婚に同意させて、彼女を好くやうにするか、さもなければ全然父親の承諾は受けない事にすると斷言した、それから自分を囚へてゐる感情を、何かしら不思議な、自分自身とは離れた、獨立したものとして驚いてゐた。

「誰か、お前はかふ云ふ風に戀をする事が出来るのだと言つたにしても、恐らく僕はそれを信じなかつたらうと思ふね、」と、アンドレー公爵は言つた。「僕が嘗つて経験した感情とは全然異つてゐるものね。僕にとつては全世界は二つの部分に分かれてゐるんだ。一つは……彼女で、其處では總てが幸福と、希望と、光なんだ。他の半分——それは彼女のゐない世界で、其處では總てが失意と、暗黒なんだ……」

「暗黒と陰鬱」と、ビエールが繰り返した。「さうです、さうです、それは僕にも解る。」

「僕は光を愛さずにはゐられない、それは僕の咎ぢやない、で、僕は非常に幸福なんだ。君は僕を理解して呉れるかね？僕は君が僕の爲めに喜んで呉れてゐると言ふ事を知つてゐる。」

「理解出来ませぬ。理解出来ませぬ。」とビエールは、優しさと悲しさに満ちた眼で友達を見ながら同意した、彼の心の前にアンドレー公爵の運命の繪が華やかであらばある程、彼自身の運命の繪は益々暗く見えるのであった。

二十三

結婚するには父親の承諾が必要であつたので、アンドレー公爵はその承諾を得る爲めに父親に逢ひに出掛けた。父親は息子の話を、表面では平氣に、併し内心では怒つて受け取つた。彼にとっては生命もやがて終りに近づいてゐるのに、誰にしろ、何うして自分の生活を變へやうとし、その生活の中に新しい要素を導入せよとする氣になれるのか、彼にはそれが分らなかつた。「俺の思ふ通りに生涯を終らせて呉れたら、それからは彼奴等の勝手なんだが」と、老人は自分の心に言つた。併し息子に對しては、大切な場合には何時も彼が用ゐて來た所の例の外交手段を用ゐた。落ち着いた調子を裝つて、彼は公平に全問題に這入つて行つた。

第一に、この結婚は、門閥、財産、乃至名聲の見地から見ても、決して華々しい結婚ではなかつた。第二に、アンドレー公爵は最早う裏若い青年ではなく、身體も弱かつた、老人はこの點に殊に重きを置いた。そして娘は非常に若かつた。第三に、アンドレー公爵には息子があつた、それをほんの小娘に委せるといふ事は可哀相であつた。第四、即ち最後に、と、父親は息子を皮肉に見ながら言つた。「どうか、この事件は一年間延ばす事にしてくれんかね、外國へ行つて身體を善くするがよいよ、お前が望んでゐたやうにニコライ公爵の爲めにドイツ人を見付けるがよい。それから

若しお前の戀なり、お前の情慾なり、お前の執着なりが——何う呼ぶのもそれはお前の勝手だが——それ程強かつたら、その時には結婚するがよいよ。で、これがこの問題に對する私の最後の言葉だ。宜しいか、最後だぞ……。」と、

老公爵は何物も彼の決心を變へさせることは出來ないと言ふ事を示すやうな調子で結んだ。

アンドレー公爵は、老人が自分の感情乃至自分の婚約者が一年間の試験に堪えられないか、さもなければ、彼自身即ち老公爵自身がその間に死んで仕舞ふか、その何れかを望んでゐるといふ事を明かに見た、で、彼は父親の希望通りにしやうと決心した、即ち申込みだけして置いて、結婚は一年間延ばさうと決心した。

ラストフ家を最後に訪れた時から三週間経つて、アンドレー公爵はベテルブルグへ歸つた。

母親と話をした翌日、ナターシャはバルコンスキイを待ち受けて、終日を過したが、彼は來なかつた。その翌日もその次の日もやはり同じであつた。ビエールも遣つて來なかつた、で、ナターシャは、アンドレー公爵が父親に逢ひに行つたと云ふ事は知らなかつたので、彼の來ないのを何う解釋していいか分らなかつた。

かうして三週間は過ぎた。ナターシャは何處へも出掛けなかつた、そして家の中を、何もしないで、ぼんやりして影のやうに、さ迷つてゐた、夜は人知れず泣いた、晩には母親の所へも行かなかつた。彼女は絶えず上せてゐて、非常に怒りつづくなつてゐた。彼女にはあらゆる人が自分の失望を知つてゐて、自分を憐んでゐるやうに思はれた。内心の悲痛の激しかったに拘らず、虚榮心を傷けられたことが、彼女の不幸を一層大きくした。

彼女は或る日、伯爵夫人の所へ這入つて來て、何か言はうとしたが、不意に涙ぐんだ。その涙は何故罰せられるのかその譯を知らない怒つた子供の涙であつた。伯爵夫人はナターシャを慰めやうとした。最初は彼女も母親の言葉に

耳を傾けてゐたが、突然それを遮ぎつた——

「止して頂戴、お母様、私はあの方の事を考へてもゐなければ、また考へたくもありません！始終ゐらしつてゐたのに、もうゐらつしやらなくなつたんですもの、もうゐらしやらなくなつたんですもの……」彼女の聲は顫へてゐた、彼女は殆ど泣き出しさうであつた、が、氣を取り直して、静かにかう續けた——

「それに、私は結婚なんかちつともしたかありませんわ。私、あの方が恐いでんすもの。私、今では、そんな事、ほんとに、ほんとに何でもなくなつたわ……」

かういふ話をした翌日、ナターシヤは、朝それを着た時に何時もよくやつた遊戯と殊に聯想のある古い着物を着て、舞踏會以來止めてゐた以前の生活振りを早朝からまた遣り始めた。朝の茶を済ました後、彼女は高く反響するので殊に好きであつた大廣間へ這入つて行つて、ソル・ファの練習を唄ひ始めた。最初の練習を終つて仕舞つた時、彼女はやはり部屋の真中に突立つたまゝ、特に自分の氣に入つた單純な樂節を繰り返した。彼女は、高く響き渡つて、大きな部屋の空間を満たし、ヤがて静かに消えて行くこれ等の調べの快さを、それが、さながら新しいものであるかのやうに嬉しきをもつて聴いてゐた、そして不意に快活な氣持になつた。「何故あの事ばかりこんなに考へるんだらう、物事はこのまゝだつて面白いんだわ。」と、彼女は自分に向つて言つた、そして部屋をあちこちと歩き出したが、たゞ足を反響する寄木細工の上を下すのではなくて、一步毎に踵から爪先へと足を曲げ、へ彼女は殊に好きだつた新しい靴を穿いてゐた。そして自分の聲の響きを聞いたと同じ快味をもつて、規則正しい鐘の音と、爪先のキイ／＼いふ音に耳を澄ました。鏡の傍を横切りながら、彼女はそれをチラリと覗いた。「さう、あれが私だ！」かう、彼女の顔の表情が、自分自身の姿を見て云つてゐるやうに思はれた。「あゝ、やつぱり結構なんだわ。私はもう誰もいらぬわ。」

從僕が部屋の何かを掃除しに這入つて來やうとしたが、彼女は這入らせなかつた。そして從僕の後から扉を閉めてやはり部屋の周圍をさ迷つてゐた。彼女はその朝、自分自身を愛し、自分自身に有頂天になる、彼女の好きな氣分に歸つてゐたのであつた。「あのナターシヤは何といふ可愛い奴だらう！」と、彼女はまた自分自身の事を云ふのに、第三者として、一般の男性として言つた。

「美しくつて、聲も好し、若くもあり、誰の邪魔もしない、たゞ静かにしといてやるがよい。」併し、如何に静かにして置かれても、彼女はもう静かにしてゐる事は出来なかつた、そして彼女はそれを直ぐに感じた、

玄關で扉が開いて、誰か「お在宅かね？」と、訊いてゐた、そして足音が聞えた。ナターシヤは鏡に映つた自分の姿を見てゐたが、もう自分の姿は見えなかつた。彼女は玄關の物音を聞いたのである。自分の姿を見ると、顔は蒼白であつた。それは「あの人」であつた。彼女は開いた扉口の所で、あの人の聲を聞いたゞけであつたが、確かにそれと知つたのである。

ナターシヤは蒼白になつて、狼狽て客間へ飛び込んだ。

「お母様、バルコンスキイが來てよ、」と、彼女は言つた。「お母様、恐いわ、堪まらないわ！……私厭ですわ……苦しめられるのは！何うしたら宜いでせう？」

伯爵夫人がそれに答へる暇もないうちに、困つたやうな眞面目な顔をして、アンドレー公爵が客間へ入つて來た。ナターシヤを見るや否や彼の顔は喜びをもつて輝いた。彼は伯爵夫人の手と、ナターシヤの手に接吻して、長椅子の傍に腰を掛けた。

「随分暫らくお目にかゝりませんでした……」と、伯爵夫人は言ひ出したが、アンドレー公爵は、夫人がそれとな

く仄めかした質問に答へ、また、自分の言はねばならぬ事を如何にも急いでゐるといふ風で、夫人を遮ぎつた。
 「父に會ひに行つたものですから、此間中は御不沙汰いたしました。極く重大な事件で父と相談しなければならなかつたものですからね。私は昨夜歸つたばかりです。」と彼はナターシャをチラと見て言つた。「私はあなたにお話したい事があるのですが、奥様」と、彼はちよつと黙つてゐた後で言ひ添へた。

伯爵夫人は眼を落して深い溜息を吐いた。

「何なりと、どうぞ」と、彼女は口を切つた。

ナターシャは座を外さなければならぬと云ふ事は知つてゐたが、何うしてもさう出来なかつた、何か咽喉を締め付けてゐるやうに思はれた、で、禮儀を忘れて、アンドレー公爵を大きく見開いた眼で眞正面に見詰めた。

「直ぐに？……今かしら？……いえ、そんな筈はない！」と、彼女は考へてゐた。

アンドレー公爵は再びチラと彼女を見た、そして、その一瞥が彼女に彼女の間違つてゐなかつた事を確信させた。

さうだ、直ぐに、この瞬間に、彼女の運命は決せられるのだ。

「早く彼方へゐらつしやい、ナターシャ、今に呼びますからね」と、伯爵夫人が囁いた。

おどろした、嘆願するやうな眼で、ナターシャは、アンドレー公爵と母親とをチラリと見て出て行つた。

「奥様。私はあなたのお娘御をお貰ひ申したくつて参りましたのです」と、アンドレー公爵は言つた。

伯爵夫人の顔はカツと赤くなつたが、彼女は何にも言はなかつた。

「あなたのお申込みは……」と伯爵夫人は、落着き拂つて到頭切り出した。アンドレー公爵は伯爵夫人の顔を見て黙つて坐つてゐた。「あなたの申込みは……」(彼女はどぎまぎして躊躇つた)。「私どもにとつては如何にも喜しう

御座います、私はお受けいたします、私は嬉しう存じます。良人……多分……ですが、あの娘次第で御座いますから……」

「あなたの御承諾さへ受けますれば、あの方には私からお話し致しませう……御承諾下さいませうか？」と、アンドレー公爵が言つた。

「はい。」と、伯爵夫人は答へて、アンドレー公爵に手を差出した、そして嫌悪と優しさの入り混つた感情で、彼女はアンドレー公爵が自分の手に接吻しやうとして身を屈めた時、その唇を彼の額の上に押し付けた。彼女の願ひは、彼を息子のやうに愛したいといふのであつたが、彼女は、アンドレー公爵が自分とは全く異つた人間であり、自分は彼を恐れてゐるやうな氣がした。

「良人が承知する事は確かですが」と、伯爵夫人は言つた。「あなたのお父様は……」

「父に私の考へを話しました所が、結婚は一年後にしなければ不可いといふ特別の條件で承諾しましたのです。それもあなたにお話しする心算でした。」と、アンドレー公爵は言つた。

「成程、ナターシャは未だ極く若うは御座いますが——そんなに先きて御座いませんか？」

「何うも止むを得ません」と、アンドレー公爵は溜息を吐いて言つた。

「あれを此所へよこさせよう」と伯爵夫人は言つて部屋から出て行つた。

「主よ、吾等を憐れみ給へ！」と彼女は娘を探がしながら、絶えずから繰り返してゐた。

ソーニヤが、ナターシャは寢室にゐると彼女に知らせた。ナターシャは蒼い顔をして、乾いた眼をして、寢臺の上に座つてゐた、そして、聖像を見詰めたが、急がしく十字を切つて、何か口の中で呟いてゐた。母様を見ると彼女

は跳びあがつて、母親の方へ飛んで来た。

「まア、お母様……何うなの？」

「おいで、あの方の所へおいで。あの方はお前を貫ひに来たんだよ。」と、伯爵夫人は、冷やかに——さう、ナターシヤには思はれた——言つた……「さうだ……おいで……」と、母親は娘が驅け出して行つた時、深い溜息を洩らしながら、悲しさうに、咎めるやうに呟いた。

ナターシヤは、何うして客室へ行き着いたのか分らなかつた。扉口を入つて彼の姿が目に入ると、彼女はビツタリと立止まつた。「この他人が、今私にとつて有らゆる物になるのかしら？」と、彼女は自分自身に向つて訊いた、そして直ぐ答へた。「さう、有らゆる物だわ。今はもうこの人だけが、世界中の有らゆる物よりも、私には親しい人だわ。」

アンドレー公爵は伏目になつてナターシヤに近寄つた。

「私は、初めてお目にかゝつたその瞬間から、あなたを戀して居りました。望みをかなへて下さいませうか？」

彼はナターシヤをチラと見た、そして眞面目な、感激に充ちたその顔容に驚かされた。その顔はかう言つてゐるやうに思はれた——「何故お訊ねなさるの？何故あなたが知つてゐらつしやるに違ひない事をお疑ひなさるの？感じてゐる事がどんな言葉にも言ひ表はせないやうな時に、何故お話しなさるの？」

彼女はだん／＼近く彼の方へ近寄つて来て立止つた。彼はその手を取つて接吻した。

「あなたは私を愛してゐますか？」

「えゝ、えゝ。」ナターシヤは、殆ど怒つてゐるやうにかう言つた。彼女は深い溜息を吐いた、も一つ吐いた、呼吸がだん／＼忙しくなつて来て、突然啜泣きを始めた。

「何です？何うかしましたか？」

「あゝ、私はほんとに幸福ですわ。」と、彼女は涙の中から微笑みながら答へた。彼女はアンドレー公爵に一層近く身を屈めて、かういふ事が有り得る事かと怪しむやうに一寸考へたが、やがて彼に接吻した。

アンドレー公爵は彼女の両手を把つて、その眼を見たが、自分の心の中には、彼女に對する之れまでの戀の痕跡（あと）も見出す事が出来なかつた。何かしら急な反動が彼の心の中には起つてゐたやうに思はれた、そこには欲望の詩的な神秘的快さは少しも残つてゐなかつた、その代りに、ナターシヤの女性的な、子供らしい弱さに對する憐れみと、ナターシヤの歸依と信實とに對する恐れと、永遠に自分をナターシヤに結び付ける退屈な、而かも甘い義務の觀念とがあつた。かういふ實際的感情は、以前の感情ほど楽しい詩的なものではないが、併し一層眞面目な、一層深酷なものであつた。

「あれは一年経たなければ出来なといふ事をお母様から聞きましたか？」と、アンドレー公爵は、やはりナターシヤの眼を見詰めながら言つた。

「これが私知らず（みんなが何時も呼んでゐるやうな、）ねんねえ娘の私知らず？」と、ナターシヤは考へてゐた。「私はほんとに、このたつた今から、お父様でさへ尊敬して居らつしやるこの未知の、美しい、學問のある人と對等の妻になるのかしら？ほんとに知らず（ほんとに、）もう人生を遊戯にしてゐることが出来ないのかしら？私は成人（おとな）になつたのか知らず？もう、あらゆる言葉、あらゆる行爲に對して、責任が私の上に置かれるやうになつたのか知らず？あら、私は何を訊かれたんだつて？」

「いゝえ。」と、彼女は答へたが、アンドレー公爵の問が解らなかつたのであつた。

「宥して下さい、」とアンドレー公爵は言った。「だが、あなたはまだほんとに若い。ところが私は人生の経験をどつき
り持つてゐる。私はあなたの爲めに恐はれてゐます。あなたは未だ自分自身を知つてゐない。」

ナターシャは、その言葉の意味を捉へやうとして注意を集めて聴いてゐたが分らなかつた。
「私の幸福を延ばすその一年は、私にとつては辛いでせうが、」と、アンドレー公爵は續けて、「それまでには、あなた
も屹度自分自身がお分りでせう。どうぞ一年経つた時私を幸福にして下さい、併しあなたは自由です。で、我々の婚
約は秘密にして置きませう。そして若しあなたが私を戀してゐないとお氣付きになつたら、或はまたあなたが誰かを
愛するやうになつたら……」と、アンドレー公爵は無理に微笑しながら言つた。

「何故そんな事を仰有るの？」と、ナターシャは遮ぎつた。「オトラドノエへ初めてゐらつしたその日から、私はあ
なたを愛して愛してゐたぢやありませんか。」と彼女は、自分はほんとの事を言つてゐるのだと固く信じて言つた。

「一年経つうちには、あなたも自分自身が分るやうになりませう……」

「まる／＼一年なの！」とナターシャは突然叫んだ。今始めて、結婚が一年延ばされねばならぬと云ふ事が解かつた
のである。「だけど、何故一年なの？……何故一年なの？……」

アンドレー公爵は延期の理由をナターシャに説明し出した。ナターシャは彼の言ふ事を聞いてゐなかつた。

「では何うにもならないんでせうか？」と、彼女は訊ねた。アンドレー公爵は何とも答へなかつたが、彼の顔はこの
決心を變へる事の不可能を語つてゐた。

「まあ、それはあんまりだわ！あんまりだわ、あんまりだわ！」とナターシャは突然叫んだ、そして再び^{ナ、リ、セ}歇鬱^{セ、リ、セ}き始め
た。「一年待つうちには私は、死ぬかも知れないわ。駄目よ、あんまりだわ。」彼女は戀人の顔をチラリと見た、そして

その顔に同情の苦痛と當惑の色を見た。

「いゝえ、いゝえ、私は何でもしませんが。」と、彼女は不意に涙を止めて言つた。「私はほんとに幸福ですわ！」

ナターシャの両親が部屋へ這入つて来て、^{ウ、リ、セ、フ、ク}婚約の二人に祝福を與へた。その日からアンドレー公爵は、ナターシャ
の^{ウ、リ、セ、フ、ク}婚約の戀人として、ラストフ家へ訪ねて来るやうになつた。

二十四

バルコンスキイとナターシャの婚約には、形式ばつた婚約の儀式もなければ、また披露もなかつた、アンドレー公
爵がそれを主張したのであつた。彼は結婚を延期した責任は自分にあるのだから、その重荷全體は自分が負はねばな
らぬと言つた。彼は、自分は何處までも自分の言葉を守らなければならないが、決してナターシャは縛りたくない、
ナターシャには全くの自由を残して置きたいと言つた。若し六ヶ月のうちに、ナターシャが彼を愛してゐないと感じ
たら、ナターシャには彼を斷る充分な権利があるといふのであつた。言ふまでもなく、ナターシャも、ナターシャ
の両親も、かうした可能を聞かうとはしなかつた、併しアンドレー公爵は自分の意見通りにしやうと主張した。アン
ドレー公爵は毎日のやうにラストフ家へ遣つて来たが、ナターシャに對しては、決して彼がナターシャと婚約してゐ
るやうには振舞はなかつた、彼は禮儀正しくナターシャに話しかけて、たゞナターシャの手にだけ接吻した。結婚を
申込んだその日から、アンドレー公爵とナターシャとの關係は、以前彼等の間にあつた關係とは全く違つたものとな

つた、二人の關係は單純でそして親しかつた。彼等はその時までお互に知り合つてはゐないものゝやうであつた。二人とも、二人が未だ何でもなかつた時分に、お互に何ういふ風に考へ合つてゐたか、それを憶ひ出すのが好きであつた。今では二人とも以前とは全然異つた人間であると感じた——以前は氣取つてゐたが、今では率直で眞實であつた。最初家族の者は、アンドレー公爵に對して窮屈な感じを懷いてゐた。彼は別の世界から來た者のやうに見えた、で、ナターシャは長い間家の者にアンドレー公爵を理解させやうと骨を折つてゐた、そして、彼がたゞ非常に異つてゐるやうに見えるだけであることや、ほんとうは誰とも同じであるといふことや、自分は彼を恐れてはゐないし、また誰も恐れることはないといふやうな事を、得意になつて誰にも話した。二三日経つと、家族の他の人達も彼を見慣れて、平氣で何時もの生活を續けて行つた、彼もその生活の仲間入りをした。彼は、伯爵に對しては領地の監督法を伯爵夫人とナターシャに對しては着物のことを、ソーニヤに對してはアルバムと刺繡のことを、といふ風にそれ／＼話し方を知つてゐた。時々ラストフ家の人々は互に、またアンドレー公爵のゐる前で、いろ／＼の事が起つた道筋や明かに今のやうになる可き前兆であつたやうな出來事に對する自分等の驚きを表白した、即ち、アンドレー公爵がオトラドノエに來たことや、自分等がベテルブルグへ來たことや、ナターシャとアンドレー公爵が似てゐることや——それはアンドレー公爵が初めて訪ねて來た時、年老つた乳母が氣付いたのであつた——それから一八〇五年にアンドレーとニコライとが出會つたことや、その他いろ／＼の今のやうになる前兆であつたさまざまの出來事が、家族の人々によつて語られた。

家は、婚約者同志の居る所に何時も伴ふところの例の倦怠と沈黙の詩的な雰囲気充たされてゐた。みんなが一緒に坐つてゐる時、誰も喋らないやうな事がよくあつた。時とすると、他の者はみんな起ち上がつて行つて仕舞つて、

婚約した二人だけが後に取残された時、二人はやはり啞のやうに黙つてゐた。二人は減多に自分達の將來の生活に就いては語り合はなかつた。アンドレー公爵はそれを話すのが怖ろしくて、耻かしかつた。ナターシャはアンドレー公爵の總ての感情——彼女はそれを必らず見抜いた——に對してするやうにこの感情をも共にしたのであつた。或る時ナターシャはアンドレー公爵にその息子の事を訊き始めた。

アンドレー公爵は赤くなつた——それはその時分の彼にはよくあつた事で、ナターシャはそれを見るのが殊に好きであつた——そして息子は自分達とは一緒にゐるやうにならないだらうと言つた。

「何故一緒にゐないの？」と、ナターシャは喫驚して言つた。

「彼の祖父から彼を取ることが、出來ないんです、……それに、」

「私、何んなに可愛いがつて上げるでせう！」と、ナターシャは直ぐ彼の考へを見透して言つた。「けど、あなたは私達が批難される原因になることを、何でも避けたがつてゐらつしやるんだわねえ。」

老伯爵は時々アンドレー公爵の所へ來て、彼に接吻し、ベエチャの教育や、ニコライの地位に關する何かの問題に就いて彼の忠告を乞ふた。老伯爵夫人は二人を見て溜息を吐いた。ソーニヤは斷えず二人の邪魔になることを恐れた、そして二人が、二人限りになりたいと少しも願はないやうな時でさへ、彼女は二人を二人限りで置く爲めの口實を、何時も見出さうと力めてゐた。アンドレー公爵が話をする時には——彼はいろ／＼の事を非常に巧く話した——ナターシャは得意で聽いてゐた。ナターシャが話をする時には、アンドレー公爵は熱心な穿鑿するやうな眼容で彼女を見守つてゐるのに、ナターシャは氣が付いて嬉しくもあり恐くもあつた。彼女はどぎまぎしながら自分自身から訊ねた。「私からこの人が搜してゐるものは何かしら？ あんな眼容でこの人の探つてゐるのは何かしら？ あんな眼容で搜

してゐるものが、若し私になかつたとしたら何うだらう？」

時々ナターシャは、彼女の持前の狂氣染みた快活な氣分に陥つた、そしてアンドレー公爵の笑ひを見たり聞いたりするのが取り分け好きだつた。彼は滅多には笑はなかつたが、笑ふ時には、その歡興に全く身を投げ出して仕舞つた、すると彼女は何時もその笑ひに依つてずつと近く彼に引き寄せられるやうに感じた。だん／＼近づいて来る目の前の別れといふ考へが若し彼女をおびやかさなかつたら、ナターシャは全く幸福であつただらう。アンドレー公爵もやはりそれを考へたゞけて、青くなつたり寒くなつたりした。

ペテルブルグを去らなければならぬといふその前日、アンドレー公爵は、舞踏會の日以來、一度もラストフ家へ來なかつたビエールを連れて來た。ビエールはぼんやりして、當惑してゐるやうに見えた。彼は主に伯爵夫人に話をした。ナターシャはソーニヤと將棋盤に向つてゐた、そしてアンドレー公爵を招いて仲間に加はれと言つた。彼は二人の所へ行つた。

「あなたは、ずつと以前からベズウホフを御存知なんでせうねえ？」と、彼は訊ねた。「彼の人が好きですか？」

「え、非常にいゝ人ですわ。けど調子外れな人よ。」

そこで彼女は、ビエールの話が出ると、何時もみんながやるやうに、彼の放心の逸話を話し出した、その逸話は實は造り話であつた。

「ねえ、私はあの男に我々の秘密を打明けましたよ、」と、アンドレー公爵は言つた。「私はあの男を子供の時から知つてゐるんです。あの男は黄金のやうな心を持つてゐます。どうぞ、ねえ、ナターシャ」と、彼は突然眞面目になつて言つた。「私はもう直ぐ旅に出やうと思つてゐます。で、この先どんな事になるか分りません、或はあなたは變るかも知れ

ません……いや、それを言つては不可いのでしたつけ。併したゞ一つ——若し私の留守に、あなたに事が起つたら

……。」

「何が起るんでせう？」

「若し何か困ることが出來たら、」と、アンドレー公爵は言葉を續けて、「どうかねえ、マドモアゼル・ソフイー。若し何か事が起りさうだつたら、あの男の所へ行つて下さい、助言や助けを籍りる爲めに決して外の人へ行つてはいけませんよ。あの男は如何にもぼんやりした偏人ですが、極く誠實な心を持つてゐる男です。」

父親も、母親も、ソーニヤも、アンドレー公爵も、この別れがナターシャに與へる結果を豫知する事は出來なかつた。彼女は眼の前に差迫つたことをまるで知らないものゝやうに、極く詰らないいろ／＼の事柄にあくせくして、赤くなつて、興奮して、涙も浮べずに、終日家の中を遣つてゐた。アンドレー公爵が最後に彼女の手に接吻したその瞬間にさへ、彼女は決して泣かなかつた。

「行かないで下さい！」これが彼女の言つた總てであつた。その聲はアンドレー公爵をして、實際行かずにゐては不可いのかどうか疑はせるやうな聲であつた、彼はその聲を長い後までも覚えてゐた。アンドレー公爵が行つて仕舞つても、彼女はやはり泣かなかつた、が、五六日の間、泣かずに、併し何事にも興味を持たずに、彼女は自分の部屋に坐つて、たゞ時々かう言つてゐた——「あ、何故行つたんだらう？」併し、彼が發つてから二週間目に、彼女は氣病ひの状態から回復して、周囲の人々を一樣に驚かした。そしてたゞ精神の相に、長く患つた後の子供の顔に見られるやうな變化を來したゞけて、再び元の自分になつたのであつた。

二十五

ニコライ・アンドレーキッチ・バルコンスキイ公爵の健康と性格は、息子が去つてから、その年の間に、がっかり弱くなつた。彼は前よりは一層腹立ちつぽくなつて、その理由のない憤怒の爆發の襲撃に何時も堪えるのは、公爵令嬢マリヤであつた。彼は出来るだけ残酷な傷を公爵令嬢に蒙らせやうとして、公爵令嬢の意識の中で感じ易いあらゆる點を一生懸命に探し求めやうとしてゐるらしかつた。公爵令嬢マリヤは二つの熱情を持つてゐた、従つて二つの悦びを持つてゐた、それは甥のニコリユーシカと宗教であつた、そして二つとも老公爵の攻撃と嘲弄の好い主題であつた。どんな話の時でも、老公爵は決まつてその談話を、老嬢達の迷信とか乃至は子供達を可愛がり甘やかす事とかに持つて行つた。「お前は彼(ニコリユーシカ)を恰度お前のやうな老嬢にしたがつてゐる。だが、アンドレー公爵は息子が欲しいので、決して老嬢を欲しがつてはゐないのだ。」と、彼は何時も言ふのであつた。でなくば、公爵令嬢マリヤの居る前でブリアンヌ嬢に話しかけて、ブリアンヌ嬢に此の村の僧侶や聖畫が好きか何うかと訊ねて、それ等の物を嘲弄するのであつた……。

彼は絶えず公爵令嬢マリヤの感情を傷けてゐたが、娘は父を宥すのに何等の努力も要さなかつた。父が自分に向つてどんな事をした所で、父を批難すべきであらうか？ 何んな事をした所で、やはり自分を愛してゐるといふ事が分つてゐる父が不公平であり得やうか？ それに公平とは實際何であらう？ 公爵令嬢マリヤは「公平」といふ此の誇らしい言葉を決して考へてもみなかつた。彼女にとつては、人類のあらゆる複雑な法則は、たゞ一つの明瞭な、簡単な法則に總括されてゐた、即ち彼自身が神でありながら、その愛をもつて人類の爲めに苦しんだ「人」に依つて定められた愛と犠牲の法則に總括されてゐた。他人の公平不公平に彼女が何の交渉があらう？ 彼女の爲すべき事は、愛する事と、苦しむ事、たゞそれだけであつた、そして彼女はそれを爲したのであつた。

その冬、アンドレー公爵はルイシーヤ・ゴオリイに來た。彼は、公爵令嬢マリヤがこの何年か嘗て見た事がなかつた程、快活で、溫和しくて、愛情深かつた。公爵令嬢マリヤは彼の身に何か起つたに違ひないと感じたが、彼は自分の戀に就いては妹に何にも言はなかつた。出發前に、アンドレー公爵は父親と長いこと話した。そして公爵令嬢マリヤは、二人がお互に氣を悪くして別れたことに氣付いたのであつた。

アンドレー公爵が去つてしまつた直ぐ後で、公爵令嬢マリヤは、ベテルブルグの自分の友達ジュリイ・カラীগナにルイシーヤ・ゴオリイから手紙を送つた、公爵令嬢マリヤは——娘たちが何時も夢みるやうに——この女が兄と結婚する女だと夢みてゐた。この女はその時丁度、トルコで殺された兄の喪に服してゐた。

「悲哀がお互ひの運命のやうに思はれます、私の愛するやさしき友のジュリイよ。」

「あなたの御不幸は非常に恐ろしいもので、私はたゞそれを、あなた方を愛するが爲めに、あなたやあなたのまたとない母上様を鍛へて下さる神様の御恵みの特別の徴として、自分に解決することが出来るだけです。」

「あゝ、あなた、宗教が、そしてたゞ宗教だけが——私達を慰めるものとは申しません——私達を絶望から救つて呉れることが出来るのです。たゞ宗教だけが、その助けがなくなつては、人が悟ることの出来ない事柄を私達に説き明か

して呉れることが出来るのです、どんな目的で、またどんな理由から、他人を傷けずに此の世に於いて幸福を求め得るやうな、そして他人の幸福にも無くてはならないやうな、善良な、高尚な人々が神の御許に喚び寄せられて、他人を害し、自分自身にも、また他人にも重荷になるやうな悪い役に立たない人々が、生かして置かれるのか、これは只宗教だけが私達に説き明かして呉れることが出来るのです。私が見た、そして私がどうしても忘れることの出来ない——私の懐かしい小さい嫂の死——が、私に恰度同じ印象を與へて呉れました。恰度あなたが運命を疑つて、何時あなたの氣高いお兄様が死なねばならなかつたかといふ事をお訊ねなさるやうに私もどういふ理由で、あの天使のやうなりすが——誰にも少しの害を與へたこともない、親切でない事は心に思つたことすらもないあのリザが、死んだのかと疑つたのでした。でも——ねえ、あなた——それからもう五年経ちました、そして智恵のない私でさへ、何故嫂が死なねばならぬ必要があつたか、何ういふ風にその死が創造主の無限の恵みの表現に外ならなかつたかといふ事が今となつて瞭然と分り始めました、神様のお仕業は、大部分私達には分りませんけれど、それでもそれは凡て神様が御自分でお造りになつたものに對する無限の愛の表彰に外ならないのですからね。私はよく考へる事がありますが、嫂は母親の義務をすつかり仕遂げる力を持つには、天使のやうに餘りに無邪氣過ぎはしなかつたかしらと、若い人妻としては、それは批難すべき所はなかつたんですけれど、お母様としてはさうは行かなかつたらうと思はれますの。ですから、嫂は私達、取り分けアンドレー公爵にそれは純ないろくの思ひ出や悲しみを残して行つたばかりではなく、なほ又あの世では私などにはとても望む事の出来ないやうな位置を屹度貫つてゐるのでせう。併し、嫂の方ばかりではありません、その天い恐ろしい死は、私達には非常に悲しい事でしたけれど、それにも拘らず、私や兄にそれは——幸福な影響を與へて呉れました。私達に不幸の來たその時、その瞬間には、私はかういふいろくの考へ

を何うしても心に懐く事が出来ませんでした、あの時には、かういふ考へも、私は恐ろしさに拂ひ退けて仕舞つたでせう、けれども、今ではその考へは明瞭して争ふことの出来ぬやうになつてゐるのです。私は、私の人生の主義となつた福音の眞理を、あなたに確信させたいばかりに、かういふ事を残らず書いたのです、神の御意でなければ、髪の毛一本だつて落ちは致しません。そして神の御意の教への道は、たゞ我々に對する神様の無限の愛です、ですからどんな事が私達の身に落ちて來やうとも、それはみんな私達の利益になる事なのです。

「次の冬はモスクワで送るかとお訊ねですが、あなたにお目にかゝりたいのは山々ですけれど、私はさう出来さうでもありませんし、またさうしたいとも思つては居りませんの。そして、それがボナバルトのお蔭だとお聞きになつたら、あなたは嘔吐驚なさるでせうね！その理由はかうなのです、父の健康は眼に立つ程弱りました。父は反駁に堪える事が出来なくなつて、直ぐに腹を立てるのです。此の痼疾は、御存知の通り、政治問題になると最早直ぐに起るのです。父はボナバルトが、ヨウロツバのあらゆる君主、殊に大カテリーナの御孫にあたる吾々の君主と、對等の地位に立つて交際してゐるといふ考へに堪える事が出来ないのです。御存知の通り、私は政治にはちつとも興味を持つて居りませんけれど、父や、それからミハイル・イワーノキツチと話す父の談話などから、私は今世間に起つてゐる事はすつかり知つて居りますし、ボナバルトに與へられたあらゆる名譽に就いても聞きました。恐らく今地球上でボナバルトが大人物として——フランスの皇帝としては尙のこと——認められない唯一の場所は、このルイシーヤ・ゴオルイだけだらうと思ひます。で、父は、かういふ事態を恕す事が出来ないのです。父がモスクワ行きを好まないやうに見えるのは、主に自分の政治上の見解のためと、誰に向つても遠慮なく、自由に自分の意見を表白する自分の習慣から、多分いろくの面倒が起るといふ事を見越してのためとによるのだらうと私には思はれますの。父はモスクワでの治

療から得た所のものを、そつくりボナバルトに關する避け難い議論の爲めに失つて仕舞ふだらうと思ひます。何れにしてもモスクワ行きの事は、直ぐに何とか決まるて御座いませう。

「私どもの家庭生活は、兄のアンドレーが留守だといふ事を除けると、やはり昔の通りに行はれて居ります。前の手紙で申しました通り、兄は近頃大層變りました。併し不幸の打撃から全く回復したやうに見えますのは、ほんの近頃今年になつてからの事なのです。兄は再び、私が知つてゐる子供の時のやうな、お人好しの、情愛深い、外の人には見た事がないやうな善い心を持つてゐる人になりました。兄は此頃、どうやら人生は自分にとつてまだ終りにならなうと感じてゐるやうに私には見えます。然し此の道徳上の變化と共に、肉體的には非常に弱くなりました。前よりはもつと瘦せて、もつと神経質になりました。私は兄の事が心配になつて堪まりませんの、ですから、ずつと前からお醫者達に勧められてゐた外國漫遊の途に今兄が上つてゐるといふ事が私には嬉しいのです。どうかそれで癒つて呉れ、ばいと思つて居りますわ。あなたからの御手紙に依ると、兄はベテルブルグで、最も有爲な、教育のある、智的な若者の一人だと噂されて居るんですつてね。どうぞ家族の者の自慢をお許し下さいまし——私もそれは決して疑ひませんでした。兄が此處であらゆる人——農夫から地方の貴族に至るまでの——にして遣つた善事は、とても數へ盡されません。兄はベテルブルグへ行つて、價值通りに迎へられたのです。私はいろ／＼の噂が、殊に何時ぞやのあなたの御手紙にあつたやうな、兄がラストフ家の小さい娘と婚約したらしいといふやうなあゝいふ理由のない噂が、どうしてベテルブルグからモスクワまで飛んで來るのか、それが不思議でなりません。私は兄が誰かと結婚するといふ様な事はどうしても想像出来ません、確かにあの娘なんぞではありませんわ。その課を申しませう。第一に、兄は極く稀にしか亡き妻の事は申しませんが、それを失つた悲しみは、その後添ひを買はうとか、吾々の小さい天使に繼

母を與へやうとか言ふには、あまりに深く兄の心に喰ひ込んでゐます。第二に、私の確め得る限りでは、その娘は兄のアンドレーを引き付ける事が出来るやうな種類の女の一人ではないからです。私はアンドレーがあの女を妻に選んだとはどうしても信じません、そしてあからさまに申しますと、私はそんな事を願ひませんわ。けど、私も随分書きましたわね、もう二枚目がお仕舞ひになりますわ、左様なら、私の懐しいお友達。何卒神様がその聖い偉いなる注意のもとにあなたをお護り下さいませう。私の愛する友、マドモアゼル・ブリアンヌがあなたに接吻を送ります。

マリイ

二十六

夏の最中^{まなか}に、公爵令嬢マリヤは、スウキツツルにゐたアンドレー公爵から手紙を受け取つて喫驚した。その手紙の中で彼は不思議な驚くべき報知を妹に語つた。彼はラストフ家の妹娘と婚約したといふ事を妹に知らせたのである。その手紙は始めから終りまで、婚約者^{いひなづけ}に對する戀々の情と、妹に對するやさしい信頼すべき情愛に充ちてゐた。彼は今度のやうに人を戀した事は、これまでに一度も無かつたと云ふことや、人生のあらゆる價值、あらゆる意味を見たのは今度が始めてだといふ様な事を書いた。彼はレイシーヤ・ゴオリイを最後に訪ねた時、自分の計畫に就いて父親には話したが、妹には一言も言はなかつた事に對して、どうぞ自分を許して呉れと妹に頼んだ。彼が妹に一言も言はなかつたのは、公爵令嬢マリヤが何うぞ承諾を與へて呉れるやうにと父親に頼んで、その目的を果たさずに父親を

立腹さして、自分自身で父親の不快の凡ての重荷を引受けはしないかと云ふ事を恐れたからであつた。併しその時には事件は未だ今のやうに完全に決まつてゐたのではなかつたと彼は妹に書いた。その時、父は、一年延ばすやうにと主張なすつた、そして、今はもう決められた時期の半分六ヶ月は過ぎた、で、私の決心は以前よりは益々固くなつてゐる。若し醫者が私を此處に、この水の邊りに引き留めて置くのでなかつたら、私はロシアに歸つてゐたに相違ない、がさういふ譯で、私は歸りをもう三ヶ月先きへ延ばさなければならぬのだ。お前は私を知つて居るし、私と父上との關係も知つてゐる。私は父上から何も要求はしない。私はこれまで獨立であつた、これからも始終獨立して行くだらうが父上の意志に反した行ひをするとか、恐らく我々と一緒に最早長くは居まいと思はれる時に當つて父上の怒りを招くとかいふ事は私の幸福の半分を破壊することになる。私は今父上にも手紙を上げるがどうぞ好い時を選んでこの手紙を渡して呉れるやう、そして父が此の事件全體を何う見てゐるか、三月だけ期間を早める事に同意して呉れる望みがあるかどうか、それを知らせて呉れるやうお願ひする。」

長いこと躊躇つたり、疑つたり、祈禱つたりした後で、公爵令嬢マリヤはその手紙を父親に渡した。次の日、公爵は彼女に向つて靜かにかう云つた。

「私の死ぬまで待つやうにと兄様に書いてやるがいゝ……さう長く待つやうな事もないだらう、直ぐに自由にしてやるから。」

公爵令嬢は何か返事をしやうとしたが、父親は口を開かせなかつた、そして、だん／＼大きな聲になつて後を續けた。「結婚するならしろ、結婚するならしろ、なあ……結構な御親類だ……利巧な人間だ、えゝ？金持だ、えゝ？うん、さうだ、ニコリニシカにとつちやあ立派な繼母になるだらう！明日にも結婚するがいゝと彼奴は書いて遣るがいゝ。ニコリニシカにはその女を繼母として貰つてやる、そして俺は小さなブリアンヌと結婚するのだ……は、は、さうしたら、彼奴にも繼母が出来るわけだ！だが、たつた一つ、俺は此の家にもうこれ以上女を入れたくないんだ。彼奴は結婚して、何處へでも行つて、勝手に暮らすがいゝ。お前も多分行つて、彼奴と一緒に暮らすだらう？」彼は公爵令嬢マリヤの方に振り向いて、「さぞ歓迎されるだらう、では御機嫌よう！」

この破裂の後、公爵は再びその問題を口にしなかつた。然し息子の情ない振舞に對する憤憤は、娘に對する取扱ひの中に漏らされた。彼は娘を嘲弄し苦しめる爲めの以前の材料に、今度は更に新しい材料——繼母に對する諷刺と、ブリアンヌ嬢に對する醜事——を加へた。

「何故私が彼女と結婚しちや不可い？」と、老公爵は何時も娘に云ひ／＼した。「彼女は素的な公爵夫人になる！」ところがその後、父親が實際にだん／＼このフランス女に親しく接近し出したのを見て、公爵令嬢マリヤは當惑し且つ驚いた。公爵令嬢マリヤはアンドレー公爵に手紙を書いて、父があの手紙をどう取つたかを知らせてやつた。併し父の氣が折れる望みがあると言つて兄を慰めた。

ニコリニシカと、その教育と、兄のアンドレーと、宗教とが、公爵令嬢マリヤの喜びでもあり慰めてもあつた。併しそれ等の物から離れて、誰でも個人々々の希望は持つて居るに相違ないので、公爵令嬢マリヤも、その最も深い心の奥底には、生涯の主な慰めの根源である隠れた夢や希望を懐いてゐた。この慰めとなる夢と希望とは、「神の人々」即ち公爵には氣付かれずに、彼女を訪ねて来る狂氣染みた豫言者や、巡禮たち——に依つて彼女に與へられた。公爵令嬢マリヤは、長く生きてゐれば生きてゐる程、人生に對する經驗や觀察が豊富になればなる程、この世に於いて快樂を求め、不可能な、幻想的な、罪深い幸福を得んが爲めに、骨折苦しみ、跪き、互に相手を傷け合ふ人々の、その

近視的なのに驚いたのであつた。アンドレー公爵は妻を愛した、そしてその妻は死んだ、それで彼は足りなかつた、彼は自分の幸福をも一人の女に結び付けやうとした。併し父親は、もつと有名な、乃至はもつと金持の嫁をアンドレーの爲めに望んでゐたので、彼がさうする事を欲しなかつた。かうして彼等は、たゞ一瞬間しか續かない幸福を得るが爲めに、悉く争ひ苦しむ苦悶して、その靈魂を、永遠の靈魂を汚してゐるのであつた。それは獨り吾々が知つてゐるのみではない。神の子キリストはこの世に降つて、吾々にこの人生は一刹那に過ぎないこと、試みに過ぎないことを教へた、それでも尙ほ吾々はこの人生に執着して、その中から幸福を見出さうと思つてゐる。誰もこれに氣が附かないのは何故だらう？」と、公爵令嬢マリヤは怪しんだ。「酷い目に遇ふのを恐れては、公爵を罪に誘ふ事を恐れて、公爵に目付からないやうに、裏階段から私の所へ来るあの肩から雜糞を掛けた卑しめられた神の人々の外には、誰もさういふ人はない。家を棄て、國を棄て、浮世の幸福に關するあらゆる考へを棄て、何物にも囚はれずに、手織りのスモック服を着て、名を變へて、人々に害も加へずに、その人々の爲めに祈り、自分達を追ひ拂ふ人々の爲めにも自分達を救つて呉れる人達の爲めにも同じやうに祈りながら、方々それからそれへと遣つて行くこと——かういふ眞理やかういふ生活より一層高い眞理や生活があるものぢやない！」

裸足で鎖を引いて、三十年以上も遊つてゐる、痘痕面の、物靜かな、小さい五十歳ばかりの、フェドシユシカといふ巡禮女があつた。公爵令嬢マリヤは取り分けこの女が好きであつた。或る日、暗い部屋で、聖像の前にあるランプの微かな光の中に座りながら、フェドシユシカは公爵令嬢マリヤに自分の生涯を話した。公爵令嬢マリヤは、不意に、フェドシユシカは、人生の正しい道を見出した一人であることを強く感じて、自分も巡禮の路に登らうと決心した程であつた。フェドシユシカが寝に行つた時、公爵令嬢マリヤは長い間繰返してその事を考へた、そして到頭——

それがどんなに變であらうとも——自分は何うしても巡禮に出なければならぬと決心した。彼女は自分の意志を、教父のアキンフイーといふ修道者以外には、誰にも打明けなかつた。そしてこの僧は、その企に賛成した。巡禮の女達に贈物をするのだといふ口實で、公爵令嬢マリヤは、自分の爲めに、巡禮の仕度をすつかり——スモック服や、編んだ靴や、長い袴付きの上衣や、黒の頭布など——整へた。彼女はそれ等の物を藏つて置いた秘密の用篋筒の所へ屢々行つて、自分の計畫を實行すべき時が来ないかと決し兼ねて立つてゐた。

巡禮達の物語に耳を傾けてゐると、屢々彼等の簡単な言葉——巡禮達にはそれはもう機械的になつてゐるのであるが、彼女の耳には最も深い意義に満ちてゐるものであつた——が、彼女を動かして、彼女は幾度も萬事を投げ出して、家から逃げ出さうとした位であつた。想像の中では、彼女は既うフェドシユシカと一緒に、粗いスモック服を着た、雜糞を負ひ、杖を突いて、美望から遁れ、地上の愛から遁れ、あらゆる欲望から遁れて、聖徒から聖徒へと巡禮の旅に上つて、塵埃深い路をとぼ／＼と歩きながら、とう／＼悲みも嘆息もない、永遠の喜悅と幸福のある彼方へ行く自分を見てゐたのであつた。

「私は或る所へ所つて、其處で祈る、そして其處に慣れない中に、其處が好きにならない中に、また先きへ行く。そして脚が利かなくなるまで歩き續けて、何處かへ倒れて死んで仕舞ふ。そして到頭、悲みも嘆息もないあの靜かな永遠の港へ辿り着くのだ……」と、公爵令嬢マリヤは考へた。

然し父を見ると、更に小さいニコリユシカを見ると、彼女の決心はぐらつて、ひそかに啜り泣いた。そして自分分は罪人であると感じ、神以上に父を愛し甥を愛してゐる感じた。

第四編

聖書の傳説に依れば、何にもしないこと——怠惰が、墮落前の最初の人の幸福の一状態であつた。怠惰を愛する心は、墮落後の人にもやはり同じやうにあるのだが、咒咀のろは今だに重く人間の上にかゝつてゐる。で、我々は各自、額に汗して食を求めなければならぬからばかりでなく、我々の道徳性そのものからして、我々は惰けて平和で居ることは出来ない。隠れたる聲が、惰けてゐては悪いと我々を戒める。若し、人が惰けてゐながら、自分は世の中の役に立ち自分の義務を果してゐるのだ、と感じられるやうな状態を見出す事が出来たなら、その人は正に、原始的幸福の一面に達したのであらう。ところが、さういふ、本分として止むを得ない、そして非難し難い怠惰の状態が、一つの階級——軍人社会——によつて享樂されてゐる。その當然な、そして大威張りで出来る怠惰が、これまで何時も軍隊勤務

の主なる誘引カとなつて來たし、これから先も常にさうであることであらう。
ニコライ・ラストオフは、千八百〇七年以來、デニスソフの後を承けて中隊長となり、バウラグラード驛隊にゐる間、この祝福された特權を充分に楽しんでゐた。

ラストオフは、自分の同僚や、部下や、長官たちから愛され、尊敬されて、自分の生活にすつかり満足してゐたが、モスクワの往時の知人達から見たら寧ろ悪いと思ふだらうと考へられるやうな、露き出した、善良な人間になつてゐた、この頃——千八百〇九年——は、家から來る手紙の中で母は頻々として、家の財政状態がだん／＼悪くなつてゆくこと、そして、今が年老いた両親の心を喜ばせ慰める爲めに家へ歸へるべき時だといふ事を訴へて來るのであつた。さういふ手紙を読む度に、ニコライは、自分が世の中の一切のごた／＼した事から自分を引離して、こんなに静かにこんなに平和に生活してゐるこの境遇から、家の人達が自分を引張り出したがつてゐるのだと思つて、恐怖の心持ちを感じるのであつた。彼は、早晚自分は再び人生の渦中に跳び込まなければならぬのだと感じた。そこには願はり合はなければならぬさま／＼な困難や用務がある、用人の計算がある、いろ／＼な争ひや陰謀がある、いろ／＼な縁故がある、社交界がある、ソーニヤの戀と、ソーニヤに對する自分の約束がある。凡てそれ等の事は恐ろしく面倒で込み入つてゐた。で、彼は家へ歸へる事に就いて自分は何う思つてゐるといふ事は少しも書かず、*"Ma chère maman, (吾が愛する母上、)*て始まつて、*"votre obéissant fils, (あなたの従順な息子、)*て終る定つた型通り冷淡な手紙をフランス語で書いて、母親の手紙に答へた。

千八百十年、彼は、ナターシヤがバルコンスキイと婚約したこと、そして、老公爵が承諾しないので結婚は一年延ばす事になつたといふ事を報ずる、家からの手紙を受取つた。この手紙は、ニコライを懊惱せしめ、忌々しがらせた。

第一に、彼は、自分が家族の誰よりも大切に思つてゐたナターシヤを家から失つて了ふのを心細く思つた。等二には、彼は、自分の驃騎兵流の見地から、若し自分が家にゐたのなら、バルコンスキイと縁を結ぶことがそれ程大した名譽ではないといふ事、それから、若し、バルコンスキイがナターシヤを欲しいものなら、何もあんな狂人染みた年寄りの父親の承諾なんか得ないでも差し支へのない筈だと、そのバルコンスキイに教へてやつたらうものと、その時自分が家にゐなかつた事を残念がった。

彼は、結婚前にナターシヤに逢う爲めに一寸の間賜暇を乞はうかとも思つたのだが、その時丁度、機動演習が近づいてゐたし、それに、ソーニヤのことや、いろ／＼な面倒な事が買ひ出されたので、歸へる事をまた止めにして了つた。

が、その同じ年の春、彼は、父に知らせずに書いた母からの手紙を受け取つた。その手紙が彼を決心させた。母は、ニコライが歸つて、事を處理しなければ、領地全部が公賣に附せられ、家中の者が乞食になるやうな事になると書いてよこした。伯爵は大變に弱くて、それが爲めに何もかもミチエンカに任せつきりにしてゐた、それに大變に人が好いので、誰も彼れもそこへ附け込む、そんな譯で事態はいよ／＼悪くなるのであつた。お願いだから、どうぞ、直ぐに歸つておくれ、もしお前が、私や家中の者を不幸せにさせたくないとお思ひなら、と、伯爵夫人は書いてよこした。この手紙はニコライを動かした。彼は、自分の義務が何物であるかを考へる凡人の常識を持つてゐた。

彼は、今、軍隊から全然退かないにしても、少くとも賜暇を乞うて家へ歸へるだけのことは爲なければならぬ、それが目下の彼の義務であつた。何故歸へらなければならなかつたか、それは己むを得なかつた。が、午食後の晝寝のあとで、彼は、もう長いこと乗つたことのない癖の悪い栗毛の悍馬に鞍を置くことを命じた。そして、馬に汗を流

させて宿へ歸へり着くと、ラブリューシカ——ヂェニフがもと使つてゐた侍僕、それを彼は引續いて使つてゐた——や、その晩來合はせた同僚達に、自分が賜暇を乞ふて歸省することを話した。

自分が大尉に昇進させられたか何うか、又、今度の機動演習で聖アンナ勳章を授けられたか何うか（彼には重大な事であつた）を司令部から聞かずに行つて了ふといふことは、彼に取つて可怪なことであり、且つ辛いことであつた。ゴルウホフスキイ伯爵が欲しがつて頻りに値切つてゐた自分の三匹の栗毛馬を、そのポーランドの伯爵に賣らずに、こんな風にして去つて了ふのが、如何にも奇妙なことであつた。ラストフは、その三匹の馬で二千ルブルは手に入れられると見當をつけた。最負の美人、マダム・ボルゾオソフスキイの爲めに舞踏會を催うした槍騎兵を壓倒く爲めに、驃騎兵が、自分達の最負のポーランド美人、マダム・プシヤズデツキイの爲めに催さうとしてゐた舞踏會が、ラストフが缺けて成立たうとは、考へられない事のやうであつた。而も、彼は、一切のものが馬鹿々々しく、そして、こんがらかつてゐる所へ行く爲めに、一切の事が都合よく、一切のものが瞭然としてゐるこの世界を去らなければならぬ事を知つてゐた。

一週して休暇が許された。その同僚は——同じ聯隊のものばかりでなく、全旅團を通じて——ラストフの爲めに一人前十五ルブルの會費の宴會を開いてくれた。二ツの樂隊が樂を奏し、二ツの合唱隊が唄つた。ラストフは、バゾフ少佐と Tepalik (踊の名) を踊つた、酔つた將校達は彼を空中に投げ上げ、彼を抱き、彼を下した。第三中隊の兵卒達はもう一度彼を投げ上げた、そして Hurrah (萬歳) 叫んだ。そのあとで人々は、ラストフを楫に乗せて、旅の最初の驛場まで遙々見送つて行つた。

旅の初めの半分、即ちクレエメンチユグからキエフまでの間は、ラストフの凡ての想ひが——旅人には有り難であ

るやうに——後に残して來たもの、即ち彼の中隊の方へばかり向けられてゐた。が、搖られく／＼旅の半分を過ぎ了ふと、それ／＼、自分の三匹の栗毛馬のことや、自分の隊の給養係（譯者註、日本の車隊にはこれに相當するものなし）のドジョイヴエイキイのことを忘れ、そして、オトラドノエへ着いたら、どんなものに出會するかと、そんな事が氣懸りになり出してゐた。家に近くなればなるほど、自分の家に対する想ひが、いよ／＼ますます／＼強くなつて行つた、恰も心的感情が、距離の二乗に反比例をなす如速度の法則に従ふものであるかのやうに。オトラドノエに一番近い驛場で、彼は楫の馭者に三ルブルのさかてを與へた、そして、小供のやうに、自分の家の昇り段を息をもつがずに駆け上つた。

最初、みんなに會つて昂奮した、それから、期待の後での失望——「やつぱり同じことだ。何故あんなに俺は急いだのだ？」といふ奇妙な感じがした、そして、その後で、ニコライは、生家の舊の世界に落ち着くやうになり出した。父と母も唯だ少し年とつたといふだけで、以前と少しも變つてゐなかつた。彼等に於て新らしかつた事は、以前には彼等の間に決して見たことのなかつた或る一種落ち着かない氣持ちと、時々兩人の意見が喰ひ違ふこととであつた。そして、ニコライは直ぐに夫れは、彼等の境遇が困難であるが爲めだと知つた。

ソーニヤはかれこれ二十歳であつた。彼女は今より可愛らしくはならないだらう。この上何うよくならうといふ望みもなかつた。が、今あるだけで充分であつた。ソーニヤは、ニコライが歸へるや否や、戀と幸福とで満ち溢れてゐた。そして、男に對するこの娘の信實な、思ひつめた戀が、男の心を嬉しく思はせた。

ベエチヤとナターシヤとが、家中の誰よりも、ニコライを驚かした。ベエチヤは、十三歳の、大柄な、美少年で、既に聲變りがしかけてゐた。彼は氣の利いた悪戯と快活とに満ちてゐた。ニコライは、ナターシヤに對しては、何時

までもその驚きが止まなかつた。そして、ナターシヤを見ては、笑つてゐた。

「お前はすっかり變つたね、」と、彼はナターシヤに話した。

「何う？ 醜く？」

「いや、丁度その反対だ。が、何て氣品が備はつて来たことだらうねえ、まるで公爵夫人だ！」と、彼はナターシヤに囁いた。

「さうよ、さうよ、さうよ、」と、ナターシヤは、は、し、や、い、て叫んだ。

ナターシヤは、アンドレー公爵と自分との戀物語や、公爵がオトラドノエへ訪ねて来た事やを、残らずニコライに話し、そして公爵から来た最近の手紙を彼に見せた。

「ねえ、あなた、私の爲めに喜んで下さつて？」と、ナターシヤは言つた。「私、今はほんとに心が落ちついてゐて幸福なのよ。」

「大變に喜んでゐる、」と、ニコライは答へた。「あれは實に立派な男だ。で、お前はあの男をひどく戀してゐるのか？」

「わたし、どう言つらいんでせう？」と、ナターシヤは答へた。「私は、パリースにも戀した事があつたわ、家庭教師にも、ヂエニソフにも、だけど、今度のはまるで違ふわ。私は、靜かな落ちついた氣持ちなの。私、あの人より宜い人は世界に一人もないことを知つてゐるんですもの、それだから、私は落ついて、満足なんだわ。以前にあつた事とはまるつきり違つてゐるの……」

ニコライは、結婚が一年延ばされるのに對する、自分の不満を言ひ出した。ところが、ナターシヤは、それに對して、と云つてそれより外に執る途のない事、父親の意にそむいて家庭へ入り込んで行くのは恐ろしい事だといふこと、それから、自分はさういふ事はどうあつても爲たくないといふ事を述べて、やつきとなつてニコライに喰つてかゝつた。

「あなたには、ちつとも、ちつとも、解からないんだわ、」と、ナターシヤは云ひ續けた。

ニコライは、その上何にも言はなかつた、そして、それから、自分もナターシヤに同意すると言つた。

兄は、ナターシヤを見ては、よく驚ろかされた。ナターシヤが、戀愛に陥つて居る娘であり、そして自分の婚約の戀人と別れてゐる娘であるとは、何うしても信じられないやうに思はれた。ナターシヤは平氣で、落ちついて、何時もと少しも變らず晴々としてゐた。これが、ニコライを驚ろかし、そして、バルコンスキの婚約を少し疑はしく思はせたのであつた。彼は、彼女がアンドレー公爵と一緒に居る所をまだ一度も見なかつたので、尙ほ更ら、彼女の運命が全然定まつて了つてゐるものとは、信じられなかつた。彼には、まだ、この結婚の申込みには何か眞實でないものがあるやうに思はれてゐた。

「何故、延ばすのだらう？ 何故、二人は正式に婚約しないのだらう？」と、彼は思つた。

或る時、妹の事を母親と話し合つてゐるうちに、母親も亦、心の底では時々自分と同じやうにその結婚を疑はしく思つてゐる事を知つて、ニコライは驚き、且つ、半ば満足にも思つた。

「ね、御覽、こんな風に書いてある、」と、すべての母親が自分の娘の結婚上の未來の幸福に關して持つ、例の懸案つた潜在感情に驅られながら、アンドレー公爵から来た手紙を息子に見せて、母親は言つた。「十二月までは歸らないと言つて来てゐるんだよ。向ふに止まつてゐなければならぬ理由といふのは何だらうね？ 病氣、きつとさうですよ。身體

が弱いんだ。ナターシャに言つてはいけませんよ。彼女が元氣よくしてゐるからつて、間違ひをしてはいけませんよ。あれは、あの子が娘としての最後のはしやぎやうなんだよ、あの人の手紙を見る時の彼女の態度は、私にはよく解かつてゐます。でも、どうか、神様のお蔭で萬事うまく行くだらうよ、と言つて、何時も最後に、「あの人はほんとに立派な方だ。」と、付け加へるのであつた。

二

家へ歸つた當坐は、ニコライは、眞面目で、そして、ぼんやりしてゐる事さへあつた。彼は、馬鹿々々しい種々な用件にたづさはらなければならぬことを、ひどく苦にしてゐた。それを處理させる爲めに、母は彼を喚び寄せたのであつた。彼は、出来るだけ早くその重荷を下してしまはうと、歸つてから三日目に、何處へゆくかといふ問ひには何とも答へずに、ブリ／＼して家を出て行き、髪を洗ひながらミチエンカの住居へ入つて行つて、總勘定を出せと命じた。總勘定とは何んなものなのか、ニコライは、あつげにとられて當惑したミチエンカほどにも知つてゐなかつた。

會談とミチエンカの計算とは長くはかゝらなかつた。住居の入口で待つてゐた村長と村會議員と村の書記とは、最初はだん／＼と調子の高まつて行く若伯爵のブツ／＼いふ聲を聞き、次に、続けさまに投げかける恐ろしい罵りの言葉を聞いた。それが彼等に恐ろしくもあり又面白くもあつた。

「泥棒！ 恩知らずの動物！ …… 犬のやうに擲つてやるぞ！ …… 父と母を相手にするのは違ふぞ！ …… 掠奪者め！ ……」こんなふうにした。

それから、その人達は又、同じやうな恐ろしさと面白さとして、若伯爵が赤い顔をして血走つた眼をして、ミチエンカを、襟首を捉まへて引摺り出し、言葉の台間の適切な場合々々に、巧みに蹴り蹴りしながら、怒鳴つてゐるのを見た。

「出て行け！ 二度と俺の眼にふれないやうな所へ行つてしまへ、極道め！」

ミチエンカは、直逆さまになつて入口の昇段を六段とび降り、そして、灌木林の中へ、走りこんだ。この灌木林は、オトラドノエに於ける不都合者等の避難所として有名であつた。ミチエンカ自身も、町から酔拂つて歸つてこの灌木林の中に隠れたことがあつたし、そして、オトラドノエに住んでゐる者で、何うかしてミチエンカから身を隠さうとしてこの灌木林のお蔭を蒙つたものが大勢あつた。

ミチエンカの妻と義妹とは、オド／＼した顔付をして、部屋の扉口から廊下を覗いてゐた、部屋の中にはテカ／＼したサモワールが沸騰つて居り、綿の入つた、つぎはぎの蒲團のかゝつてゐる、執事の高い寢臺が置いてあつた。

若伯爵は、その人達には見向きもせず、息をはずませて、悠々として、その傍を通り過ぎて、家の中へ入つた。

伯爵夫人は間もなく、女中の口から、執事の住居で起つた事件を聞いた。そして、一方では今、自分たちの状態が改善されるのだといふ考に慰められたやうなもの、他方では又、これが息子の上にとんな影響を及ぼすかと夫れが不安であつた。

伯爵夫人は幾度も幾度も、足を爪立て、息子の部屋の扉口へ行つた、そして、息子が、次ぎ次ぎと別な煙管に火を

點けてゐる様子をうかがつてゐた。

翌日、老伯爵は、息子は片隅へ引張つて行つて、臆病な笑顔で言つた。

「しかし、ねえ、お前、お前があんなに怒る理由は少しもなかつたのだよ。ミチエンカはその事をすつかり私に話して聞かせた。」

「俺は知つてゐる、」と、ニコライは思つた、「こんなぐらいついてゐる世界では、俺には何事も處理する事が出来やしない。」

「お前は、この七百八ルーブルが記入してないのを怒つたのだ。だが、これは、それ、複式で、前の方へ繰出して書いてあるのだ、お前は、次のページを見なかつたのだ。」

「お父様、彼奴は悪黨です、泥棒です、たしかに。それに私のした事は、もうして了つたことです。しかし、あなたがお望みにならないのなら、私は彼奴には何も云ひますまい。」

「いや、ねえ、お前！」老伯爵は躊躇した。彼は、自分が妻の財産の管理を誤つて、小供達に氣の毒なことをしたのを識つてゐた、が、今の状態をどう改めていゝかといふ意見は何も持つてゐなかつたのだ。「いや、どうか、やつてくれ。私は年寄りだ。私は……」

「いや、お父様、私のした事がお氣に召さなかつたのなら、お許し下さい。そんな事はあなたよりは解つてゐないんです。」

「農夫共だの、金銭上の事だの、複式だのつて、そんなものは一切眞つ平だ、」と、彼は思ふた。「骨牌の勘定なら解つたこともあつたけれども、複式の簿記なんて、私にはとても解りつこはない、」と、自分自身に言つた。そして、そ

の時から、家事の處理には、その上何も關係しなかつた。ところが、ある日、伯爵夫人が息子を自分の部屋へ呼んで、自分は二千ルーブルに對するアンナ・ミハイロウナの約束手形を持つてゐることを告げ、それを何うするのが一番いゝかとニコライに訊ねた。

「え、」と、ニコライは答へた、「あなたは、私次第で、それを何うでもしやうと仰有るんですね。私はアンナ・ミハイロウナは好きぢやありません、パリスも好きぢやありません、しかし、あの人は私達の友達です、そしてあの人は貧乏です。だから、私はかうします！」さう言つて、彼はその手形を引裂いた。この行爲は伯爵夫人をして喜びの涙で歎歎あげさせた。

その後は、年若いラストフは、もう、どんな事にもたづさはらなかつた、そして、老伯爵の領地内で大規模にやり續けて來られた狩獵の仕度をあれやこれやするのに熱中してゐた。

三

冬の天氣が、もう來かけてゐた、朝の霜が、秋の雨に濡らせられた地面を堅くした。草はもう斑にしかなかつた、それが、家畜に踏み付けられた蒿色の冬の穀物畑の斑点や、夏の穀物畑の薄黄色い刈株や、赤い蕎麥畑やに對して際立つて鮮やかな緑色に見えてゐた。八月の末にはまだ、冬の穀類を蒔くばかりに鋤かれた黒い耕野の間に緑色の島々のやうになつてゐた小高い地面や、雑木林や、それから刈株やが今は、秋の穀類のバツとした緑色の海の中の、黄金

色や燃え立つやうな赤い鳥々になつて了つてゐた。

灰色の野兎はもう毛が半ば變つて了ひ、狐の仔はそろ／＼親を離れたし、若い狼は犬より大きくなつてゐた。狩獵をするのに一年中で一番いゝ時節であつた。ラストフのやうな熱心な若い狩獵家の犬は、今や正に狩獵をするのに好適な状態になつてゐた、それで、狩獵家達の例會で、犬に三日間の休息を與へて置いて、九月十六日に、まだ一度も狩つたことのない狼の集のあるツウブラヴィイを手始めとして遠征に出掛けやうと決議した。

さういふのが、九月十四日の状態であつた。

その日は終日、犬は家に置いた。寒さの身にしみる、霜の多い天気であつた、が、日暮れ方になると、空がすつかり曇つて霜解がしだした。九月十五日の朝、若いラストフが寢衣姿で窓から見た時、狩獵には持つて来いといふ朝であつた。そよとの風もなく、まるで、空が溶けて、地面へ垂れ降りて来るかのやうに見えた。大氣の中で動いてゐるものと云へば、水氣とも霧ともつかない極めて微かな粒々が和かに降りてゐるだけであつた。庭の樹の根かな小枝々々には透明な露がかゝつてゐた、それが、この頃落ちた木の葉の上へボタリ／＼滴つてゐた、野菜畑の土は、罌粟の花の眞中のやうな、キラ／＼する濕つた黒い色をしてゐた、そして、少し離れるとその先は、ジツトリした黴ろな霧の幕にぼうと溶けこんで了つてゐた。

ニコライは、濡れた泥だらけな昇段へ出て行つた。そのあたりには、朽葉の嗅ひと、犬の嗅とがしてゐた。背幅の廣い、黒い所や黄褐色のところのある牝犬のミールカは、飛び出した、大きな、黒い眼で自分の主人を見付けた。起き上つて、後脚を伸し、野兎のやうに臥た、が、やがて不意に跳び上つて、主人の鼻や口鬚をベロ／＼舐めた。もう一疋の獵犬は、明るい色の路から自分の主人の姿を見付けて、背を圓くし、まつしぐらに昇段へ飛んで来た、そ

して、尾を上げてニコライの脚へ身體を押し付けた。

「オー、ホーイ！」彼は、その瞬間に、非常に深い低音と非常に甲高い次中音を一緒にした眞似の出来ない、狩獵の掛聲を聞いたのと、角を曲つて獵人へ、そして獵犬係のダニイラがやつて来た、ウークレエナ風に髪を圓く刈りこんだ半白の、皺の寄つた男である。彼は、手に曲つた鞭を持つてゐた。彼の顔は、獵人にも見られる、自分は自分だといふやうな、そして、世間の何物に對しても輕蔑してゐるといふやうな表情をしてゐた。彼は、主人に向つて、かぶつてゐたサアカシア帽を脱り、輕蔑したやうな風で主人を見た。が、その輕蔑は主人に厭な氣持を起させなかつた。ニコライは、あらゆる物を侮蔑し、そして、何物よりも優れてゐるこのダニイラが、それでも、自分の家來であり、自分の抱への獵人である事を知つた。

「ダニイラ」と、ニコライは、この狩獵日和や、犬共や、この獵人を見て、情婦を自分の前に控へた戀人のやうに今までの事を何もかも一切忘れて了うやうな、抵抗し難い狩獵の熱情に堪えられなくなつてゐたのを、きまり悪るがりにながら、言つた。

「何の御用でございますか？」と、掛聲で囁かれた、補祭長には持つて来いといふ、低音の聲が尋ねた。そしてギロリとする一對の黒い眼が眉の下から、黙つてゐる、年若い主人をチラリと見上げた。「ほんとに、我慢が出来ないでせうね？」と、その二ツの眼が尋ねてゐるやうに思はれた。

「いゝ日だなあ、え？馬に乗つたり狩獵をしたりするには實に持つて来いだ、ねえ？」と、ニコライはミールカの耳のうしろを搔きながら言つた。

ダニイラは、目をバチツとさせたばかりで、何とも返事をしなかつた。

「黎明に、様子を見にウワルカを遣つたんです。」と、彼の低音が、一寸黙つてゐたあとで、喚いた。「彼の言ふことは、彼奴はオトラドノエの獵場へ移つたさうです。そのあたりで吠聲が聞えたさうです。」(「彼奴が移つた」といふのは、二人が知つてゐた。母狼が子供をつれて、ニウエルスト(露西亞の里程、一ウエルスト、我が約十丁)程離れた小さい獵區であつたオトラドノエの森へ引移つたといふ意味であつた。)

「行かうぢやないか、え？」と、ニコライが言つた。「ウワルカをこゝへ連れて来い。」

「畏りました。」

「それぢや、もう餌をやるのを止せよ。」

「はい！」

それから五分後、ダニイラとウワルカとは、ニコライの大きな書齋の中に立つてゐた。ダニイラは背は高くなかつたが、部屋の中で彼を見ると、馬か熊が家具や人間の日用品の中で床の上に立つてゐるのを見ると同じやうな印象を人に與へた。ダニイラ自身もそれに氣がついてゐた、それで、彼は何時ものやうに、扉口へビツタリと附着してゐて、なるべく静かに物を云ふやうにし、そして、主人の坐敷の何かを毀してはならないと、身體を動かさないやうにしてゐた。彼は、出来るだけ早く再び廣々とした所へ、天井の下から空の下へ出られるやうに、言ふべき事を何もかも早く片付けて了はうと一生懸命になつてゐた。

いろ／＼な事を探ね、ダニイラに、犬は仕度が出来てゐる、といふ返事をさせたあとで、(ダニイラ自身が外へ出て行きたがつてゐた)ニコライは二人に、馬に鞍を置くやうにと言附けた。ところが、ダニイラが出て行かうとしてゐた丁度その時、ナターシャが、老乳母の大きなショールにくるまり、まだ着換もせず、髪を亂したまゝで、その部屋

へ駈けこんで来た。ベエチャも一緒に駈けこんで来た。

「出かけるの？」と、ナターシャが言つた。「きつと、さうでせう！ソーニヤは、あなたは行きやしないつて云ふんです。でも、あなたが、こんな日に出かけないでゐられるもんですか！」

「あ、行くんだ、と、ニコライは不承々に答へた。彼は眞地目な狩獵をするつもりだつたので、ナターシャやベエチャを伴れて行きたくなかつたのだ。「出かけるんだ、だが、狼狩りだけだ、お前達にはつまらないだらう。」

「私が、何よりもそれを好いてゐるのを御存知のくせに、」と、ナターシャは言つた。「いけないわー！自分だけ行くつもりで、馬を出すやうに言附けて、そして私達に一言も言はないなんて。」

「何の障害か、ロシア人の路を妨げん！」と、ベエチャが朗讀するやうに叫んだ。「さあ、行かう！」

「でも、お前は行くことはならんよ、お母様が、さうしてはいけないと仰つたんだ、」と、ニコライはナターシャに言つた。

「そんな事はないわ、わたし行くわ、何うしても行くわ、」と、ナターシャは断乎として言つた。「ダニイラ、私の馬の支度をさせておくれ、それから、ミハイラに私の革紐を持つて来るやうに言つておくれ、」と、彼女はダニイラに言つた。

ダニイラには、たゞ部屋の中にゐるのだけでも面倒臭くて、自分には適はしくないことのやうに思はれた、まして若い貴婦人と何等かの交渉をもつといふやうな事は、全く思ひもよらない事に思はれた。彼は、そんな事は自分に關係したことはないともいふやうな風をして、それから偶然としてこの若い貴婦人に何かの間違ひをするやうな事があつてはならないと、だいじをとりにながら、眼を伏せて大急ぎでそこを出て行つた。

四

老伯爵は、いつも大規模にやつて来た自分の狩獵の設備を、今は、全然息子の監理の下に譲つてしまつてゐたのだが、その日、即ち九月十五日には、非常な元氣で、自分もその遠征に加はる支度をした。

一時間のうちに、全團體が玄關先を集つた。ナターシャとベエチャとがニコライに何か言つた時、彼は、下らない事で費す時間は少しも持たないことを知らせるやうな、氣むづかしい、眞面目な様子で、彼等の傍を通り過ぎて行つた。彼は今日の狩獵の一切を監督してゐた。で、獵犬と獵人の一隊を、背面から狼の逃路を塞ぐやうにと、先へ遣り自分はドン産の馬に乗り、自分の連れてゆく獵犬共に口笛を鳴らしながら、穀打場を横斷して、オトラドノエの獵區に續いてゐる野へと出て行つた。老伯爵の馬——ツイフリヤアンカと、呼ばれた、鬣と尾との白い、栗毛の去勢馬は、伯爵の馬丁に曳かれて行つた。伯爵自身は、軽い二輪馬車に乗つて、自分の受持ちになつてゐた場所へ眞直ぐに行くことになつてゐた。

五十四匹の獵犬が、六人の獵犬係と馬丁との監督のもとに曳かれて行つた。嚴格に云ふと、獵人の中には、家の者でない人が八人、加はつてゐた、そして四十四匹餘のグレーハウンド種の獵犬がその人達のあとに隨つて走つてゐた。それだから、革紐に繋いだ獵犬と一緒にすると、凡そ百三十四匹の犬と、馬上の人が二十人ゐたのだ。

どの犬も自分の主人と、自分に對する呼聲を知つてゐた。狩獵に加はつた人は何の人も、自分の仕事と、立場と、

自分に當てられた割役をよく知つてゐた。

橋を通り越すや否や、一同のものは騒がしくせず、話をしないで、オトラドノエの森へ通ずる路や野を、長い列をなして進んだ。

馬は、路を横斷する際に、時々ビシヤリと水溜りへ踏込みながら、野の上を柔らかな敷物の上を、行くやうに歩いて行つた。霧深い空は依然、かすかに、そして徐々と大地へ降りて来るやうに見えてゐた。空氣は靜かで、暖かであつた。そして、あたりには、時折、獵人の口笛や、馬の鼻風や、鞭の音や、さもなければ、自分の場所から遅れてゐる犬のクン／＼と鼻を鳴らす音がするほか、何の音もなかつた。

一行がウエルスト程行つた時、犬をつれた更らに五人の馬上の人が、霧の中から現はれて来て、ラストフ家の人達と一緒になつた。その一番先當の人は、大きな、白い口鬚のある、元氣な、綺麗な老人であつた。

「今日は小父さん、」と、ニコライは、老人が自分のそばへ乗りつけた時に言つた。

「Christoye dyelo murschi! (譯者註、「よし、行け!」といふ程の意か、——半ば車隊的な、殆んど意味のない言葉でこの男の作つた、この男獨特な言葉である。……何うもさうだと思つたよ、)と、小父さんと呼びかけられた人は言ひ始めた。この人は實際はラストフ家の人達の叔父ではなく、この近所に小さな領地を持つてゐる遠縁の者に過ぎないのであつた。

「きつと君には我慢が出来なかつたらうと思つてゐたんだ、まあ、よく出かけておいてだつた。Christoye dyelo murschi! (これがこの小父さんの口癖であつた。)君等は、直ぐに獵區を攻撃するがよい、ぜ、我家のギルティクの報告だと、イラアギン家の人達が獵犬をつれてコルニイキイへ出るといふんだ。奴等が君等の鼻先で、うまい獲物を

引奪ひんたくつて了ふだらうぜ。」

「丁度そこへ行くところなんです。犬と一緒にしましやうか？」と、ニコライが尋ねた。

獵犬は一群ひとむれに併合させられた、そして、小父さんとニコライとは列しりぞんで進んだ。

昂奮した顔と輝く眼とだけ外に出して、あとはクル／＼と肩掛しりぞにくるまつて居たナターシャが、二人のそばへ馬を駈かけらせて来た。それと一緒に、始終ナターシャのそばを離れないでゐたベエチャと、ナターシャの世話をするやうにと云ひつけられて居た獵師で馬丁であるミハイラとが随ついて来た。ベエチャは笑ひながら、馬に鞭むちつて、しゃくつてゐた。ナターシャは凜とした様子で、落着いて、自分の眞黒なアラブチイクに乗つて、樂な確かな手つきでそれを馭よしてゐた。

小父おぢさんは氣に入らなさうにベエチャとナターシャを見た。彼は、狩獵のやうな眞地目な事に、戯事あそびごとを混へるのを好かなかつた。

「今日は、小父さん、私たちも狩獵かりりに来たんです！」と、ベエチャが叫んだ。

「今日は、今日は、だが、犬を踏み付けないやうに氣をおつけ。」と、小父さんは嚴格に言つた。

「ニコレンカ、ツルウニラは何なんて愉快な犬やつなんでせう！私を知つてよ。」と、ナターシャは自分の氣に入りの犬の事を言つた。

「第一、ツルウニラは、犬ドッグではなく、狼を狩り出す獵犬ハケンドなんだ。」と、ニコライは思つた。彼は、その瞬間の自分とナターシャとの間の考方の相異を感じさせやうとして、妹をチラリと見た。ナターシャはそれが解わかかつた。

「私たちが誰かの邪魔をするなんてことがあるもんですか、小父さん。」と、ナターシャは言つた。「私たちは自分の

定まつた場所ところにゐて、そこから動きはしませんわ。」

「それは感心だ、小伯爵令嬢」と、小父さんが云つた。「それはいゝが、馬から落ちたさんな、落ちたら二度と乗れないからね——*chistoye dyalo marsch!*」

オストラドノエの獵區は、二百五十ヤード（我が約二丁）ばかりの彼方かたに、緑色のオリシスのやうに見えだした。ラストフは、何の點から犬を進めさせるがいゝか、小父さんと相談をして、ナターシャの留とどまつて居るべき場所、そこへは何にも逃げ出して来るやうな事の更らにないやうな場所を指し示し、そして自分は、溪たにの上の、後うしろの方から圍かこまうとゲルリと廻つて行つた。

「いゝか、おい、君は古狼ふるおまかの道筋にゐるんだぜ。」と、小父さんが言つた。「きつと出て来るから氣をつけ給へ。」

「その時はその時でさ。」と、ラストフは答へた。「カラアイ、へいー！」と、かう、自分の犬を呼んで、小父さんの警告に應じた。カラアイは、他の助けなしに自分だけで或る古狼ふるおまかを攻撃したので有名な、年とつた、不格巧な泥色をした獵犬であつた。

一同が、各自の場所に就いた。

老伯爵は、自分の息子が狩獵に對して熱心なのを知つてゐたので、後おくれまいと急いだ。そして、獵犬係共がやうやつと場所へ達したか達しないに、イリヤ・アンドレーキツチ伯爵は快活な顔、赤くなり震へてゐる頬をして、自分に當あてられた場所へと、緑の野を越えて、二頭の黒馬を驅り着けた。毛皮の外套を眞直ぐにし、獵具を身につけて、彼は自分と同じやうに白くなりかけてゐた、艶つやのいゝ、肥つた、穩やかな、機嫌のいゝヴィフリヤンカに跨つた。馬車馬は馬車と一緒に送り返へされた。イリヤ・アンドレーキツチ伯爵は、心からの狩獵家ではなかつたが、狩獵に關するあらゆる

る規則をよく心得てゐた。彼は、灌木の繁みの縁へ乗つて行つて、その蔭に立ち、手綱を取りあげ、樂々と鞍に身體を据え、そして、自分の用意の出来てゐるのを感じて、微笑みながら、あたりを見廻した。

彼のそばには、今は鞍の上で重くなつてゐるが、老練な乗馬者の、彼の侍僕セミヨン・チエークマルがゐた。チエークマルは、三匹の特種の狼獵犬を革紐で繋いで引いてゐた。其奴等もやはり、主人やその馬と同じやうによく肥つてはゐたが、活潑な獵犬であつた。他に二匹の鋭敏な老犬が、そのそばに、革紐に繋がれずに臥てゐた。百歩ほど離れた、森の縁に、伯爵家のもう一人の馬丁である、向ふ見ずの乗馬者で且つ熱心な獵人であるミトカがゐた。伯爵は、狩獵するに先立つて、まづ匂ひをつけたブランドーを銀のコップで一杯飲む古い慣例を守つてゐた。彼は一寸したお辨當を食べ、その後で、好物のポルドオを半壺飲んだ。

イリヤ・アンドレーキツチは、馬車を驅けらしたのと酒を飲んだのとで、だいぶ赤くなつてゐた。眼は濕氣に包れて、特別光つてゐた、そして、毛皮外套に纏まつて鞍に乗つてゐる格好は、馬車へ乗る爲めに伴れ出された赤ん坊のやうであつた。

自分の役割を調べた後、チエークマルは、その瘦せた顔、落ち窪んだ頬を向けて、三十年の間至つて仲善く暮らして来た自分の主人の方を見た。主人の機嫌が爽やかなのを見て、彼は、愉快なお喋りを豫期した。もう一人の人があたりに氣を配りながら除々と——きつと、さうするやうに注意されたのだらう——森の中から乗り出して来て伯爵のうしろへ靜かに止まつた。この人は女の上衣を着け、高い、頂の尖つた帽子をかぶつた白鬚の老人であつた。これは道化者のナスタアシャ・イワーノウナであつた。

「おい、ナスタアシャ・イワーノウナ」と、伯爵は彼に目くばせしながら、低聲で言つた。「お前は獲物を逃がしてし

まうばかりだよ、ダニイラにやられるぞ。」

「私は昨日生れたんぢやありません」と、ナスタアシャ・イワーノウナが言つた。

「叱ッ！」と、伯爵はそれを制して、セミヨンの方を向いた。「ナタリヤ・イリニチシナを見かけたか？」と、セミヨンに訊ねた。「彼女は何處にゐる？」

「あのお方はビョートル・イリイツチと一緒に、ザルヴリイの高い草の蔭においででございます。」と、セミヨンが微笑みながら答へた。「女でいらつしやるが、狩獵は大變お好きでいらつしやいますな。」

「それに、彼女の馬術には驚くだらう、セミヨン、……え？」と、伯爵は言つた。「男にしても、拙くはないね！」

「驚かないものがありますものか！ほんとに大膽で、ほんとに敏捷でいらつしやいます！」

「そして、ニコラアシャは何處にゐる？リヤドーフスキイの高地かね、え？」と、やはり低い聲で伯爵は訊ねた。

「さやうでございます。あのお方は、どこが一番いゝ立場だか、よく御存じでいらつしやいます。狩獵のことは實にお精しくつていらつしやるんで、私やダニイラは時々全く驚き入つて了ふんでございます。」と、主人を喜ばせる法を心得てゐるセミヨンは言つた。

「彼は、立派な、精巧な狩獵家だ、ね？で、彼の馬術についてはお前はどう思ふ、え？」

「まるで繪のやうでいらつしやいます！この間、ザウルジンスキイの森から、あの狐を追ひ出したお手際と云つたら、畦の上から駆け下ろしておいでになつたのですが、それは實に見物でございました——馬は千金、乗手は千萬金も及ばず。まつたく、あのお方に較べる程の者を捜し出さうたつて、仲々容易なことであるものではございません！」

「容易なことであるものではない……」と、セミヨンの言葉が、餘りに早く終つて了つたのを口惜しがるやうなふり、伯爵は繰返へして言つた。「容易には、」と、彼は上衣の裾を裏返へして、喫烟草の函を捜しながら言つた。「いつか、あの方々が非常に立派な風で祈禱會から出ていらつしやいました、と、その時、ミハイル・シドリイチが……」

この時、セミヨンは、しんとした空氣のなかで、二三疋位の犬の吠聲に交つて、獵犬の群の突進する音をハツキリと聞いたので、皆まで言はずに言葉を斷つた。頭を一方へ傾げ、主人に注意の指を振りながら、彼は耳を澄した。「奴等は獲物を嗅ぎつけたんです……」と、彼は囁いた。「リヤドーフスキノ高地の方へ眞直ぐに参りました。」伯爵は、やはり顔に微笑をたゞよはせながら、自分の前方を路に添ふて眞直ぐに見、そして、手に持つてゐた喫烟草函からは一摘みも取り出さなかつた。獵犬の鳴聲に續いて、ダニイラが角笛を吹いて狼を狩り立てる低い調子が響いて來た。群が最初の三疋の犬に聲を合せた、で、獵犬共のその聲は、彼等が狼を追つてゐる事を思はせる一種獨特な調子を持つた勢一杯の聲に聞えた。獵犬係は、もう追ひ立てはゐなかつたが、「ウル——！ウル——！ウル——！」と叫んで獵犬を勵ましてゐた。そして、凡ての聲々の上に、ダニイラの聲が高く聞えた、それは底響きのする調子からだん／＼徹りのいゝ甲聲に變つて行つた。ダニイラの聲は森中に響き渡り、それを突き徹ほして、更らに廣々とした野へと反響して行くやうに思はれた。

數秒の間、黙つて聞き澄ました後で、伯爵と馬丁とは、確に獵犬が二組に分れたなと思つた。一ツの、大きい方は、一段と烈しい鳴聲で、遠くの方へ行きつゝあつた、もう一ツの方は、伯爵のそばを通り過ぎて、森に添ふて進んでゐた、そして、犬を勵ましてゐるダニイラの聲がしたのは、この群に交つてあつた。兩方の群の音が一つに溶け

合つたり、復た別々になつたりして、そして、兩方共だん／＼遠く離れて行つた。セミヨンはほつと吐息をした、そして、一疋の若い犬が脚へ革紐をからましたのを直さうと屈んだ。伯爵もほつと吐息した、そして、喫烟草函を手を持つてゐるのに氣がついて、それを開けて、一摘み取り出した。「さがれ！」と、セミヨンが、藪の外へ頸を突き出してゐた犬に叫んだ。伯爵はビクツとした、そして、喫烟草函を落した。ナスタアシャ・イワーノウナは馬から下りて、それを拾はうとかがつた。

伯爵とセミヨンはそれを見てゐた。と、不意に、よくあることだが、狩獵の物音が直ぐ手近かに聞えた、犬の吠聲やダニイラの叫聲が直ぐ自分たちのところへしてゐるかのやうに。

伯爵はあたりを見廻した、と、右の方にミトカのみるのを見た、彼は、顔から突ひ出しさうな眼をして伯爵をぢいと見詰めてゐた。彼は帽子を擧げながら、他の側の前面を指さした。

「油断なく！」と、ミトカは、この言葉が、言つて貰ひたがつて長い間彼を苦しめてゐたといつたやうな聲をして叫んだ。そして、犬を放して、伯爵の方へ馬を駆けさせた。

伯爵とセミヨンは藪から駆け出た、と、左手に當つて一疋の狼を見た。静かな、ゆら／＼した形をして、二人が今までゐたその繁みへと、二人の左の方を向ふへ、のろ／＼したダク足で、動いてゐた。きつとなつた犬共は鼻を鳴らし、革紐から身體を振り放して、狼のあとを追つて、馬の蹄のわきを飛んで行つた。

狼は走るのを止めた。扁桃腺炎にかゝつた人のやうに、窮屈さうに犬の方へ陰鬱な顔を振り向け、やがて又、前と同じやうな静かな、ゆら／＼した形で、一躍、二躍して、尾を振りながら、藪の中へ見えなくなつた。

その途端に、唸るやうな叫びをあげて、向側の繁みの中から一匹の獵犬が、猛烈な勢で跳び出して來た、續いて、

二匹、三匹、やがて群全體が、見通しの場所を横断つて、今、狼が姿を隠した丁度そのところへと飛んで行つた。犬の過ぎた跡に藪が掻き分けられ、ゐた、そして、そこから、汗で黒くなつたダニイラの栗毛馬が現はれて来た。馬の長い脊に、ダニイラは高く棲まつたやうに乗つて、前の方へゆら／＼してゐた。帽子をかぶつてゐなかつた、白い髪かみの毛が、赤い、汗ばんだ顔の上へ、亂れかゝつて揺れてゐた。

「ウル——！ウル——！ウル——！……」と、彼は叫んでゐた。伯爵の姿が目に入つた時、彼の眼に電光のやうな閃ひらめきがあつた。

「畜生！……」と、ひどく亂暴な悪口をつき、ふりあげた鞭で伯爵を嚇しながら叫んだ。「狼を取逃がしやがつた！それでも獵人かい。」

混亂し、怖おそけてゐる伯爵にその上何か言ふのを卑しきでもするかやうに、彼は、伯爵に向つてしやうとしてゐた。凡ての憤激で、自分の栗毛の去勢馬の汗ばんだ重い横腹を鞭うつて、犬の後を追ふて飛んで去つた。伯爵は答うたれた人のやうに、立つてゐた、身のまはりを見廻し、微笑して自分の現状に同情して貰はうとセミヨンを呼ばうとした。けれど、セミヨンはそこに居なかつた。彼は、森へ入らうとする狼の路を断たうと、グルリと駈けらせて去つて了つたのだ。グレーハウンド種の獵犬も、亦兩側のあちこちと駈けてゐた。しかし、狼は藪のなかへ逃げこんで了つた、そして一行のうち一人もそれを見つけ出したものはなかつた。

五

ニコライ・ラストフは、その間、狼を待ちながら、自分の立場に立つてゐた。彼は、近くなつたり遠のいて行つたりする獵犬の群の突進する音を聞き、自分に親しい調子の犬共の鳴き聲を聞き、獵人達の聲の近くなつたり、やがて又ずーつと遠くなり、又、急に高まつたりする事やから推して、森の中で正にどんな事が始まつてゐるかを覺つた。彼は、若い狼も古ふるおほ狼も兩方とも包圍内にゐることを知つた。獵犬が二組に分れたこと、一ヶ所では狼に接近してゐること、何かしらやりそこなつたのだといふ事が解つた。彼は、狼が自分のわきへ出て来るのを今か今かと待ち構へてゐた。どんな按梅に、又、どの地點へ狼が駈け出して来るだらうか、そして、自分はそれを何う處置するだらうかと、數限りもない種々な想像をした。彼の心の中は希望と絶望とが入り交つて一ぱいになつた。

幾度となく、彼は、狼が自分の方へ跳び出して来るやうにと、神に祈つた。人が極く下らない事で非常に熱心に祈る時に感じるやうな、夢中な、そして、氣がとがめるやうな感情で祈つた。

「ねえ、私にこれをして下さる事が、あなたにとつて何でありませう？あなたは偉大でいらつしやる、そして、あなたにこんな事を祈るのは罪だといふ事も私は知つてゐます。だが、どうぞ、古ふるおほ狼を私のところへ來さして下さい。そして、カラアイにその首に齒を立てさせ、こつちを見てゐる小父さんの眼の前で其奴を殺さして下さい。」と、彼は神に言ふのであつた。

その半時間のうちに、幾度といふ事もなく、ラストフは、凝つと見詰める不安な眼で、白楊の下生の上へ二本のゴツ／＼して櫛の樹の聳えてゐる森の縁の繁みや、おつかぶさつてゐる岨のある峽や、右手の藪の蔭からのぞき出してゐる小父さんの朝やに、絶えず氣を配つてゐた。

「いや、そんな幸福はある筈がない」と、ラストフは思つた。「でも、神様にとつては何でもないんだがなあ！そんな事になる筈はない！私は何時も悪い、骨牌でも、戦争にも、何にでも。」

アウステルリツツやダラホフの事が、彼の想像の中を、明瞭したしかし速い連続となつて閃き過ぎた。

「生涯にたつた一度、いゝから古狼を殺し度い、その上に願は何もない！」と思つて、眼を見張り、耳を澄まして左から右、それから又後ろへと見廻し、犬の聲の一寸とした高低にも耳を澄ましてゐた。

彼は、復た右の方を見た、と、何ものか、見通しの場所を横断して自分の方へ駈けて来るのが見えた。

「いや、そんな筈はない！」と、ラストフは、よく人が、自分の長く待ち望んでゐたものゝ來た時にするやうに、太息をつきながら思つた、素敵に幸運なことが彼に來た、而も至極簡単に、それを知らせる音もなく、騒ぎもなく、何の形もなく。ラストフは自分の眼を信ずる事が出来なかつた、そして、その不確かな状態が一寸の間続いた。狼は前の方へ駈けてゐた。その行手を横断つてゐた轍路を無態に跳び越した。

それは、灰色の背と、ふくれた赤い腹をした古狼であつた。見られる氣遣ひはないと安心してゐるらしいふうで、急がずに駈けてゐた。ラストフは呼吸をとめて、犬共を見廻した。彼等は、狼を見ず、それに全く氣がつかずに、臥てゐるのがあり、又、立つてゐるのがあつた。年寄のカラアイは頭を後へまはして、臀のところへ黄色い齒をガチ／＼云はせて、腹立たしげに蚤を探してゐた。

「ウルー！ウルー！ウルー！」と、ラストフは唇を突出しながら囁いた。犬共は革紐の轡輪を鳴らしながら起き上り、そして耳をおつ立てた。カラアイは後脚を掻いて起き上り、耳を立て、そして、もつれた捲毛の垂れてゐる尾を振つた。

狼が森から離れて自分の方へ動いて來るので、ニコライは、「放さうか？それとも放すまいか？」と、自分自身に言つた。忽ち、狼の相貌がまるで變つた。彼は、自分に見据えられた人間の眼を——多分生れて最初だつたのだらう——見て、ビツクリした。そして、ラストフの方へ少し顔を振り向けて、引返へさうか、それとも進まうかと惑ふて、ちつと立つてゐた。

「えい！かまうもんか、進め！……」と、狼が獨言を言つてゐるやうに見えた、で、あたりを見廻しもせず、急がずゆつ／＼と、氣樂な併し大膽な動作で、ズン／＼進んだ。

「ソルー！ウルー！……」と、自分の持前の聲でない聲を出して呼んだ、すると、彼の乗つてゐる、きかん氣の馬は、ひとりてに眞逆に坂を駈け下り、そして狼の逃げ路を塞がうと小流れを跳び越えた。獵犬共は、なほ一層速く突進して、馬を追ひ越した。

ニコライは、自分の呼聲が耳に入らなかつた。彼は、自分の駈つてゐるのが覺えがなかつた。彼は、犬共も見なければ、自分の駈けてゐる地面も見なかつた。彼は、歩みを速めながら、林の中の空地を横断つて、前と同じ方向に跳んでゆく狼の外、何一つ目に入らなかつた。獵犬の先當は、黒と褐色の、背中の廣い牝犬のミルカで、それがやがて狼に追ひ付かうとしてゐた。しかし、狼が振りかへつて、それに横瞥をくれた、すると、ミルカは、何時もの通り狼に跳び付きはせず、急にビタリと立止まり、前脚を前へ突張り、尾をピンと立てた。

「ウルル！ウルル！ウルル！」と、ニコライは呼んだ。

赤い獵犬のリユビイマが、ミルカの後から飛び出て、藪地に狼に飛びかゝり、その後脚に噛み付いた。が、同時に、慄え上つて倒へ飛び退いた。狼は身體を伏せて齒をギリ／＼と噛み鳴らし、やがて復起き上つて、前の方へ跳んで行つた。ニヤードばかりの距りをおいて、あとから全體の犬が追蹙けて行つた。犬共は、それ以上傍へよらうとはしなかつた。

「奴は逃げ了せるだらう！いや、そんな事があるものか！」やはり唖聲で呼び続けながら、ニコライは、こう思つた。

「カラアイ！ウルル！ウルル！……」と、今や彼の唯一の依頼であつた、その老獵犬を眼で捜しながら、彼は叫び續けてゐた。

カラアイは、自分の年取つた筋肉を精一ぱい伸ばし、狼を熱心に見張りながら、狼の行手を塞がうと、狼を離れて不格巧な様子をして跳んで行くのであつた。が、狼の駆ける速さと、獵犬どもの緩き加減から推して、カラアイの計畫の外れてゐたのは明かであつた。

ニコライは、雜木林が、今、自分の前に遠くないのを見た。狼が、もし一たびそこへ行きつきさへすれば、きつと、逃げ了せるに相違ない。が、その時、前面に人と犬とが、狼の方へ殆んど眞直ぐに跳びかゝつて来るのが見えた。まだ希望はあつた。ラストフ家のでない——ニコライには何處のとも分らなかつた——胴の長い、若い獵犬が、前の方から狼にまともに跳びかゝつた、そして、それを叩き倒さうした。狼は非常な速さで起き返つた、そして、その若い獵犬に跳びかゝつた。その齒がカチリと鳴つた、と、獵犬は、横腹から出る血潮にまみれて、キャン／＼鳴きながら、

ながら、地べたへ頭を押しつけた。

「カラアイ！老爺！」と、ニコライは哀聲を發した。

老犬は、腰のところ、もつれた毛の房を震はせながら、狼がグ／＼してゐたお蔭で、その行手の路を塞ぐことが出来た。今や、狼の前、五歩のところゐた。狼は、自分の危難を覺つたかのやうに、カラアイをチラリと盗み見た、そして、脚の間へ一層深く尾を捲き込んで歩みを速めた。が、その時、——ニコライには、カラアイがどうかしたとだけしか見えなかつた——その獵犬は、いきなり狼に飛びかゝり、そして、それと一緒に捲き合ふ一つの塊となつて、その前の小流へ轉がり込んだ。

ニコライが、小流の中で狼と捲き合つてゐる犬共を見た時、それから、犬共の下になつてゐる狼の灰色の毛皮や踏張つたその後脚や、恐怖で喘いでゐるその頭や、裏返へしになつてゐるその耳（カラアイがその喉に噛み付いてゐた）やを見た時——その刹那こそ、彼の生涯の最も幸福な刹那であつた。彼は、下りて狼を刺し殺さうと、既に鞍頭を攫んでゐた、と、不意に、狼の頭が犬の群の上へ突き出され、續いて、その前脚が小流の岸にかゝつた。狼は齒を鳴らした（カラアイはもうその喉に噛み付いてはゐなかつた）、狼は後脚で凹んだところから躍り出した。そして脚の間へ尾を捲き近んで、再び犬共から離れて、前へ突進した。カラアイは姿を現はしたが、容易に小流から出られなかつた。彼は擦傷をしたか、それとも噛み付かれたか、どつちかであつた。

「あゝ！これはどうしたことだ！」と、ニコライは絶望して叫んだ。

小父さんの家の獵師が、他の側から、狼の行手を横断つて駈つた、そして、その人の獵犬共が狼を立止まらせた、で、再び取圍まれて了つた。

ニコライと、その馬丁と、小父さんと、小父さんの獵師とが「ウルー！」の叫び聲をあげて、狼のまはりを馬で跳び越つてゐた。狼が蹲まる度びに馬から下りやうとし、そして狼が身體をゆり起して、自分が安全になれる森の方へ動き出す度に、再前の方へ突進しながら。

この攻撃の始めに、ダニイラは獵師たちの叫聲を聞いて、森から跳び出した。彼は、カラアイが狼を噛みとめたのを目撃した、そして、もうそれで事は終局だと想ふて、馬を止めた。が、獵師たちは馬から下りず、やがて、狼が身をのがれて再逃げ出したのを見て、ダニイラは、狼の方へではなしに、カラアイがやつたやうに、狼の行手を塞ぐ爲めに雑木林の方へ真直ぐに馬を驅けさせた。このお蔭で、彼は、小父さんの犬共が二度目に狼に後れた時に、狼の上へ眞正面に跳びかゝる事が出来た。

ダニイラは、左の手に抜いた短劍を持ち、宛ら連枷でもあるかのやうに、鞭で自分の栗毛馬の嘴いてゐる横腹を叩きつけながら、黙つて駆け寄つた。

ニコライは、ダニイラの栗毛馬が喘ぎながら自分の直ぐそばを飛んで行くまで、ダニイラの姿や聲を見も聞もしなかつた、と、彼は、物の落ちる音を聞いた、そして、狼の背中に乗つて、耳を執つて抑へつけやうとしながら、犬共の眞中に横はつてゐるダニイラを見た。それでも終局だといふ事は、犬共にも、獵師達にも、狼にも明らかであつた。怖けて耳を後へ引いてゐる狼は、起き上らうとした、が、犬が獅噛み付いてゐた。ダニイラは起たうとして頭いた、そして、腰を下ろして憩まうとでもするかのやうに、身體全體の重みで狼の上へ轉がつた、そして、耳を執つてそれを抑へつけた。ニコライはそれを刺し殺らうとしたが、ダニイラは低聲で言つた――

「お止しなさい、縛つちませう！こら言つて、自分の身體の位置を替へて、是で狼の頸を踏み付けた。人々は、

狼の口へ棒を入れ、それを革紐で結びつけて、轡を拵めたやうにし、そして、その四脚を縛つた。ダニイラは狼を二度ごろくくと轉がした。

幸福な、何かがつかかりした顔附をして人々は、その大きな狼を生きながら、馬の脊中に縛り付けた、馬は、それを見て、驚ろいて、跳ねて鼻風を吹いた。狼のうしろへ皆集つて来て、クンノノ鼻を鳴らしてゐる犬共を伴つて、一同が集合する事になつてゐた場所へその獲物を運んで行つた。

狼、獵犬は二匹の狼の仔を、グレエーハウンド種の獵犬は三匹の狼の仔を捉まへた。連中は、自分達の獲物を見せ各自の物語をするために寄り集つた。そして誰もかれもがその大きな古狼を見に行つた、それは陰鬱な顔をした頭を下の方へ垂れ、齒の間へ棒を啣へさせられて、自分を取圍んでゐる犬や人々の群を、大きなドンヨリした眼で見詰めてゐた。人々が觸はると、その縛られた脚がビクツとした、そして、みんなを荒々しく、しかし單純に見るのであつた。イリヤ・アンドレイイチ伯爵も近寄つて行つて、その狼に觸つた。

「やあ！すてきに大きな獣だなあ！」と、彼は言つた。「此奴は甲良を過てゐやがる、えゝ？」と、傍に立つてゐたダニイラに言つた。

「左様でございます」と、急いで帽子を脱いで、ダニイラが答へた。

伯爵は、自分が狼を逃がしたこと、そして、ダニイラが怒鳴りつけたことを憶ひ出した。「何にしる、お前は、短氣だなあ」と、伯爵が言つた。

ダニイラは何にも言はずに、きまり悪る相に、小供のやうな可愛らしい愛嬌のある笑顔を見せた。

六

老伯爵は家へ歸つた。ナターシャとベエチャとは直ぐにあとから歸へると約束した。時間がまだ早かつたので、狩獵の連中はなほ先へ進んで行つた。眞午頃に、彼等はこんもりと生繁つてゐる若い雜木林に蓋はれた溪間へと獵犬を入れた。ニコライは、上の方の、刈株のある地面に立つてゐたので、自分の連中全體を見ることが出来た。

ニコライに面して彼方側に緑色の穀物の野があつた、その胡桃林の蔭の凹地に彼の獵師の一人がゐた。獵犬を放してやつて間もなく、ニコライは、自分の識つてゐる一匹の獵犬——ヴオルトルン——が時々鳴聲をあげるのを聞いた、と、他の獵犬共がそれに合はせて時々止めたり、又呼び出したりした。ヤガて、彼は、溪間から、獵犬共が狐の跡を付けてゐる叫聲を聞いた、そして、獵犬の群全體が一緒になつて、ニコライから遠ざかつて緑色の穀物畑の方へ出て行くのを聞いた。

彼は赤い帽子をかぶつた獵犬係たちが憐蒼とした溪間の縁に沿ふて馬を驅けらせてゐるのを見た。彼は犬共をさへ見ることが出来た。そして、緑色の穀物のなかへ、彼方側へ狐が見えて来るのを今か今かと待ち受けてゐた。凹地に立つてゐた獵師は跳び出して、犬を放した。ヤガて、ニコライは、緑色の穀物の間を、ボヤ／＼した尾を地べたに引擦るやうにして、急いでゆく赤い、無様な格巧をした狐を見た。犬共はそれを追ひかけてゐた。そして、もう、それに近づいてゐた、で、今、狐は、犬共の間を、うろ／＼輪を畫き始めてゐた、自分の周圍にボヤ／＼し

たブラツシを引擦りながら、その輪をだん／＼速くした。と、不意に、見識らない白い犬がそれにび跳付いた、黒いのがそれに續いた、そして、何もかもごつちやになつた、そして、犬共は、頭を寄せ、尾を伸ばして、少しも動かさず、狐のまばりに或る星座の形を造つた。二人の獵師がそこへ馬をかけらせて来た。一人は赤帽子で、もう一人は緑色の上衣を着た見識らない人であつた。

「何うしたんだらう？」と、ニコライは怪しんだ。「何處からあの獵師は湧き出したんだらう？ あれば、小父さんの方の人ぢやない。」

獵師達は狐を捉まへた。が、それを鞍へ掛けずに、長いこと其處に徒歩のまゝで立つてゐた。

彼は、二人の直ぐそばに立つてゐる、突出してゐる馬銜のついた二頭の馬と、伏してゐる幾匹かの犬とを見るこゝが出来た。獵師たちは腕を振つて、その狐に就て何かしてゐた。角笛が吹き鳴らされた——それは争論の場合に極まつてゐた合圖なのだ。

「あれは、イラアギン家の獵師が、我々のイワンと何か問着をしてゐるんでございますよ、と、ニコライの馬丁が言つた。

ニコライは、妹とベエチャに自分のまゝこゝへ来るやうにさ、馬丁を喚びに遣つた。そして、自分は獵犬係たちが獵犬を纏めてゐる場所へさ、並歩で馬を進めて行つた。連中のなかの五六人が争ひの場所へさ馬をかけた。

ニコライは馬から下りた。そして、そこへ来てゐたナターシャやベエチャと一緒に、争論がどう決着したかを聞かうと待ちながら、獵犬のそばに立つてゐた。問着をしてゐた獵師が、鞍に狐を附けて、木立のなかから、若主人の方へやつて来た。彼は遠くから帽子を脱り、そして、近寄つて、恭々しく物を言はうと努めた。が、彼は、蒼ざめ

て、呼吸がはづんで、そして、顔が怒つてゐた。一方の眼に傷をしてゐたが、それには気が付いてゐないらしかった。

「あすこで何があつたんだ？」と、ニコライは尋ねた。

「なあに、奴が此方の獵犬のほんの鼻つ先でこの狐を殺さうとしたんです。それを捉へたのは、私の牝犬——鼠色の奴——なんです。あなたが行らつして、掛け合つて下さい！狐を横取りしやうといふんです！私は奴をこの狐で、一ツ喰はしてやりました。はい、それは私の鞍にあります。——お前はこれが喰ひたいのか？」と、まだ敵に物を言つてゐるやうな気がするものと見えて、獵小刀を指さしながら、獵師は言つた。

ニコライは、その男にはかれこれと物を言はなかつた。そして、妹とエチャヤに待つてゐるやうに言ひ置ひて、敵のイラアギンの獵犬や家來供の、ゴチャ／＼集つてゐる場所へ馬を進めた。

勝誇つた獵師は、自分の仲間のなかへ馬を進めて去つた。そして、そこで、同情のある、そして、事の顛末を聞かうと待ち構へてゐる群集の中心になつて、自分の手柄談を初めた。

要領は、ラストフ家と或る争ひ事があつて、訴訟を起した事のある間柄のイラアギンが、古くからラストフ家の有といふ事になつてゐる場所へ来て狩獵をしてゐて、そして、今、宛ら故意のやうに、ラストフ家の人々のゐた深間へ人をよこして、その中の一人に、他人の犬の下から狐を引奪させたといふのであつた。

ニコライは、一度もイラアギンに遇つたことはなかつた。しかし、彼は、その隣人の喧嘩好きなこと、頑冥なことを聞いてゐた。で、彼は何時ものやうに、判断と感情に於て極端へ走つて、裏心からイラアギンを憎み、自分の最も不愉快な仇と見做してゐた。激昂して、怒つて、彼は、今、手に鞭を執り、敵との交渉に於て最も手強い猛烈な手段を取つてやらうと充分用意して、イラアギンの居る所へ馬を進めて行つた。

雑木林の畝を乗り越えた時、彼は、綺麗な黒馬に跨つて、馬丁を二人件れて、自分の方へやつて来る海狸の帽子をかぶつた堂々たる紳士を見た。

ニコライは、イラアギンが、自分の敵でないばかりか、殊に自分と懇意になりたがつてゐた禮儀ある紳士であることが解つた。イラアギンは、ラストフに近づくこと、その海狸の帽子を脱つた、そして今度の事件を非常に遺憾に思ふといふことや、その男を罰しやうといふ事や、伯爵もつと深く御交際が願ひたいといふ事を言ひ、それから、自分の獵區を使つてくれと申し出た。

ナターシヤは、兄が何か恐ろしい事でもしほしまいか案じて、何さなく昂奮して、少し離れて兄の後からついて行つた。敵同士が親しい挨拶を交してゐるのを見て、ナターシヤは二人のそばへ乗り附けた。イラアギンはナターシヤに對して前より一層高くその海狸の帽子を擧げた。そして、氣持ちよく微笑みながら、伯爵令嬢の狩獵の好きなこと並にその美しい事は、兼ねてから聞いてゐたが、實際ディアナのやうだと言つた。

イラアギンは、自分の獵師の罪の印象を消さうとして、一ウエルストほど離れた自分の丘へラストフには非來るやうに言ひ勧めた。そこは、自分の取つて置き置きの獵地で、野兎が澤山ゐると説明した。ニコライは承諾した。それで連中が倍になつて、それが一緒になつて進み出した。その場所へゆくには野を通つて行かなければならなかつた獵師たちは一列にならび、紳士たちは塊まつて馬を進めた。小父さんも、ラストフも、イラアギンも、他人に見られないやうにしながら、自分の犬より優れてゐさうな競争者はゐないかと不安さうに捜しながら、お互ひの犬を竊然と見てゐた。

ラストフは、取り分け、イラアギン家の鋼鐵のやうな筋肉をした、華奢な鼻の、突き出た黒い眼の、細っそりした、

黒と黄褐色の、純種の小さい牝犬の美しさに驚ろかされた。ラストフはイラアギンの犬共の狩獵力に就いて聞いたことがあつた、うして、今、彼は、その美しい牝犬を自分のマイルカの競争者だと思つた。

イラアギンが持出した、その年の穀物の收穫に關する落着いた談話の最中に、ニコライは、その黒と黄褐色の牝犬を指差した。

「立派な牝犬をお持ちですれ！」と、彼は無頓着な調子で言つた。「例巧ですか。」

「あれですか？左様、善い犬です——野兎を捉りますよ、と、一年前に自分の農奴三家族を遣つて交換した牝犬のヨオルザのことを、イラアギンは事もなげに、かう言つた。そんな譯で、彼等は收穫の多いのを自慢しませんよ、と、イラアギンは以前からの談話を更に續けた。が、若伯爵のお世辭に答へ返へすのが當然の禮儀だと氣が附いて、ラストフの犬を見渡すと、マイルカの廣い背中に眼に着いたので、それを取りあげて言つた。

「あなたの連れてゐらつしやる、あの毛並みのいい黒と黄褐色のは——真い犬ですなア！」

「え、さうです、よく駈けます、と、ニコライは答へた。「うまく、大きな兎が野へ出て來ないかなア、さうすれば、此奴の力を見せてやるがなア！」と、思つた、そして、自分の馬丁の方へ振り向いて、誰でも、野兎を追ひ出した者には一ルーアル與ると言つた。

「私には解りませんね、イラアギンは言ひ續けた。他の狩獵家達が、獲物や犬を妬み合ふのは。まあ、お聞き下さい伯爵。私は、御承知の通り、狩獵は好きです、かういふ連中と一緒に狩獵は……これに越した愉快はありませんな」(彼は、再び、ナターシヤの方へ、自分の海狸の帽子を揚げた)「しかし、獲つた獸皮の數を勘定することなんかそんな事は私には何うでも宜いんです。」

「さうですとも！」

「又、自分の犬が他人の犬に負をけ取つたところで、やきもきするやうな事は決してありませんよ——私の思ふところは、たゞ狩獵そのものがあるばかりです、さうとやありませんか、ね、伯爵？で、私の考では……」

「オー………オー………オー、その途端、一人の馬丁の長く引張る呼聲が響いて來た。その男は刈株の間の小高い所に立つて鞭を振りあげてゐた。もう一度呼んだ。オー………オー………アホ、この呼び聲と、振り上げた鞭とが野兎の蹠がんでゐるのを目前に見たといふ合圖なのだ。」

「やあ、彼奴は野兎を見つけたな、さうらしい！」と、イラアギンは、われにもなく言つた。「さあ、追ひかけませう伯爵！」

「え、勿論………だが、どうなんです、一緒にですか？」と、ニコライは、エルザと小父さんのルガアイとを熱心に見詰めながら答へた、この二匹の競争者はこれまで一度も自分の犬と並べる機會がなかつたのだ。「もし、彼奴等が自分のマイルカを最初から負したら、どうしやう？」と、彼は、小父さんイラアギンに並んで、野兎の方へ馬を驅らせながら思つた。

「大きい奴か？」と、イラアギンは、それを見付けた馬丁の傍へ行きながら、そして自分のエルザに口笛を吹いて幾干か昂奮して、身のまわりを見廻しながら尋ねた。………で、あなたは、マイル・ニカノオリツチ？」と、彼は小父さんに言つた。

小父さんは、不機嫌な顔附をして、馬を進めた。

「あなた方が私と競争したつて何うなるものですか？だつて、あなた方の犬は——あなた方は一區々に村一つ宛拂

つたんだ。何千といふ價格なんだ。あなた方はあなた方の同士でおやりなさい。私は見物しませう！」

「ルガアイ、ヘエイ、ヘエイ、と、彼は叫んだ。「ルガアシユカ！」と、附け足した。かう、愛稱で呼んで、自分の愛情を、自分がこの赤犬に希望を置いてゐるさういふ事を、われにもなく。言ひ表はした。

ナターシヤは、この二人の年上の人と自分の兄とが、胸にかくしてゐた感情が解かり、自分もそれを感じて、昂奮してゐた。小高い所にゐる馬丁は、鞭を揚げて立つてゐた。紳士たちは、並足でその方へ馬を進めた。獵犬の群は地平線の上を、野兎からだん／＼遠ざかりつゝあつた。そして、紳士でない獵人達も亦、遠ざかりつゝあつた。何もかも静かに、そして慎重に爲されてゐた。

「どつちの方に頭があるんだ？」と、馬丁の方へ百歩ほど行つてから、ニコライが尋ねた。が、馬丁がそれに答へる前に、地べたへ鼻をつけて、翌朝霜の下りることを嗅ぎわけてゐた野兎は、その跳び込んでゐた地点から跳び上つた。革紐に繋がれてゐた獵犬の群は、吠えながら、野兎の後から丘を飛び下りた。革紐に繋がれてゐない兎獵犬は獵犬共の方へ、又は野兎の方へと、八方から突進した。それまでは非常のゆる／＼動いてゐた獵犬係達は、「止まれ！」の呼び聲で犬共を一所に纏めやうとして、野を駆け廻り、獵師たちは「オ……オ……オ……アホオイ！」の掛聲で、犬共の方向を指圖した。今まで非常に落ちてゐたニコライも、ナターシヤも、それから、小父さんも、それから、イラアギンも、何うしやうの、何處へ行かうのさういふ事はなく、犬と野兎の外には眼もくれず、只管、狩獵の方向を見失なうまいとのみ心を配つて、前の方へ飛んで行つた。

飛び出したところを見ると、その野兎は速い奴であつた。跳び上つた時、直ぐには駈け出さず、耳を突つ立て、一時に諸方からやつて来る叫聲や、蹄の音やを聞き澄ましてゐた。餘り速くない跳び方を暫らく續けて、犬に近づか

れたが、やがて、自分の危険なのに気がつくさ、方向を選び、耳を後へ引いて全速力で跳びだした。彼は刈株の間に蹠がんでゐたのだが、その前面には緑色の野があつて、其所は沼のやうな土地であつた。それを発見した馬丁の二匹の犬が、一番近いところにゐた、そしてこの二匹がそれを追ひかけた最初のものであつた。が、この二匹が、野兎に近づけないでゐるうちに、イラアギンの黒と黄褐色のエルザが二匹を飛び越し、一ヤード以内に迫り、野兎の尾を目掛けて、恐ろしい速さで跳び付いた。そして確かに捉まへたと思つて、轉がった。

野兎は背を丸くした、そして、以前よりも一層すばやく跳んだ。背幅の廣い、黒と黄褐色のミイルカが、エルザの前へ飛び出でケン／＼野兎に追ひつきだした。

「ミラシユカ！小さいお母さん！」と、ニコライは得意になつて叫んだ。ミイルカは、野兎に跳びつかうとしてゐるらしかつた。追ひ付いて、そして飛び越して了つた。野兎は體を廻した。再び、姿のいゝエルザが追ひかゝつた、そして、今度こそは、腰の所で野兎を噛みさめることを過らぬやうにと、距離を測つて居るかのやうに野兎の尾に接近して行つた。

「エルシンカ！小さい妹！」と、イラアギンが、自分の聲でないやうな聲で呻いた。エルザは彼の勵ましに気が付かなかつた。エルザが野兎を將に捉まうとしてゐるやうに見えたその途端、野兎は身體を廻して、刈株と緑色の野との間の壕へ跳びこんだ。再び、エルザとミイルカとが、一對の馬のやうに列んで駈けながら、野兎を追ひかけた。野兎は壕の中では工合が好かつた、犬共は以前ほど速く彼に追ひ付くことが出来なかつた。

「ルガアイ！、ルガアシユカ！、進め——駈け足、と、この時、別な聲が叫んだ。と、小父さんの肩幅の廣い赤犬のルガアイが、背を伸したり曲げたりして、先當の二匹の犬に追ひ付いた。追ひ越した。そして、全く捨身になつて、野兎に眼正面に飛び掛つて、それを壕の中から緑色の野へ追ひ出した。沼地のへ膝までもぐりながら、もう一

度前よりも一層荒々しく野兎に跳びかゝつた、背を泥まみれにして、野兎と一緒に轉がつてゐる犬が見えるばかりであつた。

他の犬共は、その周圍に、ある星座の形を造つた。

やがて、連中全體が、群れてゐる犬の周圍に馬を止めた。小父さんが獨り有頂天になつて馬から下りた。そして、野兎の足を切り捨て、胴から血を振ふひ落して、昂奮して眼をバチ／＼させ、手や足をビク／＼動かしながら、身のままはりを見廻した。彼は、自分の喋ることが何の事か、とか、誰に向つてしてゐるんだ、とかいふ事には一向頓着なしに話し續けた。

「Christoye dyelo marsch! つて、こんなんさ……どうだ、い、犬だらう……此奴は皆を追ひ越したんだ……」
 奴等が千ルーブルしやうが、一ルーブルしやうが……Christoye dyelo marsch! 確かに、と、彼は、誰かを罵つてゐるかのやうに、又、四圍の人達がみんな自分の敵であつて、自分を侮辱してゐたのを、今になつて始めてそれに報ひることが出来たさでもいふやうに、喘ぎ／＼、腹立たしげに四圍を見廻しながら言つてゐた。「君達の千ルーブルの犬は、まあそんなものだ……Christoye dyelo marsch! ルガアイ、それだ、と、彼は今切り落したばかりの野兎の泥だらけの足を犬に投げて遣つて言つた。「お褒美だ——Christoye dyelo marsch!」

「奴は疲れ切つちやつたんだ——自分だけで彼奴を三度まで追ひ詰めたんだから、と、ニコライは、誰の言ふことにも耳を貸さず、又、自分のいふ事を人が聞いてゐるやうが、ぬまいがそんな事には一向構はずに言つてゐた。

「確かに、あゝいふ風に横に断れば、と、イラアギンの馬丁が言つてゐた。

「だつて、あんな風にやり損なつたのを、又追ひつめるんなら、勿論並の飼犬だつて捉まへる事が出来るさ、と、同時に、イラアギンは、駈けたのさ昂奮したのさで赤くなつて、喘ぎ／＼言つた、同時に、ナターシヤは、みんなの耳をモソ／＼させるやうな鋭い叫聲をあげて、それで自分の喜びしささ昂奮さを漏らした。その叫聲で、彼女はみんなが話してゐた事柄を一遍に言ひ表はしたのであつた。彼女のその叫聲は、もしそれが他の時であつたら、自分自身も調子外れのその叫び聲を耻しく思つたに相違ないし、他の人達も吃驚させられたに相違なかつた位、奇異なものであつた。

「小父さん自身は、野兎の體を圓く狂げて、それを自分の馬の背へ巧く氣取つた様子に投げかけ、その身振りで皆をたしなめてゐるやうな風をした。そして、誰にも物を言ひたくないといつた様子をして、自分の栗毛馬に乗つて行つて了つた。

彼の外はみんな、元氣なくガツカリして、馬を進ませて行つた。そして暫時して漸つと、彼等は舊のやうな、こたはりのない様子に歸へる事が出来た。その後長いこと彼等は、圓い背中を泥だらけにして、革紐の輪をチヤ／＼いはせながら、勝利者らしい落着いた様子をして小父さんの馬の後を歩いてゐた赤犬のルガアイを凝つと見詰めてゐた。「野兎を追ふ問題になるまでは、私は外のものと同じやうだが、いざいふ時になつたら用心なさるが良し！」かうその犬の様子が言つてゐるやうに、ニコライには思はれるのであつた。

大分経つて、小父さんがニコライの所へやつて来て、何か話しかけた時、彼は、手柄をしたあさで小父さんが、自分に話をする氣になつて呉れたのを得意に感じた。

七

イラアギンが別れて歸つて行つてしまふと、ニコライは自分が自家から非常に遠く來過ぎてゐた事に氣が付いたので、小父の招くがままに、狩獵を止めて、その夜は小父の小さな領地なるミハイロウカに泊る事にした。

「それで君たちが皆私の所に來られる事に決れば——そら行け、進めだ！」と伯父は言つた。それが一番いゝだらうね、天氣は温々して居るし、君たちも休めるし、そして小さい伯爵令嬢は板馬車に乗せて歸す事が出来るし。その招待は受けられた。一人の獵師がオトラドノエまで板馬車を呼びに遣られた。そしてニコライと、ナターシヤと、エチャと小父の家に馬車を進めた。

五人の従僕が——子供も大人も——主人を出迎へようとする正面の階段に走り出た。婆さんや若いのが幼いのが、澤山の女共が、やつて來た狩獵家たちを見ようとする後方の入口から覗いた。ナターシヤの居るのが——女で、而もお嬢さんで、馬に乗つて居るのが——小父の家の召使たちに非常な好奇心を起させたので、彼等の多くはナターシヤの傍に寄つて來て、その顔をじろくぞ眺め、眼の前をまかはず、まるで彼女が人間ではなく、傍で言つてゐることなど聞えもしなければ解りもしない、何か見せ物の怪物でもあるやうに、いろくぞ取沙汰をした。

「アツンカ、あれ見る、横つちよに乗つてら！ あんな具合に坐つて、女袴をひらくとして……それに見るよ、あの小さい角笛を！」

「活潑でねえか！ それに小刀もな……」

「全く驕縦の女だね！」

「お前様アどうして轉がり落ちれえだね？」——一番無遠慮な男が大膽にもナターシヤに向つてかう話しかけた。

小父は木々の繁つた庭に包まれてゐる、小さな木造の家の階段の處で、馬を下りた。家内の者を一人々々見まはしてから、彼は用のない者には引つ込んでゐるやうに、又さうでない者には客人を款待す準備をよく整へて置くやうに、嚴かに命じた。

召使たちは四方へ駈け散つて了つた。小父はナターシヤを馬から助け下ろして、腕を貸し與へながら、ゆらくする板の階段を昇つて行つた。

板張りて膝喰の塗られてない壁に取り巻かれた家の中は、大して清潔ではなかつた、その中に住んで居る人たちが汚點一つでも拭き去らうといふのを第一の目的としてゐる風は見えなかつたが、と云つてだらしなくしてゐると云ふ風も少しもなかつた。入口には新鮮な林檎の香がしてゐた、壁には狐の皮や狼の皮などが掛けられて居た。

小父は客人たちを支關から、疊み卓子や赤い椅子のある小さな廣間に案内して、それから圓い樺の木の子と長椅子のある客間に連れて行き、更に又ぼろくろの長椅子と、磨り切れた絨氈と、そしてスウアルロフや、自分の父母や、軍服を著た自分やの肖像のある書齋に導いて行つた。書齋は煙草と犬とのひどい臭ひがしてゐた。書齋に這入ると、小父は客人たちに腰を下ろして、くつろいで下さいと言つて、そして出て行つた。ルガアイも這入つて來たが、まだ背中の泥だらけのまゝであつた、舌と齒で自分の身體を掃除しながら、長椅子の上に横になつた。書齋から一條の廊下が出てゐた、そこにはぼろくろの帳のついて居る衝立が見えた。その衝立の彼方から女の笑聲や囁きが聞えて

来た。ナターシャとニコライとベエチャとは外套を脱いで、長椅子の上に腰を下ろした。ベエチャは腕枕をして直ぐに寝入つて了つたが、ナターシャとニコライとは物をも言はずに坐つて居た。彼等の顔は上氣してゐた、ひどく腹を空かして居たが、又ひどく快活でもあつた。彼等は互ひに眼を見かはした——今や狩獵も終つて家の中の人となつて見れば、ニコライももう妹に對して、自分の男たる優越さを示さずにはゐられないと云ふ氣もなくなつた。ナターシャは兄を見て眼をしばだいた、そして二人ともう到底我慢が出来なくなつて、笑ふ口實を工夫する餘裕もなく、どつそ笑ひ出して了つた。

一寸間を置いてから、小父はコザツクの上衣に、青いズボンに、小さな高頂長靴といふ服装で這入つて来た。所でこの服装は、ナターシャがオトラドノエで、伯父がそれを着て居たのを見た時には驚き且つ可笑しがつたものであつたが、今こゝでは立派な服装で、フロツクコートや普通のジャケットにも決して劣らないやうに思はれた。伯父も、亦大感機嫌がよかつた、この兄妹の笑ひに氣を悪くする所が、彼は彼等が自分の暮しの様を笑ふなどは想像することも出来なかつたのである、その故もない大笑ひに自分も一所になつて了つた。

「や、この若い伯爵の嬢さんは——そら行け、進めだ——私はこの娘がこんなに駈けたのを見たことがない！——」彼は言つて、ラストフに長い方のパイプを與へながら、自分のためにはもう一つの——短かい壞れた方の——パイプに煙草を填めた。

「終日鞍の上に居て——男だつて自慢が出来る程なのに——而も何事もなかつたま云ふやうに元氣で居るんだから——」

間もなく屏が開いた、その音から察すると、明かに裸足の女中であつた、そして二重頭の、眞赤な唇をした、肥つ

た、頬の赤い、奇麗な四十格好の女が、手に大きな盆を持つて這入つて来た。眼にも、凡ての身體のこなしにも、客をもてなす禮儀と謹みとをうかべて、客人たちの方を見廻しながら、氣持のいい笑顔をして恭々しくお辭儀をした。

法外に肥り過ぎて居るため、頭を反り回らせて、その胸をも、そのぶくぶくした身體全體をも、前方に突き出す様にしなければならぬにも拘らず、この女（小父の家の女中頭）は非常に輕快に歩いた。卓子の所へ行つて、盆を下に置いて、それから肥つた、白い手で、卓子の上の上手に壺や皿を列べた。その仕事を終ると出て行きかけたが、一寸の間扉口の所に笑顔を見せながら立ち止つた。

「私なんですよ——私がその女なんです！さア、あなた方は小父がお解りになりました？」彼女の様子はラストフにう言つてゐた。誰が解らない者があらうぞ？、ニコライばかりでなく、ナターシャでさへ今は伯父を了解した。伯父の皺めた眉の意味を了解した、そしてアニーシャ、ヒョードロウナが這入つて来た時に、その唇に皺となつて表はれた、嬉しうな、又満足さうな微笑をも了解した。盆の上にはリキエウ酒や、藥草ブランディや、木茸や、酪漿でこしらへたライ麥粉のビスケットや、蜂の巢に這入つたまゝの蜜や、蜜でこしらへた泡の立つて居る、蜜糖水や、林檎や、生の胡桃や、焼いた胡桃や、それから蜜漬の胡桃などがあつた。それからアニーシャ、ヒョードロウナは蜜や砂糖でこしらへた菓子と、ハムと、焼きたてのチャンスを持つて来た。

かういふ御馳走は總てアニーシャ、ヒョードロウナがこしらへたり、料つたり、保存したりしたものであつた。總てがまるでアニーシャ、ヒョードロウナの香ひが、アニーシャ、ヒョードロウナの味がするやうに思はれた。總てが彼女の快活さと、清潔さと白さと、氣持のいい微笑を呼び起させるやうに思はれた。

「どうぞ少しでも、お嬢様、彼女はそれからそれとナターシャに食べ物を渡しては、かう言ひつけてゐた。ナター

シヤはどれもこれも悉く食べて見たが、かう云ふ酪漿の乾菓や、かういふ甘い砂糖漬や、かう云ふ蜜漬の胡桃や、かういふ雞糞などは、これ迄何處でも見たこともなければ食べたこともないやうな気がした。アニーシヤ・ヒョードロウナは出て行つた。ラストフ小父は、食後にチェリー火酒を啜りながら、過去や未來の狩獵の話や、ルガアイの話や、イラアギンの犬の話などをした。ナターシヤは長椅子の上にきちんとして坐つて、眼を輝かしながら聞いて居た。彼女は幾度も「エチャを起して、何か食べさせやうとしたけれども、エチャは眠ぼけてゐるらしく、聯絡のない返事ばかりした。ナタシヤはこの新しい周圍に非常に暗々とした満足した氣持になつて、板馬車が自分を餘りに早く迎ひに来過ぎはしないかと、そればかりを心配してゐた。沈黙がふさ一同の上で落ちた後で、これは始めて自分の家に友達を招いた人にはよく有り勝ちなことが、小父は客人たちの心中の考へに應じて、かう言つた。

「さうだ、君たちの御覽の通りに、私はこんな風に毎日を送つて居る……人間は死んでしまへば——そら行け、進めだ——もう後には何も残らないからな。だから何で罪なことがあるものか！」

「かう言つた時、小父の顔は意味深くも、美しくさへも見えた。ラストフは小父の言葉を聞いてゐる中に、自分の父の隣人たちが小父に就いて話してゐるのを聞いている／＼の善い事を思ひ出さないわけには行かなかつた。この地方の到る處で、小父は最も寛大な且つ公明な時人だといふ評判を取つて居た。家内の喧嘩の仲裁を頼まれた。遺産管理人に選ばれたが、秘密を打明けられもした、裁判長に推された、その外それに似たい／＼な位置に就く事を依頼されたが、併し彼はいつも頑固に公けの任命を辭退して、秋と春とは栗毛の馬に跨つて野に出て、冬になれば家の中に閉居し、夏は自分の家の生ひ繁つた庭に横たはつて暮すのであつた。

「どうして役にお就きにならないのです、小父さん？」

「曾ては役に就いたこともあつたが、振り捨て、了つたのだ。私はそれには適さない。何の役にも立たない。それは君たちの仕事だよ。私にはさういふことの才がない。ところが、狩獵となるさ全く別問題さ、何も彼もそら行け進めといふ流儀でやればいゝんだからな！その扉をお開け！」と彼は叫んだ。「何故そこを閉めたんだ？」廊下（この corridor）と言葉を、伯父はいつも百姓式に collidar と發音してゐた。端の扉は、獵師部屋——獵師たちの居間をさう呼んで居た——について居た。急がしい裸足の音がばた／＼として、見えない手が獵師部屋の方にその扉を引き開けた。すると廊下からパラライカの樂の音がはつきり聞えて來た、それは疑ひもなく上手な人によつて弾かれてゐるのであつた。ナターシヤは暫く前から夫れに聞き入つて居たのであるが、この時つとよく聞く爲めに廊下に出て行つた。

「あれは馭者のミトカだよ……私が好いパラライカを買つてやつたのだ、私はパラライカが好きでなしに伯父が言つた。彼は狩獵から歸つて來ると、男衆部屋でミトカにパラライカを弾かせるのが習ひであつた。彼はこの樂器を聞くのが好きだつたのである。

「實に巧く弾きますね！實際非常に好い。」ニコライは自分がこの音樂を好きだと云ふ事を承認するのが恥しいまでも言つたやうな、横柄な氣持をその聲の調子に帯びせながら、かう言つた。

「非常に好いですつて？」とナターシヤは兄の發した言葉の調子に感ずいて、たしなめるやうに言つた。「好いどころですが、ほんまに素敵だわ！」丁度伯父の家の木茸や、蜜や、リキユウ酒が、彼女にまつて世の中で一番甘いもののやうに思はれたのと同様に、この彈奏はその瞬間音樂的表現の最高頂として彼女を打つたのであつた。

「どうぞ、もつと弾いて、もつと弾いて、パラライカが止むや否や、ナターシヤが扉口で言つた。ミトカは調子を合

はして、震はせたり掻き鳴らしたりしながら、再びはでやかに「Barinnya」(わが姫君)を弾き初めた。伯父は座つて首を傾げながら、軽い微笑を浮べて聞いて居た。「わが姫君」の曲は幾度も幾度もくり返された。幾度もなくバラライカは調子を合はされて、同じ音が再三掻き鳴らされた。しかし聞手は少しも飽きないで、尙も幾度もなくそれを聞きながらたがるのであつた。アニーシヤ・ヒョードロウナが這入つて来て、そのぶくぶくした身體を戸柱に凭せかけながら立つた。

「大層お氣に入りましたね！」と彼女は小父と同様な突飛な笑顔をしながら、ナターシヤに向つて言つた。「あの人はそれは上手に弾くんですよ、と、かう言つた。

「あその所はいつも何うもうまく弾けない、と伯父が突然元氣な身振りをして言つた。しもつと急調にやらなければならぬんだ——そら行け、進めだ！……調子を軽く。」

「おや、あなたも弾けになれるんですか？」と、ナターシヤが訊いた。

小父は微笑んだが、答へなかつた。

「一寸見てお呉れ、アニーシヤ、ギタアに糸がちやんと附いて居るか何うかな？それを手にしないのも久しいもんだ。私はもうすつかり捨て、了つたよ！」

アニーシヤヒョードロウナは早速主人の命令を果す爲めに軽い足取で出て行つて、ギタアを持つて歸つて来た。誰の方も見ないで、小父はギタアの塵を吹き拂つたり、骨張つた指でその胴を叩いたり、調子を合はせたりして、そして低い椅子の上に身體を落付けた。少しく芝居めいた身振りで左の肘を高く張つて、脇所を押へてギタアを持つて、アニーシヤヒョードロウナの方を向いて眼をバチ／＼やりながら、「わが姫君」の初めの譜ではなく、唯純粹に音樂的

なる一階音だけを弾いた、それから滑らかに、靜かに、自信を以て、極めて緩々、かの有名な「街道に沿つて」の曲を奏し始めた。その歌の調子はニコライ・マナーシヤの心の中で、間を合し、調子を合し、同じ落付いた快さを以て震へた——アニーシヤ・ヒョードロウナの全人格に表はされてゐるやうな、あの同じ快さを以て。アニーシヤ・ヒョードロウナは眞赤になつて、ハンカチーフで顔を隠し、笑ひながら室から出て行つた。小父は形相の變つた、感極つた、顔をして、アニーシヤ・ヒョードロウナが立つてゐた場所を眺めながら、尙も注意深く、正確に、力強くその歌を弾きつづけた。笑ひが次第に顔の半面の灰色の口髭の下に浮んで来て、それが歌の進むに連れ、間の急になるに連れて、益々強くなつて来たが、ひと仕切りの亂奏が終ると、ごつと笑ひくづれて了つた。

「素敵だわ、素敵だわ、小父さん！もう一度ね、もう一度ね！」とナターシヤは伯父が弾き終ると早速叫んだ。彼女は席から飛び立つて小父に接吻してすがりついた。「ニコレンカ、ニコレンカ！」とまるで、「あなたは何か思つて？」と訊れでもするやうに、兄の方へ振り向きながら言つた。

ニコライも、小父の演奏に大變悦ばされてゐたのであつた。小父は二度その歌を弾いた。アニーシヤ・ヒョードロウナのにこ／＼した顔が再び扉口に現はれた。そしてその後には他の顔が幾つか現はれた。……「井戸より水を汲まんさて、乙女は彼を呼び止めぬ！」と小父は弾いた。彼は又も巧みな亂奏をして、そして肩を揺りながら止めた。

「まあ、まあ、小父さん！」とナターシヤは、まるで自分の命がそれ一つにかゝつて居るとも言つたやうな、嘆願するやうな泣聲を出して言つた。小父は立ち上つた、その瞬間彼の身體の中には二人の人が居る様に思はれた——一人はその愉快な演奏者の道化た風を見て眞面目に笑つた、と同時に愉快な演奏者自身は無邪氣に神妙に舞踏の前拍子の足取りを取つてゐた。

「さあお出で、可愛い姪！」最後の階音を打つた手をナターシヤに向つて振りながら、小父言はつた。
ナターシヤは身に纏うて居た肩掛を振り捨て、小父の真正面から駆け寄り、兩腕を臂に當て、肘を張りながら肩と胸を動かした。

フランスの亡命客に教育されたこの若い伯爵令嬢は、何處で、どうして、何時、その呼吸したロシアの空氣と共に、その舞踏の精神を吸ひ込んだものであらうか？パト・シヤアルがすつと以前に滅ぼして了つた、誰でも思ひ込んでゐるやうなかうした身振りを、何處で彼女は覺えたものであらうか？だが、伯父が彼女に期待した精神や動作は、あの眞似する事も教へることも出来ない、ロシア式の身振りであつた。彼女が立ち上つて、あの勝ち誇つたやうな、狡猾な快さの笑ひを浮べた時、最初のうちニコライやその他の人たちの心を襲つてゐた不安は、彼女が躍れないだらうと云ふ不安は、全くなくなつて、そして彼等は既に彼女を賞讃してゐたのであつた。

ナターシヤは上手に躍つた、躍りに必要なハンカチーフは直ぐに彼女に渡したアニーシヤ・ヒョードロワナが、眼に涙をうかべた程、實際上手に、完全に躍つた、尤もアニーシヤ・ヒョードロワナは、絹と天鵝絨の中に育つた、自分等は全く別の世界に屬して居る。この美しい、やさしい、年の若い伯爵令嬢が、尙且つアニーシヤや、アニーシヤの父や母や伯母や、そしてあらゆるロシア人の心の中にある凡てのものを理解する事が出来るのを見た時には、笑つたけれども。

「實にうまいぞ、小さい嬢さん、そら行け、進めだ！ダンスが終つた時、伯父は快活に笑ひながら斯う言つた。あ、之れこそ自慢の出来る姪だ！かうなりやもう早く好いお婿さんを探せばかりだ——それから、そら行け、進めだ！」
「一人もう探してあるんですよ。」と、ニコライが微笑みながら言つた。

「おや！」と伯父は吃驚して言つて、訊れるやうな眼付でナターシヤを見た。ナターシヤは嬉しさうな笑顔をしてうなづいた。

「そしてかういふ方なんですよ！」かう彼女は言つた。だがさう言ふと同時に、違つた、新しい、思想感情の連鎖が、心の中に湧き起つた。「ニコライが、一人もう探してあるんですよ」と言つて微笑んだのは、どういふつもりなのか知ら？あんな事言つて喜んで居るの知ら、喜んで居ないの知ら？何だかニコライは、私のバルコンスキイが今の私たちの樂しきを喜びも理解もしないだらう、さでも思つて思るやうだわ。嘘々、あの方は吃度理解して下すつてよ。何處に今あの方は居らつしやるだらう？ナターシヤはかう訝つた、さ急に顔が眞面目になつた。けれども、それは一瞬間しか續かなかつた。「そんな事考へるものぢやないわ、無理に考へたつて仕方がないわ。無理に考へたつて仕方がないわ。」さう自分で自分に言つた、そして、につこりしながら、再び小父の傍に坐つて、何かもつと弾いて下さいと頼んだ。

小父は又別の歌ミソルツを弾いた。それから、少し間を置いて、咳拂ひをする、自分の好きな狩の歌をうたひ始めた——

「日は傾き

初雪降る」……

小父は百姓たちが歌えやうに歌うたが、歌の全體の價値は歌詞にある、調子は自然に出て来るもので、歌詞を離れた調子など、云ふものはない、調子は唯詩の爲にのみ存在してゐるのだといふ十分な、卒直な確信を抱いてゐた。そしてこれが自分では無意識な小父の歌ひ方に、小鳥の歌のやうな、一種特別な魅力を與へた。ナターシヤは小父の歌

ひ方に夢中になつて了つた。自分はまだ立琴の稽古は止めて、ギタアだけを弾くことにしようと思つた。伯父からギタアを貸してもらつて、直ぐにその歌の隔音を叩いて見た。

十時に遊山馬車と、板馬車と、三人の騎馬の男が到着した、その三人の男はナターシヤとヘエチャとを探すために寄越されたのであつた。伯爵御夫妻 皆様の行先を御存知はないので大變御心配であらせられます、かうその一人が言つた。

ヘエチャはまるで死骸でもあるやうに運ばれて、遊山馬車の中に寝かされた。ナターシヤとニコライとは板馬車に乗り込んだ。小父はナターシヤに外套を着せてやつて、今迄とは全く違つたやさしさで、さやうならと彼女に言つた。小父は彼等がその詭を廻らなければならなかつた山の背まで、徒歩で川の流れを渡りながら蹤いて行つて、自分の獵師たちに提灯をもつて馬に乗つて道案内をするやうに命令した。

「さやうなら、可愛い小さな娘！」と呼ぶ小父の聲が暗の中に聞えた、その聲はナターシヤが前から聞き馴れたものではなかつたが、「日は傾き」と歌つたあの聲であつた。

彼等が通つた村には、赤い燈火がついて、快い烟の臭がしてゐた。

「何さいふいゝ小父さんでせう！」と街道に出た時ナターシヤが言つた。

「さうだね、ニコライは言つた。お前寒くはないか？」

「いえ、大變いゝ心持よ、大變に、私ほんまに幸福ですわ、ニコターシヤは言つた、屹度我ながら自分の幸福に眼が眩んでゐたのであらう。二人は長い間黙つて居た。

夜は暗くて温ぼつた。馬の姿は見えない、眼に見えない泥濘の中をびしや／＼と歩いて行く音が聞える。

かりであつた。

人生の種々様々な印象を熱心に捉へては、それを我物として行く、この子供らしく感じ易い魂の中で、一體何事が起つてゐるのであらう？何うしてさういふいろ／＼な印象が彼女の心の中に貯へられたものだらう？兎に角彼女は非常に幸福であつた。家に近づいた時分になつて、ナターシヤは突然「日は傾き」といふ歌の調子を口吟んだ、道々それを覚えようと思つて居たのだが、今やつと覚え込んだのであつた。

「覺えたかい？」とニコライが言つた。

「あなたは今何を考へてらつしつて、ニコライ？」とナターシヤはたづねた。二人は互ひにさう云ふ問題を問ひ合ふのが好きであつた。

「僕かい？」とニコライは思ひ出さうとしながら言つた。あゝ、僕は、初めはルがアイがね、あの赤犬がさ、小父さんに似て居る、若し彼奴が人間だつたら、始終小父さんを家に引きさめて置くだらう、兎に角狩のためではないにしても、音楽の爲めに引き止めて置くだらう、なんて考へてゐたんだよ。全く小父さんは面白い人だね！さうぢやないか？所で、お前は？」

「私？一寸待つて頂戴、一寸待つてね！あゝ、私ね、初めは私たちが斯うして馬車を走らして家へ歸つて行くつもりで居るけれど、こんな闇では何處へ行くか分らない、それで急に着いて見ると、オトラドノエぢやなくて、蓬萊島に行つてゐるのかも知れない。なんて考へて居たのよ、それから私かうも考へてよ……いえ／＼、それだけですの。」

「僕は知つてるよ、無論お前はあの男のことを考へて居たのさ、ニコライは言つたが、ナターシヤはその聲を聞いて、ニコライが微笑してゐるのを知つた。

「いゝえ」ナターシヤはかう答へた。その辭實際はそれと同時にアンドレー公爵の事と、公爵は吃度小父さんを好きになるだらうと言ふ事を考へて居たのである。「それから又、こんな事をくり返して考へてゐたのよ、道々くり返して考へて居たのよ、アニーシユシカの歩き振りが本當に美しいつて、ほんたうに美しいつて……」とナターシヤは言つた。そしてニコライは彼女の音楽的な、理由もない幸福な笑ひ聲を聞いた。

「そして、あなたは何う思つて？」と彼女は突然言つた。「私はい、今程幸福な、今程平和なことは又さあるまいと思ふのよ……」

「何だつまらない、馬鹿な、下らないことだ？」とニコライは言つて、そして斯う思つた。「何さいふ可愛い奴なんだらう、俺のこのナターシヤは、この女の様な友達は、俺は今まで持つたことがない、これからも又持つてないだらう何故この女が結婚しなければならぬの知らず？ いつそのこと永久にこの女さかうして馬車に乗りつけて居られたら！」

「何さいふ愛すべき人だらう、この私のニコライは！」とナターシヤも亦斯う思つて居た。

「おや！まだ客間に燈火が！」と彼女は、夜の濕めやかな、天窓絨の様な暗の中に、心を惹くやうに輝いて居る自分等の家の窓を指しながら言つた。

八

イリヤ・アンドレーキッチは貴族の式部長を退めた、さういふのは、その地位が餘りに重い費用がかかり過ぎるからである。だがその因縁は夫れによつて除かれはしなかつた。よくナターシヤとニコライとは両親の間の不安な、内密の相談に氣がつく事があつた、そしてラストフ家の豪華な祖先傳來の邸宅や、モスクワ近郊の領地などを賣るさういふ話を耳にした、伯爵がもう式部長でなくなつたからには、あのやうな大規模な變賣を張る必要もないので、彼等はオトラドノエで昔より靜かな生活を送つて居た。それでも廣大な邸宅や小家は今も尚人々に充されて、二十人以上の間が彼等と共に食卓に就くのであつた。これがみんな内輪の者さか、殆んど家族と云つてもいい、位々の長年の同居人さか、或は又伯爵家に必然住んで居なければならぬと思はれる様な人たちさかであつた。例へば音楽教師のティムレルとその細君、自分の家族を連れて來てゐる舞踏教師のフォーゲル、老夫人ピエロウとそそのほかの大勢、ムエチヤの家庭教師たちに娘の附添の老女、それから單に自分たちの家に住んで居るよりは伯爵家に居る方が、更に愉快でもあり、更に利益でもあると思つて居る連中。彼等は今迄の様に無暗に大勢の客を招待しはしなかつたが、依然として例の様式で生活してゐた、その様式を雜れては伯爵夫人は結局人生さういふものを考へることが出来なかつたのである。今も尚普通の獵の設けがあつて、而もそれが實際ニコライに依つて増されてゐた。今も尚厩には昔と同じ五十頭の馬と十五人の馬丁が居て、命名日には昔と同じ高價な贈物がなされ、近所全體に對しては儀式張つた饗宴が催された。今も尚伯爵のフイストやポストン（註一種の骨牌遊び）の勝負が開かれるが、その勝負中伯爵は誰にでも自分の手の中の札を見せるので、毎日數百ルーブルの金を近所の人々から絞り上げられるのである。そこで近所の人々はイリヤ・アンドレーキッチ伯爵と奇數勝負（註——三遍勝負と五遍勝負とを指す）をする特權を、有利な投資事業と思ひ込んでしまつたものである。

伯爵はまるで大きな網の中に這入つて、行く様に、かうした状態に陥つたのであつた、自分が巻き込まれたといふ事を信じまいと努めても、一步毎に益々巻き込まれて行くばかりで、そして自分をしっかりと締めつけて居る網を裂くにしても、或は又仔細に且つ忍耐してそれを振り解かうとするにしても、自分の力の餘りに弱過ぎるのを感じるのであつた。伯爵夫人はその情愛の深い心を以て、自分の子供たちが破産に遭はなければならないといふことや、云つて伯爵には罪がない、伯爵はかうなるより仕方なかつたのだといふことや、伯爵が自分や子供たちの破産に氣がついて一人で苦しんでゐる（尤も隠さうと努めてはゐるが）といふ事などを感じて、この境遇を回復すべき策を講じて居た。その女心には今の場合に處する唯一の道は斯ういふことしか浮ばなかつた——即ち、ニコライを金満家の後継娘と結婚させることである。彼女はこれが自分たちの最後の希望だ、若し自分が見つけてやる嫁をニコライが断るさすれば、もの自分は永久に一家の境遇を回復すべき一切の機會に別れを告げなければならないと云ふ氣がした。その嫁といふのは、立派な徳望ある両親の娘のジュライ・カラギンで、子供の頃からラストフ家に馴染んで居たが、それが今は最後まで生き残つてゐた兄弟に死なれたので、富祐な後継娘となつてゐたのである。

伯爵夫人は早速モスクワのカラギン夫人に手紙を書いて、その娘と自分の息子との結婚を仄してやつたところ、カラギン夫人から首尾のよい返事を受け取つた。カラギン夫人の返事は、自分としては全くこの縁談に直ぐにも承諾したいが、併の萬事娘の意向に従はなければならないと言ふのであつた。カラギン夫人はニコライをモスクワに來るやうに招いた。幾度も伯爵夫人は、眼に涙を浮べて、もはや二人の娘の身の振り方も付いたから、今は自分の唯一の望みは、お前の結婚を見たいと言ふ事だけだと言ふ息子に語した。若しこの事が定りさへすれば、自分は安らかに墓の中に眠ることが出来るとも言つた。それから又、非常に、娘が一人自分の眼に止つて居るのだがといふ

ことを云つては、結婚に對する息子の意見を窺はうとするのであつた。

又他の場合には、彼女はジュライを賞め上げて、休暇の間にでも暫らく氣散りにモスクワへ行つて見ては何うだと言ふニコライに勧めても見た。ニコライは母の仄しういふ事を目指して居るのを覺つて居た、で或る時さういふ話の出た場合、充分はつきりした所を話して呉れるやうに母に迫つた。母は一家の境遇を回復する一切の望みは、今やニコライがジュライ・カラギンとの結婚するに在るといふことを、有りのまゝに息子に語つた。

「何ですつて、それでは僕が若し財産のない娘を愛してゐたしたら、お母さん、あなたは實際僕に向つて、金の爲に自分の感情も名譽も犠牲にしるさ有仰るんですか？」息子は自分の間ひの殘酷な事には少しも氣がつかず、たゞ自分の高尚な感情を示さうと思ふばかりに、母に向つて斯う訊いた。

「いえ、お前は誤解してゐるのだよ」と、母は、どうして自分の過失を取り消したらいいか解らずに言つた。「お前は誤解してゐるのだよ、ニコレンカ。私はお前の幸福を望めばこそ言ふんだよ、かう言ひ足して見たもの、彼女は自分が偽りを言つてゐるのだと言ふ事を、取り返しのつかない事をしてゐるのだと云ふ事を感じた。彼女はわつと泣きくづれた。

「お母さん、泣いちやいけません、唯お母さんがさうなりたいのだと言ふ事を僕に有仰つて下さい、ね、さうすれば、僕は、あなたの御心を安める爲めに、僕の一生をも、總てのものをもさし上げますよ」と、ニコライは言つた。「僕はあなたの爲めに總てのものを、自分の感情だつても犠牲にしますよ。」

しかし伯爵夫人はこの問題をそんな風にする事を欲しなかつた、彼女は自分の息子から犠牲を受けることは欲しなかつた、寧ろ自分を息子の爲めに犠牲にしようと思つて居たのである。

「いえ、お前には私の言ふ事が解らないのだよ、もうこの話は止しませう、と涙を拭ひながら言った。

「さうだ、俺は實際は貧乏な娘を愛するかも知れん」とニコライは腹の中で思つた、「なに、財産の爲めに自分の感情や名譽を犠牲にするか？ どうしてお母さんがこんなことを言はれるのか俺には譯が分らない。ソーニヤは貧乏だから、俺は彼女を愛してはならないと云ふのだな、彼は考へた、彼女の眞美な、熱誠な愛に答へてはならないと云ふのだなだが儘かにあんなジュリイの様な人形見たいな者と一緒になるよりも、彼女と一緒に居た方が俺には餘つ程幸福に完つてゐる、自分の家族の幸福の爲めに自分の感情を犠牲にするなんて言ふことは、俺にはいつても出来るが、彼腹の中で思つた、併し、俺はその感情を支配することが出来ない。若し俺がソーニヤを愛してゐるさすれば、その感情こそ自分にまつて、何物よりも以上の、何物よりも尊いものなのだ。」

ニコライはモスクワへ行かなかつた、伯爵夫人はもう二度と結婚の話息子としなかつた、そして悲みを以て、又時によるさ激しい怒りを以て、自分の息子と持参金のないソーニヤとの間の、日増しに濃くなつて行く愛者の兆候を眺めて居た。彼女は自分で自分にそれを責めたが、それでもソーニヤを叱つたり責めたりしないでは居られなかつた、そして屢々何と言ふわけもないのに叱りつけるかと思へば、又「い、娘よ」と呼んだりした。何よりも更にこの心の親切な伯爵夫人を腹立たしたのは、この哀れな、黒い眼の娘が、非常にやさしくて、非常に善良で、悪人に對しては心から感謝して居て、そして又非常に眞實に、心變りがないで、自己を没して、ニコライを愛して居るから何うしてもその落度を見付けることが出来ないことであつた。

ニコライはその賜暇の期間を両親の許で暮してゐた。アンドレー公爵からは四度目の手紙がローマから来た。その手紙には餘程前にロシアへの歸途に着いたのであるが、温帯地で傷口が急に又開いたので、それがため新年の始

めまで歸國を延期しなければならなくなつたと書いてあつた。ナターシャはその許嫁を前の様に非常に愛しながらもその愛に煩はされることはなく、いつ何時でも人生の有らゆる快樂には没頭して行かうといふ風であつた。けれども許嫁に別れてから四ヶ月目の終り頃になつて、何うしても抵抗出来ない氣鬱症の發作に若しみ出した。彼女は自分の身が悲しくなつた、かうした時を無駄に過して、誰の役にも立たないで居るのが悲しくなつた、それと同時に人を戀し、人に戀され得る可能性を強く感じた。

人生はラストフ家に於ては花やかなものではなかつた。

九

クリスマスが来た、大祈禱會や、隣人や召使たちの眞面目くまつた又退屈な祝賀や、それから誰も彼もが着けて居る新しい法衣カウシや、さういふものを除いては、別に祝日を飾るやうな事も起らなかつた、尤も氷點下二十度の靜かな天氣さ、日中の眩しい日光さ、夜のピカ／＼した星空さは、この季節に特別な或る祭禮を要求してゐるやうに思はれたけれど。

クリスマスの週の三日目、午餐の後で、家中の人々が別れ別れになつて各自の室に歸つて行つた。それはその日の中で一番退屈な時であつた。朝の中に近所の人々を訪問して来たニコライは、休憩室で眠つて居た。老伯爵は自分の部屋で休んで居た。客間にはソーニヤが圓卓子に向つて刺繡の圖案を寫して居た。伯爵夫人はヘーシエンス(註骨牌

獨戯をやつて居た。道化者のナスターシヤ・イワノウナは、面白くない顔をして、窓の側の二人の老夫人の間に坐つて居た。ナターシヤが部屋に這入つて来て、ソニーヤの傍へに行つて、そのして居るこゝを見て居たが、やがて母の所へ行つて黙つて、そこに停んだ。

「何うしてお前は落ち付かない幽霊のやうに、うるつきまはつて居るの？」と、母が言つた。「何が欲しいんだい？」

「私あの方に會ひ度いの……今、直ぐあの方に會ひ度いんですの、ナターシヤは眼には光を浮べ、唇には微笑を浮べながら言つた。伯爵夫人は顔を上げてつくつく娘を眺めた。

「私を見ちやいやですよ、お母さん、そんなに私を見ちやいやですよ、私直ぐ泣き出してしまつてよ。」

「お坐りなさい、此處へ来てお坐りなさい」と伯爵夫人は言つた。

「お母さん、あの方に會ひ度いんですよ。何うして私はこんな風にして時を無駄にしてゐなければなりませんの、お母さん？」……聲が途切れた、涙が眼からほそほそした、そして夫れを隠さうとして、彼女は急に彼方を向いて、部屋から出て行つてしまつた。彼女は喫煙室に行つて其所に立止り、一寸思案してから女中部屋へ出かけて行つた。

そこでは一人の老女中が寒い戸外から呼吸を切らして駆け込んで来た若い娘を叱り付けて居た。

「遊びまはるのは好い加減におし、老女中が言つた、何事にも時と云ふものがあるんだよ。」

「勸忍しておやりよ、コンドラチエウナ」と、ナターシヤは言つた。「駈けて行くが好いよ、マウルシヤ、駈けて行くかいよ。」

マウルシヤを許してやつてから、ナターシヤは大廣間を通り抜けて、支關へ行つた。一人の老僕と二人の若者が骨牌をして居た。お嬢さんが這入つて来たのを見ると、彼等は骨牌を止めて立ち上つた。「私はこの者たちをど

うしよう云ふのだらう？」とナターシヤは訝つた。

「さうく、ニキタ、濟まないが行つて来てお呉れ……何處に行かせようと言ふんだつけ？……さうく、庭に行つて雄鶏を一羽持つて来ておくれ、濟まないけれど、それからミーシヤ、お前は燕麥を少し持つさいで。」

「燕麥をほんの少しで御座いますか？」とミーシヤは、愉快なてきばきした調子で言つた。

「駈けて行きなよ、急ぐんだぜ、老爺さんは、ミーシヤを急き立てた。

「ヒョードル、お前は白墨を持って来るんだよ。」

茶の間を通つた時には、その時間でもないのに湯沸を命じた。

茶の間の番人のフォーカは、家中で一番不氣嫌な男であつた。ナターシヤは自分の權力をこの男に向つて試すのが好きであつた。番人はナターシヤの命令を信じないで、湯沸がほんたうに要るのですかと訊れた。

「やれく、あなたは御立派なお嬢さまで！」と、フォーカは態とナターシヤに顔を窺つて見せながら言つた。

家中でナターシヤ程人を使ひにやつたり、召使をこき使つたりするものはなかつた。人さへ見れば何か用を言ひつけないでは居られなかつた。まるで誰一人として自分に向つて腹を立てたり悪い顔をしたりする者はあるまいと云ふ事を、試さうとしてゐるやうに見えた、それなのに誰の命令でもナターシヤの命令程てきばきと聞かれるものはなかつた。「これから何をしようか知ら？何處に行つて見ようか知ら？」ナターシヤは廊下をそろくそぶらつきながら、かう思ひ感つた。

「ナスターシヤ・イワノウナ、私の子供は何んなものだらうね？」と、女のシヤケツを着て此方に向つて来た道化者に訊れた。

「蚤に、蜻蛉に、蟋蟀ですかね、と道化者は答へた。

「あゝ！ あゝ！ いつも同じことだ。あゝあゝ、何處へ行かうか知らず？ 何をしようか知らず？」そして彼女は、二階に部屋を持つて居るフォーゲル夫妻に會ひに、靴の音をバタ／＼させながら。忙がしく梯子段を駆け上つた。二人の女家庭教師がフォーゲル夫妻と對坐して、卓子の上には乾葡萄や、胡桃や、巴且杏の皿が載つて居た。女家庭教師たちは、モスクワミオテツサと何方かが安く暮せる町だらうかといふ問題を論じ合つて居た。ナターシャは坐つて、眞面目な、だが夢見る様な顔をして、彼等の話を聞いて居たが、やがて立ち上つた。

「マダカスカル島」と、彼女は言つた。「マードーガースカル」と、各綴語をばつきりさ發音しながら繰り返した、で、その意味を聞いたシヨツス夫人には何の谷へもしないで、部屋を出て云つた。

弟のメエチャも亦二階に居た。家庭教師と共にその晩に上げる花火を作つてゐたのであつた。

「メエチャ！ ベトカ！」とナターシャは弟に向つて叫んだ。「私を階下へ連れてつてお呉れ。」メエチャは彼女の所に駆けて来て、肩を突き出して、そしてナターシャを背負ひながら得々として歩いた。「いゝえ、もう澤山よ。マダカスカル島、」彼女はかう繰り返しながら、メエチャの肩から飛び下りて、階下へ降りて行つた。

云はゞ自分の領國を視察したり、自分の權力を試して見たりして、凡てのものが從順だといふことを確めたが、それでも尙退風だとしても云つたやうに、ナターシャは大廣間に行つて、ギターを取り出し、それを持つて本棚の後の暗い隅に坐つた。低音の絃を指で弾きながら、ホテルアルクでアンドレ・公爵と一緒に聞いた事のある、或るオペラから思ひ出した一句をひき出した。他の聽人には、彼女のギターの響は何の意味をも齎らさなかつたであらうが、しかし彼女の心像には、その響が記憶の全連鎖を呼び起させるのであつた。彼女は食物部屋の戸の破目から射し込んで

居る一筋の光線に眼を据ゑながら、本棚の後に坐つて、自分で自分の音楽に聞き入つては、過去を思ひ出して居た。思ひ出を青くむやうな気分になつて居た。

ソーニヤが廣間を横切つて、杯を手にしながら食物部屋に遣入つて行つた。ナターシャは食物部屋の戸の破目から、チラリとそれを見た、するさ、以前にも丁度これと同じやうに、食物部屋の戸の破目から光が射し込んで居て、ソーニヤが杯を手にしながら通り過ぎて行つた。云ふ記憶があつたやうな氣がした。「さうよ、細い點まで一々違はず同じだつたわ、とナターシャは思つた。

「ソーニヤ、どうしたの？」とナターシャは、太い絃を指で掻き鳴らしながら、斯う呼んだ。

「まあ、そこに居らつたの？」とソーニヤは吃驚して云ひながら、傍に近寄つて来て耳を傾けた。「私には解らないわ。「嵐」なの？」と間違ふのを恐れて、おづ／＼言つた。

「おや、この人はこの前と同じ様に驚いて、そして傍へ来て、この前と同じなおづ／＼した笑ひを浮べてるわ、とナターシャは思つた。そして、又、まるで同じよ……私この人には何か缺けてるものがあると思ふわ。」

「いゝえ、「水波」の中の合唱よ、お聞きなさい。」そしてナターシャは、ソーニヤが聞き取れる程に、その合唱の節を口吟んだ。「あなた何處へ行くの？」とナターシャはたづねた。

「杯の水を變へようと思つて、丁度今圖案の彩色が出来上る所なのよ。」

「あなたは始終何かする事を見付けて居らつしやるのね、でも、私にはそれが出来ないのよ、とナターシャは言つた。「そしてニコレンカは何處に居て？」

「眠て居らつしやるでせう。」

「ソニーヤ、行つて起して来て頂戴」ニナターシヤは言つた。「私が一緒に歌ひ度がつて居るからと有つて下さい。」
彼女は稍や暫くの間坐つて居た、何も彼も皆前に一度あつたことだといふこの意味を考へたが、その問題を解決
もしなければ、と云つてその解決の出来ないといふことに別に煩悶もしないで、再びあの人と一緒にゐた時のことや
そしてあの人が戀の眼をもつて自分を眺めた時のことなどを心に思ひ浮べて居た。

「あゝ、あの方が早くいらして下されば！若しかするともういらつしやらないのではないかしら思ふわ！ それに何
よりも厭なのは、私段々年をとつて行く事よ、さう、それが一番厭なことよ。今私の持つて居るものも、その時の私
はもう持たなくなるだらう。ひよつとさするさあの方は今日いらつしやるかも知れない、直ぐこゝへいらつしやるかも知
れない。ひよつとさするさもう来て居らして、客間に坐つて居らつしやるのかも知れない。ひよつとさするさ昨日か
ら来て居らつしやるのを、私が忘れて居るのかも知れない。彼女は立ち上つて、ギタアを置いて、客間へ行つた家内
中の者も、家庭教師たちも、女家庭教師たちも、客人たちも茶の卓子に着いて居た。召使たちが卓子の周圍に立つて
居た。だがアンドレ！公爵は居なかつた、で、昔と同じ生活が依然として行はれて居た。

「よう、来たな、さ、ナターシヤが這入つて来たのを見るさ、伯爵が言つた。さあ、私の傍にお坐り。けれどもナタ
アシヤは母の傍に佇んだきり、何物かを探してもする様にあたりを見廻してゐた。

「お母さん」と彼女は言つた。「あの方を出して下さい、あの方を出して下さい、お母さん、直ぐ、直ぐ、そして又も
啜り泣きを抑へる事が出来なかつた。彼女は卓子に向つて腰を下して、老人たちや、折りから茶を飲みに入つて來
た、ニコライなどの話を聞いた。「あゝ、あゝ、昔の通りの人たちで、昔の通りの話で、お父さんは茶碗をもつて、
それを普通りに吹いてゐらつしやるわ、さナターシヤはかう思つた、そして家内中の人たちがいつも同じであること

ふ理由から、彼等に對する嫌惡の念が身内に湧き起つて來るのに戦慄を覺えた。

茶の後にニコライと、ソニーヤと、ナターシヤとは、休憩室のお馴染みの隅つこに這入つて行つた、そこで彼等の
最も親しい打明け話がいとも始まるのである。

十

「あなたはこんな事はなくつて、」彼等が休憩室に腰を下した時、ナターシヤは兄に向つてかう言つた、「もう何事も
——何事も永久に起らない、善いことはみんな過ぎ去つて了つたといふ様な氣になる事は？そして夫れは意屈といふ
氣持ではなくつて、憂鬱なのよ？」

「僕もそんなことを思ふよ！」ニコライは言つた。「あらゆる物が總て正しく、有らゆる人間がみんな愉快にしてゐ
る時などに、急に何も彼もに厭氣がさして、みんな死んでしまふが宜いといふ様な氣持になつて來ることが僕にも
時々あるよ。いつか聯隊に居た時に或る宴樂メリーキングに行かなかつたところ、音楽が演奏せられて居るんだらう……
すると僕は突然非常に寂しい氣持になつてしまつたよ……」

「あゝ、私その氣持を知つて、よ、知つて、よ、知つて、よ、」ニナターシヤは賛成した。「未だほんの小さかつた時分
でも、私始終その氣持を感じてよ。あなた覺えて居らして、いつか私が梅の實を食べて叱られた事があるでせう。
あなたたちがみんなで躍つてゐるのに、私はしく／＼泣きながら教室に坐つて居たでせう。私あの時の事が決して忘ら

を乳母に聞かされたので、ニコライが恐かつたといふ話をした。

「それから私思ひ出したわ、あなたがキャベツの下で生れなすつた云ふ話を聞いたのよ、」とナターシャが言った。
 「そんな事偽だとは知つてゐるけれど、でも私それを信じまいとはしないでね、そして大變氣味が悪かつた事を今でも覚えてゐてよ。」

この話の最中に一人の女中が休憩室に這入る扉口から頭を覗かした。

「お嬢様、みんなが雄鶏を持つて参りました、」と小聲で言った。

「もう要らないよ、ホーリヤ、彼方へ持つて行くようにつてさう言つてくれ、」とナターシャは言った。

休憩室で三人が話して居る最中に、デイルレルが室の中に這入つて来て、隅の方に置いてある立琴の所へ行つた。

布蔽はぼつを取るよ、立琴はじやらくさいふ響を立てた。「エドワルド・カールリツチ、どうぞ私の好きな、フィールド氏の夜曲を弾いて下さい、」と、客間から老伯爵夫人の聲が聞えた。

デイルレルは絃を打つた、そしてナターシャやニコライやソーニヤの方へ振り向きながら、かう言った。

「お若い方は大變お静かですな！」

「さうよ、私たちは哲學の話をして居るのよ、」とナターシャはかう言つて、一寸の間ぐるりこ振返つて見たが、そのまゝ話をつづけた。彼等は今夢の話をして居るのである。

デイルレルは弾き始めた。ナターシャは音を立てずに爪先きで卓子の所へ行つて、蠟燭を取つて、それを持つて、歸つて来て、そして靜かに自分の席に腰を下した。室の中は暗かつた、殊に彼等の坐つて居る長椅子の邊は暗かつた併し満月の銀の様な光が、大きな窓々から射し込んで、床の上に落ちてゐた。

「ねえ、私かう思つてよ、デイルレルが演奏を終つて、そのまゝ未だ坐つてゐて、もう弾くの止めようか、それとも何か新しいものを始めようかと迷つて居るらしい風で、樂器の絃を軽くなぶりながら音を立て、居た時に、ナターシャはニコライとソーニヤの方へ進み寄りながら、小聲でかう言つた。「斯うして思ひ出し思ひ出して行くでせう、さうする中には到頭この世に生れて來ない先のことまでが思ひ出せて來やしないだらうか……」

「それがつまり、メテンプシイユニス輪廻ですよ、と、學課がよく出來て、習つたことをすつかり覚えて居るソーニヤが言つた。「エグプト人は我々人間の靈魂は元動物の中にあつたのだから、再び動物の中に歸つて行くよ云ふことを信じて居たんですつて。」

「いいえ、駄目よ、私たちが昔動物の仲間だつたといふことなど私には信じられませんが、」とナターシャは、音樂がもう終つてしまつてゐるのに、相變らず前と同じ小聲で言つた。「ですけれど、私は確かに知つてよ、我々人間は前に何處か天上世界で天使だつたのが、やがてこの世の中に住むやうになつたので、それだから何事でも思ひ出す事が出来るんですわ……」

「私も仲間入りが出来ますまいか？」とデイルレルは靜かに進み寄つて来て、かう言ひながら二人の傍に坐つた。「僕等が若し天使だつたことすればだれ、何うしてこんなに墮落したいのだい？」と、ニコライが言つた。「否々そんな事があるもんかい！」

「墮落ちやないのよ……墮落したなんて誰が言つて……私が前世に生存して居たといふわけは斯うなの、」と、ナターシャは自信を以て答へた。「靈魂は不滅でせう、ね、……ですから、私が永久に生きるものとすれば、前世にも亦生きて居た事になるでせう、つまり永遠に生きて居た事になるぢやありませんか。」

「成程、併し永遠といふものを考へるのが我々には困難ですな、と、ティムレルが言った、この男は程かな、ヘリ下つた様な微笑を浮かべながら、若い人たちに加はつて来たのであつたが、今は若い人たちと同じやうに静かに、眞面目に話をした。

「永遠といふものを考へるのが何うして困難ですの？」と、ナターシャは言った。「今日があるでせう、明日があるでせう、従つて永久があるでせう又昨日があつたんでせう、そして一昨日が……」

「ナターシャ！ 今度はお前の番ですよ。私に何か歌つてお呉れ」と、いふ伯爵夫人の聲が聞えた。「何うしてお前たちはそんなに温和しく其所に坐つて居るんだれ、まるで隠謀者かなその様に？」

「お母さん、私ちつとも気が向きませんの！」とナターシャは言った、けれどもさう言ひながらも立ち上つた。

誰一人として、若くないティムレルでさへも、その話をそのまゝ止めたくないので、休憩室の隅つこから出て來なかつた、けれどもナターシャは立ち上つた、そしてニコライは翼琴に向つて腰を下した。いつものやうに室の中央に突つ立つて、一番反響の強い場所を選んでから、ナターシャは母の好きな歌をうたひ初めた。

歌ふのは氣が向かないと云つた辭に、その夜程彼女がうまく歌つた事は、前にも後にも長い間なかつた。イリヤ・アンドレーキツチ伯爵は書齋でミチエカと話をしながら、彼女の歌ふのを聞いて居たが、まるで大急ぎで學課を終つて遊びに駆け出し度がつて居る子供の様に、執事に言ひ付ける命令を間違へたりして、揚句の果ては押し黙つて了つた、そしてミチエカンも亦、その前に黙つて微笑しながら突つ立つたまゝ、聞き入つてゐた。ニコライは片時も妹から眼を離さないで、妹が呼吸をした時には自分も一緒に呼吸をなした。ソニーヤはそれを聞きながら、自分と友達との間の大きな相違を考へたり、従妹の様な魅力を持つことは、自分には何うしても出來ないといふ事を考へたりしてゐ

た。老伯爵夫人は嬉しうな、併し又憂ひ深げな微笑を浮かべながら、眼に涙を湛へて坐つて居たが、時々頭を振つた。彼女も亦ナターシャのこゝろや、自分の若い頃のこゝろや、それからナターシャがアンドレー公爵と結婚するのには、何か恐ろしい不自然なものがあるといふこゝろを考へて居たのである。

ティムレルは、伯爵夫人の傍に坐りながら、眼を閉ぢて聞いて居た。「いや、伯爵夫人、と終に彼は言つた「あれはヨーロッパ的の才能です、お嬢様には教授の必要がありません、あの和らかさ、やさしさ、か……」

「あゝ、私はあの子のこゝろが案じられる、案じられる、伯爵夫人は、誰か話をして居るのかも忘れて了つて斯う言つた。母としての本能が、ナターシャの中には或物が餘り多くあり過ぎる、それがナターシャの幸福を妨げるだらうといふことを、彼女に告げたのであつた。

ナターシャが未だ歌ひ了らなかつた中に、十四歳になるヘエチヤがひびく勢ひ込んで、假裝舞戯者の連中がやつて來たことを知らせに部屋の中へ駆込でん來た。

ナターシャは突然止めて了つた。

「馬鹿！」彼女がかう弟に向つて叫んだ。椅子に走り寄つて、その中に身を沈めてしまつて、暫らくは泣き止まなかつた程の、裂しい啜り泣きに泣き崩れた。

「何でもないんですの、お母さん、本當に何でもないんですの、もう宜うござんすよ、ヘエチヤが吃驚させるものだから、彼女はさう言つて、努めて笑はうと試みたが、併し涙は未だ流れた、そして啜り泣きが尙喉をつまらした。

假裝舞戯者たち——熊だの、トルコ人だの、居酒屋の主人だの、貴婦人などに紛した家の従僕たち——は、恐ろしい姿や、滑稽な姿をして、初めの中は、冷たい戸外の新鮮さ、華やかな感じとを帯びながら、玄關でこそくそ一

塊りになつて居た。それから、互ひに人の後に隠れ合つて、一緒に大廣間に群り込んで来た、そして最初は氣兼ねしながら、併し後にはもつと活潑になつて、氣が揃ひながら、歌をうたつたり舞踏をやつたり、舞踏に歌を合はせたりして、クリスマス遊戯を出した。伯爵夫人は假裝者たちの正體を看あらはして、彼等の服裝を笑つた後で、客間へ行つてしまつた。イリヤ・アンドレーキツチ伯爵は嗜れやかな笑ひを浮べながら大廣間に坐つて、彼等の藝を賞めた。若い連中の姿は何時か見えなくなつてゐた。

半時間後に、他の假裝舞戯者たちの間に混つて一人の硬布袴を穿いた婆さんが廣間に現はれたこれはニコライであつた。ハエチャはトルコの婦人になり、ティムレルは道化者になり、ナターシヤは輕騎兵になり、ソーニヤは焼いたコルクで眉毛と口髭を染めたサアカシア人になつてゐた。

假裝をしなかつた家内の人々が、大袈裟に驚いたり感心したりして、假裝者の正體を見抜けなかつたものだから、若い連中は誰か他の人にも見せてやらなければならぬ程、自分たちの服裝がよく出来てゐるものと思ひ込み出した。道が非常によくなつて居るので、みんなの者を轎に乗せて連れ出したいと思つたニコライは、自分たちと一緒に假裝した家の召使たちを十二人ほど連れて、彼等の所謂小父さんの所へ行かうと言ひ出した。

「いゝえ、何だつてあんなお爺さんを吃驚させようと言ふの？」と、伯爵夫人が言つた。「それにお前たちが身動きが出来ない程あそこは狭いよ。何うしても行くと言ふのなら、メリューコフさんの家になさい。」

メリューコフ夫人は、ラストフ家から四ウエルスト離れた自分の家に、いろ／＼の年格好の自分の子供や幾人かの家庭教師や、女家庭教師や、さういふ一家族を持つて暮してゐる後家さんであつた。

「それは好い思ひ付きた。お前さんと伯爵は、調子づきながら讚成した。「私が仕度をするのを待つて、呉れ、お前た

ちと一緒に行くからの、マジエツトに眼を見張らしてやるぞ。」

所が伯爵夫人は伯爵の行くのを承知しなかつた、何故かといふと、この二三日伯爵が足を悪くして居たからである伯爵は行つてはならない事に定つた、けれども若しルイザ・イソノウナ(シヨツス夫人)が皆と一緒に行くならば、若い女たちもメリューコフ夫人の所へ行つてもよいといふことになつた。ソーニヤは、いつもの恥かしがりやで無口なのにも似合はず、誰よりも一生懸命になつて、ルイザ・イソノウナに「やだと言はせないやうに説き付けた。」

ソーニヤの假裝は總ての中で最も好かつた。口髭と言ひ眉毛と言ひ不思議な程よく似合つた。誰でも彼女が非常に奇麗だと言ふ事を面と向つて言つた、で彼女はいつも似ず威勢のよい機嫌であつた。或る内心の聲が、今でなければ、一生自分の運の定まる時がないと言ふ事を彼女に言つたのである、そして男の服裝をしたその様子は、まるで別人の様に見えた。ルイザ・イソノウナは行くことを承諾した、そして半時間後に鈴の附いてゐる、四臺の轎がりん／＼と音を立てながら、凍つた雪の上を滑車で勢よく走つて来て、階段の下に着いた。

ナターシヤが最先に祝日の晴々した調子になつた、その晴々した調子は次第にそれからそれへと移つて行つて、段々々々廣がつて、終にみんなの者が霜空の中に出て、話し合ひ、互ひに呼び合ひ、笑ひ合ひ叫び合ひして、轎に乗り込んだ時には、その頂點に達した。

四臺の中二臺の轎は普通の家族用のもので、三番目のは、オルロフの有名な種馬場産の駈足馬の付いて居る老伯爵のもので、第四のは、ニコライの背の低い、毛深い、黒色の馬が轎に附けてある、彼の自用のものであつた。ニコライは、老婦人の硬布袴に輕騎兵の外套を着て、その上から帯を締めて、轎のまん中に立つて手綱を取つて居た。あたりが非常に明るいので、ニコライは月光に輝く馬具の金屬性の平圓板や、入口の柱廊で人々が立てる騒ぎに、驚いて

振り返る馬の眼などを見るこゝが出来た。

ソーニヤと、ナターシャと、シヨツス夫人と、二人の女中とが、ニコライの橇に乗り込んだ。伯爵の橇にはアイムレルが自分の妻とエチャヤをつれて乗つてゐた。他の假裝舞戯者たちは他の二臺の橇に坐らせられた。

「お前先行け、ザハアル！」ニコライは、途中で追ひ付いてやるつもりで父の馭者に向つて言つた。

アイムレル及びその仲間の一行を乗せた、伯爵の橇は、その滑車がまるで雪に凍りついてゐたようにガリ／＼音を立て、打沈んだやうな音色の鈴を鳴らしながら、出發した。橇にびつたりと身體を押し付けられて、雪の中にじつと立つてゐた橇馬は、砂糖の様に堅くてきら／＼と光つてゐる雪を蹴たてた。

ニコライは第一の橇の後につゝいた、彼の後には他の二臺の橇の物音と雪を掻き別ける響きが聞えた。初めは狭い道路を緩い足並で進んだ。庭園の側を通つた時には、葉のない木々の陰がよく路の上に落ちてゐて、それが輝やかに月光を隠した。けれども自分たちの地内を出て了ふと、青すんだ光を帯びた金剛石の様に輝いてゐる雪の野原が、四方に延々と廣がつて居て、凡てのものは身動きもせず月光に浴して居た。

時々穴があるので、眞先の橇がたりと揺れると、次も丁度同じやうにがたりと揺れる、それから又次も、斯うして橇は鐵の籠を飲めた様な靜寂を荒々しく破りながら、一臺々々續いて進んだ。

「兎の足跡が、まあ澤山な足跡！」とナターシャの聲が霜に閉ぢられた空氣に響き渡つた。

「まあ何て明るいでせう、ニコレンカ、」とソーニヤの聲が言つた。

ニコライはソーニヤの方に振り返つて、身を屈めてその顔をよく見ようとした。月光の中で、黒貂の毛皮の中から非常に近く、併し又非常に遠く——ニコライの方を覗いた顔は、黒い口髭と眉さを持つた、全く別様の可愛らしい顔

であつた。

「昔はソーニヤはいつもあつた、」とニコライは思つた。彼はソーニヤをじつとよく見て、微笑んだ。

「何うなさいましたの、ニコレンカ？」

「何でもないんだよ、」彼はかう言つて、再び馬の方に向き直つた。

橇の滑車で磨かれたり、釘を打つた馬蹄の跡で散々に切られたりしてゐる（それが月光を浴びた雪の中によく見えるのである、踏み固められた本道に出た時、馬は自分から手綱を引つて歩みを早めた。左の挽馬が、頭をもたげて自分の革紐をぐいと引いた。と、轅馬は彼方此方に搖々として、まるで「我々も始めるとするかな、でも餘り早や過ぎやしないかな？」と、訊ねでもするやうに、耳を突き立てた。ザハアルの橇は、今はすつと遠くの方に、白い雪の中に、くつきりと黒く見られた、そしてその打沈んだ音色の鈴が段々遠ざかつて行く様に思はれた。みんなはその橇から来る叫び聲や、笑ひ聲や、話し聲を聞く事が出来た。

「さあ、可愛い奴ども？」とニコライは片一方に手綱を引きながら、鞭をさる手を動かして叫んだ。風が鈴々の顔に更に思ひ切つて吹きつける様に思へるのと、益々足を早めながら挽く、挽馬の力まで、彼等はやつと何んなに早く橇が飛んで居るのかさいふ事を知つたのであつた。ニコライは後を見返つた。他の橇もころ／＼と滑車を軌ませて、叫聲を揚げたり、鞭の音をさせたりしながら、後から急いで來た。轅馬は少しも疲れた様子がなく、若し必要ならいつ何時でも幾何でも早く走るさいふ氣色を見せながら、鞭の下で力強く動いて居た。

ニコライは第一の橇に追ひ付いた。彼等は丘を下つて、河の近くの牧場に沿つた廣い踏み固めた道に出た。

「こゝはどの邊だらう？」と、ニコライは怪んだ、「どうもコソイ牧場らしい。いや、しかし、前には一度も見たこゝ

がない處らしいぞ。こいつはコソイ牧場でもテムキン丘でもなさうだ。何處だらう——些とも見覚えがないが。何だか新らしい、仙境見たやうな所だ。なあに、どうでもいいや！」そして馬に向つて叫びながら、彼は第一の橋を並んで走り出した。ザハアルは馬を引き止めて、肩までが白霜を被つて真白くなつたその顔を振向けた。

ニコライは馬の手綱をゆるめた、ザハアルも、前の方に手を延しながら、自分の馬を勵ました。

「さあ、しつかり、且那、」と彼は言った。

二臺の橋は相並んで、更に速度を早めて、突き進んだ、馬の蹄は益々早く飛び上り飛び下つた。ニコライが先になり出した。ザハアルは、尙も兩手を前に突き出しながら、手綱を持つて居る方の手を擧げた。

「馬鹿なことをしちやいけませんよ、且那、」と、彼は叫んだ。ニコライは三頭の馬を大急ぎに駆けさせて、ザハアルを追ひ抜いて了つた。馬は人々の顔に奇麗な乾いた雪をはれかけた、人々は直ぐ傍に鈴の響き、非常な早さで動いて居る馬の足音を聞き、橋の影を後に見た。四方から雪の上を走る滑車の響き、娘たちの金切聲が聞けた。再び馬を止めながらニコライはあたりを見廻した。彼の周囲には依然として、月光を浴びながら、その表面に星の撒き散らされてゐる、前と同じ覺悟にかゝつたやうな平野が横たはつて居た。

「ザハアルが俺に左に曲れと呼びはつて居るぞ、だが何故左に曲るのだ？」と、ニコライは思つた。「俺達はほんたうにメリユコフの家に行かうとしてゐるのだらうか、實際これはメリユコフの所へ行く途なんだらうか？何處へ行くかとして居るんだかまるで解らない、俺達はどうなつて行くんだかまるで解らない——そして、今俺達に起つてゐることは非常に不思議で愉快だ。」彼は橋の中を見廻した。

「おや、あの人の口髭も睫毛もみんな真白よ、」と、彼の傍に坐つて居る不思議な、美しい、見馴れない人々の中の、

奇麗な口髭と睫毛を持つてゐる一人が言った。

「あれは確かに、ナタシヤだな、」と、ニコライは思つた、「それからあればシヨツス夫人だな。いやさうぢやないのか知ら、それにあの口髭のあるサアカシア人は、俺は誰だか知らないが、兎に角可愛いと思ふ。」

「みんな塞くはない？」と彼は彼等に言った。彼等は笑つて答へなかつた。後の橋からダイヤモンドルが何やら可笑しいことを叫んだか、何と言つたのか聞ききれなかつた。

「さうだ、さうだ、」と聲々が笑ひながら答へた。

所が今やゆら／＼と動く、黒い影のある、甍の様な森らしいものや、金剛石の様な輝きや、大理石の階段や、甍の様な建物の銀色の屋根などが見えたり、或る獸の鋭い鳴聲が聞えたりした。「で若しこれが實際メリユコフかださすれば、全く知りもしない所を駆け廻つた後でメリユコフカに着くなんて、何だか實に不思議なことだ、」とニコライは思つた。

それは確かにメリユコフカであつた、そして従僕たちや女中たちが燈火あかりをもつて、晴々した顔をしながら駆け出して來た。

「どなた？」と、入口から訊いた。

「伯爵の家から來た假裝舞戯者の連中だよ、馬で分らあれ、」と、數人の聲が答へた。

十一

肩幅が廣くて、威勢のいゝ女のメラゲア・ダニロウナ・メリューコフは、眼鏡を掛けて、だぶくした室内着を着て自分の娘たちに取り巻かれながら、客間に坐つて。一生懸命に娘たちを樂ませようと努めて居た。彼等は静かに水の中に溶けた蠟を滴らして、それから生ずる種々の形の影を眺めて居るさ、その時芝居に騒がしい足音や、到着した人々の聲などが聞えて来た。

驃騎兵だの、美しい貴婦人だの魔術使ひの女だの、道化者だの、熊だのが、咳をしたり、顔から白い霜を拭ひ落したりしながら、家の人々が大急ぎで蠟燭を點して居る廣間に這入つて来た。道化者——デイル——とそれから老婦人——ニコライ——とが舞踏の手始めをした。叫び廻る子供たちに取り巻かれて、假裝者たちは顔を隠したり、聲を造つたりして、女主人にお辭儀をするさ、室中に散らばつた。

「まあ、誰も見別けがつかないのね。おやナターシャ！ 御覽よ、何さ見えるだらうね！ 全く、誰か外の人だと思ひましたよ。まあエドワルド・カルリツチもよく出来るのね！ 私には誰だか分らなかつた。それに舞踏が上手だこそ！ おや、おや、サアカシア人も居るわ、驚きましたね、本當によくソニウシユカに似合ひますよ！ それから、誰、これは？ まあ、よく皆さんは面白いことをして来てくれました！ 卓子をお片付けよ、ニキタヤ、リアニヤヤ。私たちはちつとして退屈だつたところでした！」

「ハ——ハ——ハ………驃騎兵！ 驃騎兵！ まるで子供見たいだ、それに足が！ ……私ばあの男を見て居られない………」など色々の聲が叫んだ。

メリューコフ家の若い人たちに好かれて居たナターシャは、その人たちと一緒に家の奥の方の室へ行つて了つた、そして焼いたコルクだの色々の室内着だの男の衣裳だのが取り寄せられて、それが半ば開いた戸の隙間から、少女たちの裸の手で家僕たちの手から受け取られた。十分も経つ中に、メリューコフ家の若い人たちも亦すつかり假裝姿で出て来た。

メラゲア・ダニロウナは、客人たちの爲めに室を片付ける事や、接待の用意をする事などに、急しげに指圖をしながら眼鏡をかけて假裝舞戯者たちの間を歩き廻つては、歴しつけられたやうな微笑を浮べて、彼等をしげ／＼と眺めたが、誰も見別けが付かないのであつた。彼女はたゞにラストフ家の者達やデイルが見分けられなかつたばかりでなく、自分の娘たちさへも解らなければ、又娘達が着て居る男の上被服や制服をも、見極められなかつたのであつた。「そしてこれは誰なの？」カザンの鞆鞆人に紛して居る自分の顔の額を見つめながら、女家庭教師に向つて彼女は斯う云ひつづけた。「ラストフ家の誰かなんだらうね。それからあなた、驃騎兵さん、あなたは何職隊の方ですか、え？」と、ナターシャに尋ねた。「あのトルコ人に漬けた果物をお上げ、さ、食物を持ち廻つて居た家僕に言つた、「それはあの人の方の規則に禁じられてはぬないのだから。」

時には又、誰も自分たちを見別ける者がないのだと思ひ込んで恥かしさなどはまるで無くなつて了つた踏り手たちの、面白い氣狂ひ染みた足取りを眺めながら、メラゲア・ダニロウナはハンカチーフで額を隠し、その大きな身體中を、抑え切れない、人の好い、老人らしい笑ひで、震はす事もあつた。

「私のサシネットや、私のサシネットや！」と彼は言った。

ロシア舞や合唱の歌が済んでから、ヘラゲア・ダニロウナは召使側、主人側の差別なく、一同の者を一緒に集めて一つの大きな環を作らした。彼等は紐や、輪や、銀貨シルヴァー、ルーズブルを持って来て、遊戯をやり出した。

一時間後には、みんなの假装着が黴くちやになつたり薄汚くなつたりしてゐた。ユルクで塗られた口髭や眉毛は、上氣のせて汗をかいてゐる嬉しさうな顔から消えかけて来た。ヘラゲア・ダニロウナは假装舞戯者達の見別けがつき出した。彼女はそれ／＼着物の選擇の上手なこまや、それ／＼よく似合つて居るこまや、殊に若い婦人たちの出来栄ひきまねを熱心に賞め上げて、斯うした面白い慰めを自分達に與へてくれたことに對して、彼等に感謝した。客人たちは晚餐のため客間に招かれ、召使たちは廣間で馳走になつた。

「まあ、湯殿で運うんたぬ試しをするのは、全く怖うございますよ！」メリユーコフ家に住んで居る一人老嬢の口から、こんな事が言はれた。

「どうしてなの？」とメリユーコフの長女が尋ねた。

「それでね、あなた方には中々なまめ試しに行けませんよ。それには勇氣が要ります……」

「私行きますわ、と、ソーニヤが言つた。

「若い女の方がどんな事に遭つたのか聞かして頂戴、と、二番目の娘が言つた。

「え、それは斯うなんです、と、老嬢は言つた。「その若い婦人は出かけて行きました、雄鷄を一羽と、二本の小刀ナイフ、フレイグと肉又と。それから必要なものを悉く持つて行つて坐つたのです。暫らくさうして坐つて居ると、ふと誰かがやつて来るのが、——鈴のついた襦すわんを走らせて来るのが聞えます。その何者か、這入つて来るのが聞えます。その者は

全く人間の形をしてゐて、まるで將校のやうで、這入つて来る、その若い婦人の傍の、自分のために設けられた席に坐りました。」

「まあ！ まあ！……」と恐ろしさに眼をくり／＼させながら、ナターシヤが叫んだ。

「でもその人はどんなことを言ひました？ 人間らしい話をしましたの？」

「え、人間らしく話しましたよ。何も彼も普通の通りに、そして話をしかけてその婦人を自分の手に入れやうと仕初めました、婦人はどうしても鷄が鳴くまではその人を話で引つ張つて置かなければならなかつたのです、けれども段々怖くなつて来て——唯わけもなく怖くなつて来て、手で自分の顔を隠して了ひました。するとその人は婦人を捉まへました。折よくその途端に女中たちが駆け込んで来て、奥へ連れて行きました……」

「ねえ、何うしてあなたはみんなを恐からすんです？」と、ヘラゲア・ダニロウナが云つた。

「だつて、母さん、あなただつて御自身の運試たのしななすつたぢやありませんか……」と、娘が云つた。

「そして穀倉で運を試すのは何ういふやうにしますの？」と、ソーニヤが訊いた。

「さうね、丁度今時分に穀倉に行つて耳を澄ましてゐるんです。するとその聞えることに依つて——叩く音や打つ音がすれば、悪いのです、けれども穀物を飾かざふ音がすれば、善いのです。併し又どうかする、こんな事が……」

「母さん、穀倉でお遊あそびなすつたことを話して下さいましたね？」

ヘラゲア・ダニロウナは微笑んだ。

「さあ、もう忘れて了つたよ……」と彼女は云つた。「あなた方には行けないだらうね。」

「い、え、私行きますわ。ヘラゲア・ダニロウナ、私に行かして下さい、屹度行きますから」とソーニヤが云つた。

「まあ、宜しい、あなたが怖がらなければ。」

「ルウイザ・イワノワナ、よう御座んすか？」とソーニヤは訊いた。

「みんなが輪や紐の遊戯をして居た時にも、ルウアル遊びの時にも、或ひは今の様に話をして居る時にも、ニコライはソーニヤの傍を離れないで、全く今までとは變つた眼で彼女を眺めてゐた。彼にはまるで今日始めて、あのコルグでつけた口髭のお蔭で、彼女の眞價を充分に見た様に思はれた。ナターシャがこれ迄に一度も見ることがなかつたと思つた程に、その晩のソーニヤは快活で、生々してゐた美しかった。

「さう、これがこの女の本當の所なんだ、自分はこれ迄何といふ馬鹿だつたらう！」とニコライは彼女の輝く眼やその口髭の下の頬に出来る幸福さうな、酔つた様な笑顔をしながら、かう思ひつゞけた。彼は今迄そんな笑顔を一度も見ることがなかつたのであつた。

「私何にも恐くはありませんわ、とソーニヤが云つた。直ぐ行つてもよう御座んすか？」彼女は立ち上つた。みんなはソーニヤに、穀倉のある所や、そしてちつき立つてゐて耳を澄ますべき方法などを教へて、外套を渡してやつた。

彼女はそれを頭の上からすつぱり被つて、ニコライの方をチラリと見た。

「何といふ素敵な娘だらう！」と彼は思つた。「一體俺は今迄何を考へて居たんだ？」

ソーニヤは穀倉に行く爲に廊下へ出た。ニコライは暑いと云ひながら、急いで表玄関へ出て行つた。確かに室内は大勢の人むれで蒸々して居た。

戸外にはさつきと同じ静かな霜と、さつきよりも一層明るい同じ月光があつた。月の光は非常に明るく數知れぬ星の様なものが雪の中できら／＼と輝いて居るので、それがため空は却つて人の目を引かず、實際の星は殆んど氣が

付かれぬ位であつた。空は一面に暗く物凄く、地は一面に明るかつた。

「俺は馬鹿だ、馬鹿だ！ 今迄一體何を待ち望んで居たんだ？」ニコライはさう思つた、そして表玄関に走り出る。彼は裏口の方に通ずる道に沿うて家の角を廻つて行つた。彼はソーニヤがその道に出て来ることを知つて居たのだ。

途中に長さ七呎ばかりの丸太の積んである所があつた。それが雪に蔽はれて陸を投げてゐた。それを越えて、その向ふ側の、道と雪の上に葉の落ち盡した古い菩提樹の網目の様な影が落ちて居た。穀倉の壁や屋根が日光の中に、何かの寶石から削り出した様に、さら／＼と光つてゐた。庭の中で木の折れる音がボキリとして、凡てが再び全く静寂に返つた。肺臓は空氣ではなく、何か常久の青春の力と喜びといた様なものを、吸ひ込んでゐる様な氣がした。

女中部屋の入口から階段を踏む足音が聞えて來た、雪の積つてゐる一番下の階段の所にかさ／＼といふ物を碎く様な音がして、かの老嬢の聲が斯う云つてゐた。

「まつ直ぐにね、その道を、お嬢さん。方々を見廻してはいけませんよ！」

「私怖くはありませんわ、とソーニヤの聲が答へた、そして舞踏靴を穿いたその小さな足が、かさ／＼と物を碎く様な音を立てながら、その道をニコライの方へ歩いて來た。

ソーニヤは外套にくるまつて居た。彼女がニコライを認めたのは、二歩ばかりに近づいた時であつた。彼女も亦今迄知つてゐた彼とは違つた風に、いつも彼女が少し怖がつて居た彼とは違つた風に、彼を見た。彼は女の着物を着て、髪の毛をもらしてゐて、ソーニヤが今まで知らなかつたやうな嬉しさうな微笑みを浮べてゐた。彼女は急いで彼の傍へ走り寄つた。

「まるで異ふ、それで居て雨も同じだ、とニコライは、月の光を一面にかぶつてゐる彼女の顔を眺めながら思つた。

彼は彼女が頭から被つて居る外套の下に両手をさし入れて、彼女を抱擁して、自分にひき寄せて、そして口髭のついてゐる焼いたコルクの臭のする唇に接吻した。ソーニヤも彼の唇に充分接吻して、その小さい手を出しながら、彼の両頬をおさへた。

「ソーニヤ！」

「ニコレンカ！」

これが彼等が言つた總てであつた。彼等は穀倉に駆け込んで、それから各々別の扉口から、家の中へ歸つて行つた。

十二

みんながペラゲア・ダニコウナの家から歸ることになつた時、常に何事にも氣をつけて心を配つて居るナターシヤは坐席を變へて、ルウイザ・イロノウナと自分とはデイムレルと一緒に轎に乗ることにして、ソーニヤがニコライや女中たちと一緒に乗るようになった。

ニコライは、今は先頭に駆け抜けやうといふ努力もせず、滑らかに歸路に轎を走らせた。彼は始終幻想的な月光の中でソーニヤを眺めたり、断えずその眉毛や口髭の陰にちらちらと揺らめいて居る光の中に、自分のソーニヤ、昔のソーニヤ、それから何んなことがあつても決して離れまいと決心した今日のソーニヤを探し求めたり續けてゐた。彼はしげしげと彼女を見守つた、そして昔のソーニヤと新しいソーニヤとを認めて、あの接吻の動悸と混じて嗅いだ、

焼いたコルクの臭ひを思ひ出した時には、霜夜の空氣を一息深く吸ひ込んだ、それから自分たちの傍を飛び過ぎて行く地や、頭の上に輝いて居る空を眺めた時には、再び仙郷にあるやうな思ひがした。

「ソーニヤ、お前氣持が好いかい？」と彼は時々訊いた。

「え、え、ソーニヤは答へた。そしてあなたは？」

家までの道の中程の所で、ニコライは馭者に馬を止めさせて、一寸ナターシヤの轎に駆け行つて、その端の所に立つた。

「ナターシヤ、と彼はフランス語で囁いた。「僕がソーニヤのことで決心したのをお前知つてるかい？」

「あなたはあの女に話したの？」とナターシヤは、忽ち顔中を喜びに輝かしながら言つた。

「あ、その口髭と眉毛をつけてゐるさ、實にお前は可笑しく見えるよ、ナターシヤ！ お前嬉しいかい？」

「私非常に嬉しくつてよ、非常に嬉しくつてよ！ 私あなたに對して怒りかけて居たのよ、私は一度もあなたにさうさば言ひませんでした、あなたはあの女を餘りよく扱つては居らつしやいませんでしたわ。それは立派な心をあの女は持つて居るのよ、ね、ニコレンカ私、本當に嬉しい！ 私は時々恐ろしくなる事があつたね、ソーニヤはそつちのけにしておいて、自分一人幸福になるのが恥しかつたものですから、とナターシヤは言ひ進んだ。でも今は私本當に嬉しいわ、さあ、あの女の所へ駆足で歸つてお上げなさいよ。」

「いや、一寸お待ち。お、何さいふお前は可笑しな風をして居るんだ！」と尙しげんと妹を眺めて、妹の中にも昔見たこまがなかつた、或る新しい、異常な、やさしい、魅する様なものがあるのを見出しながら、ニコレンカは言つた。「ナターシヤ、まるで仙郷のやうぢやないか？ え？」

「まつたくれ」と彼女は答へた。「あなたは本當にいゝことをしたわ。」

「此の女が前からこんなだぞ知つたら、」ニコライは考へてゐた。「俺はもつと前に何うしようかと此の女に相談してその指圖通りにするんだつけ、さうすれば萬事好かつたに違ひない。」

「ではお前は喜んでくれるんだね、」と彼は言つた。「僕がいゝことをしたと言つてくれるんだね、」

「あゝ、全くいゝことですよ！ 私、つい先達その事でも母さんと喧嘩したのよ。お母さんね、あの女があなたを手に入れようぞ企んで居るぞ有仰るんでせう。何さいふひどい事を有仰るんでせう？ 私もう少しでお母さんに食つてかゝる處でしたわ。私は決してあの女のこゝを人に悪く言はせたり思はせたりして黙つておられないのよ。あの女には善くない所は一つだつてないんですよ。」

「それでは全くいゝ事だと言ふんだね？」ニコライは言つて、それが眞實かどうかを見極めるために、もう一度ちつと妹の表情を眺めた。やがて彼は鏡の臺を飛び下りて、雪の上に靴をかきかき云はせながら、自分の櫛の方へ走つて行つた。依然として幸福さうな、にこ／＼したサアカシア人が、口髭をつけ、眼を輝かせて、黒貂の頭巾の下から覗きながら、そこに坐つてゐた。そしてそのサアカシア人こそはソーニヤであつた、そしてそのソーニヤこそは今は確かに彼の幸福な、愛する、未來の妻であつた。

家に着くと、若い婦人たちはメリューコフ家で送つて来た様子を伯爵夫人に話してから、自分達の部屋へ行つた。彼等は着物を着更へて、髭などは洗ひ落さないまゝ、長い間自分達の幸福を話し合つた。自分たちが結婚したら何んな風に暮さうぞか、自分たちの夫はお互ひに友達にならせようぞか、どんなに自分たちは幸福になるだらうぞか、さう言つた事を話し合つた。

鏡が幾つもナターシヤの卓子の上に立つてゐたが、それはその晩つと早くドニヤーシヤが置いておいたもので、未來を見るさういふ言ひ傳へに従つて並べられたのであつた。

「だけど一體それはいつの事でせう？ 若しかするとそんな事はしないのぢやないかと心配になつてよ。餘り幸福過ぎるでせうね！」さう言ひながらナターシヤは立ち上つて、鏡の所へ行つた。

「坐つて御覽なさい、ナターシヤ、屹度あの方が見える事よ。」と、ソーニヤが言つた。

ナターシヤは蠟燭をさとして腰を下した。「誰だか髭を生やした人が見えるわ、」とナターシヤは自分の顔を見ながら言つた。

「笑つちや駄目ですよ、お嬢さん、」とドニヤーシヤが言つた。

ソーニヤと女中との手を借りて、ナターシヤは鏡を正しい位置に置き換へた。その顔は眞面目な表情になつて黙してしまつた。長い間彼女は坐つたまゝ、鏡に映つてゐる幾つもの蠟燭の次第に遠ざかつて行くのを眺めながら（話に聞いた通りに）先づ第一に棺を、次には彼、即ちアンドレー公爵を、最も遠い、最も朦朧とした、見え分け難い邊に見ることだらうと豫期してゐた。けれども、極く些細な影の様なものでも、それを人間さか棺さかの形として受け入れようとしてゐたにも拘らず、何にも見えなかつた。彼女は目瞬を初めて、鏡から離れた。

「他の人たちには色んなものが見えるのに、私には何にも見えないと云ふのはどうしてでせう？」と彼女は言つた。

「さあ、あなたお坐りなさいよ、ソーニヤ、あなたこそ今日はどうしても坐らなければいけなくつてよ。唯私の代りに見て下さいよ……私は今日は全く怖くて仕様がないうんですよ。」

ソーニヤは鏡の前に坐つて、正しい位置をさつて眺め始めた。

「それ、ソフィヤ・アレキサンドロウナには吃度何かお見えになるでせうよ、」と、ドニヤシヤは囁いた。「あなたはいつも笑つてゐらつしやる。」

ソーニヤはその言葉を聞いた、それからナターシヤが低い聲で、「さうよ、あの女は吃度何か見るに違ひないわ、去年も何か見たんですもの。」と言つてゐるのを聞いた。三分間程凡ての人々は黙つて居た。

「吃度見てよ！」とナターシヤが囁いた、がそれを言ひ終らぬ中に……突然ソーニヤが持つてゐた鏡から身をひいて、手で眼を蔽ふた。「あらナターシヤ！」と彼女は言つた。「何か見て？何か見て？」何をみて？とナターシヤは鏡を持つてやりながら叫んだ。ソーニヤは何にも見たのではないのであつた。丁度目瞬きして立ち上らうとしてゐる處でナターシヤの「吃度よ！」といふ聲を聞いたのである……彼女がドニヤシヤをもナターシヤをも欺さうと思つたのではないが、たゞそこに坐つて居るのに疲れたのだ。彼女はさうして、又何故自分が眼を隠した時に、自分の口からあんな叫び聲が出たのか、自分にも分らなかつた。

「あの人を見たの？」とナターシヤは、ソーニヤの手を取つて、たづねた。

「え、一寸待つて頂戴……私れ……あの人を見てよ、ソーニヤはナターシヤの云ふあの人の云ふのが、ニコライのこゝろかアン・レーのこゝろかよくは解らなかつたけれども、かう言はずにはゐられなかつた。さうして私が見たまゝ云はないで居られよう？他の人たちも色んなものを見て居るのだもの！そして、私が見たか見ないか誰れに分らう？」といふ考へがソーニヤの心の中に閃いた。

「さうよ、私あの人を見てよ、」と彼女は言つた。

「どんな風だつたの？ ねえ？ 立つてゐて、それとも臥してゐて？」

「いゝえ、私ばれ……初めは何にも見えなかつたのよ、こゝろがあの人の臥てる所が見えて來たの。」

「アンドレーが臥てたの？ 病氣なの？」とナターシヤは驚きの眼を友達に据ゑながら訊いた。

「いゝえ、それ所ですか——それ所ですか、愉快さうな顔をしてゐらして、そして私の方へお向きになつたのよ。所が彼女はかう言つてゐるうちに、實際自分が今話して居るこゝろを見たやうな氣がしてきた。」

「まア、そして夫れから、ソーニヤ？……」

「それ切りもう分らなくなつたの、何だか青だの赤だの……」

「ソーニヤ、あの人はいつ頃歸つて來るでせうね？ 私はいつ會へるんでせう？ あゝあゝ！私ばあの人のこゝろが氣になつて、自分のこゝろも氣になつて、何から何まで氣になつて仕方がないのよ……」

とナターシヤは叫んだ、そして慰めてくれやうとするソーニヤの言葉には一言の返事もしないで寢床に這入つた、そして蠟燭が消えてからも長い間眼を見開いて床の上につき横になつたまゝ、凍つてついた窓の硝子越しに、霜の様な月光に眺め入つてゐた。

十三

クリスマスの祭期が終つてから間もなく、ニコライはソーニヤに對する自分の戀を、彼女と結婚しようといふ動かすべからざる決心を母に打ち明けた。伯爵夫人はずつと前から、ソーニヤとニコライとの間に起りつゝあつた事に

氣が付いて、この發表を豫期してゐたのであつた。彼女は何の意見も述べずに息子の言葉を聞き終へると、やがて、誰を擇んで結婚しようとお前の自由だが、併し自分もお父さんもさういふ結婚に祝福を與へる事は出来ないといふことを息子に語つた。生れて初めて、ニコライは自分の母が自分に對して機嫌を悪くした事、そして自分をあの通り愛してゐるにも拘らず、母が決して自分に譲歩しないといふ事を感じた。息子の顔は見もしないで、冷淡な様子をして、彼女は夫を呼びに遣つた、そして夫が這入つて來ると、伯爵夫人はニコライの面前で、冷やかに簡単に、息子の意思を夫に話したが、自分の心を制し切れずに、やつと怒りの餘り泣き出して、室から出て行つてしまつた。老伯爵は、びく／＼した様子で、ニコライにその意思を捨て、呉れと説き勧めたり頼んだりし初めた。ニコライが自分の言葉を欺く譯には行かない、と答へたものだから、父は溜息吐きながら明らかに困惑した風で、急に話を打ち切つて夫人の所へも行つて了つた。息子の有らゆる悶着の場合に、老伯爵は自分が一家の財産を空費して了つたのを息子に對して濟まないと思つてゐるので、息子が金持の後継娘と結婚することを拒んで、何の財産もないソーニヤを選んだといふことに對して憤懣を抱く氣になれなかつた。彼はたゞ、若し一家の財産が撒き散らされてゐなかつたならば、ソーニヤ以上の好い妻はニコライには望み得られないといふ事や、ミチエンカや色々の打ち勝ち難い悪習慣と共に、一家の財産を撒き散らしたといふ責を自分一人で負はなければならないと云ふ事やを一層鋭く感ずるばかりであつた。

父も母も再びその問題に就いては息子と口を利かなかつた、けれども數日の後伯爵夫人は自分の室にソーニヤを呼び寄せて、言ふ者も言はるゝ者も共に驚いた程の殘酷さで、姪に向つて、自分の息子を誘惑したことを知らずの行ひやらを叱り付けた。ソーニヤは、伏眼になつて、黙つて伯爵夫人の殘酷な言葉に聞き入つてゐたが、自分に何うせよと云はれてゐるかは解らなかつた。彼女はその恩人たちの爲には一切のものを犠牲にするつもりでゐるのであつ

た。自己犠牲といふ思想は彼女の最も苦しむ思想であつた。併しこの場合に於ては、誰を又何を犠牲にすべきか、分らなかつたのである。彼女は伯爵夫人やその他ラストフ一家の人たちを愛さずにはゐられなかつたと共に、又ニコライを愛し、ニコライの幸福がこの愛にかゝつてゐると云ふ事を思はずにはゐられなかつた。彼女は黙つて許さ込んでゐた、何の答へもしなかつた。ニコライはもうこんな状態を辛抱することは出来ないと思ひ込んで、談判に母の處へやつて來た。ニコライは先づ自分とソーニヤとを許して、二人の結婚に用意してくれるようにと母に頼んだ。それから若いソーニヤがこの上迫害を受けるなら、自分は早速秘密に彼女と結婚して了ふと云つて母を嚇かした。伯爵夫人は息子が之れ迄に見たこともなかつた様な冷やかさを以て、お前ももう一人前の年ではあるし、それにアンドレー公爵が父の許しを得ないで結婚した例もあるしするから、お前もその通りにしたらいいだらう、けれども自分はあの奸智に長けた女を自分の娘と認めるわけには行かないといふことを答へた。

感情を賣ることを勧められたり強ひられたりしようとは思ひもかけなかつた、もうこの上は、最後の手段として自分は………だが致命的の言葉を、母の表情を見ると恐ろしさうにそれを待つてゐる様子が見える、そして恐らく永久に母と自分との間に殘虐を記憶を留めるに違ひない、その致命的な言葉を、彼は發する暇を持たなかつた。彼はその言葉を言ひ終る暇を持たなかつた、何故なら、扉口の所で立聞きしてゐたナターシャが、青蒼めた、途方に暮れた顔をして室の中に駆け込んで來たからである。

「ニコレンカ、何をくだらないことを言つてらつしやるの、シツ、シツ、シツ、シツてば………彼女が兄の聲に打ち勝たうと殆んど叫ばんばかりに斯う言つた。」